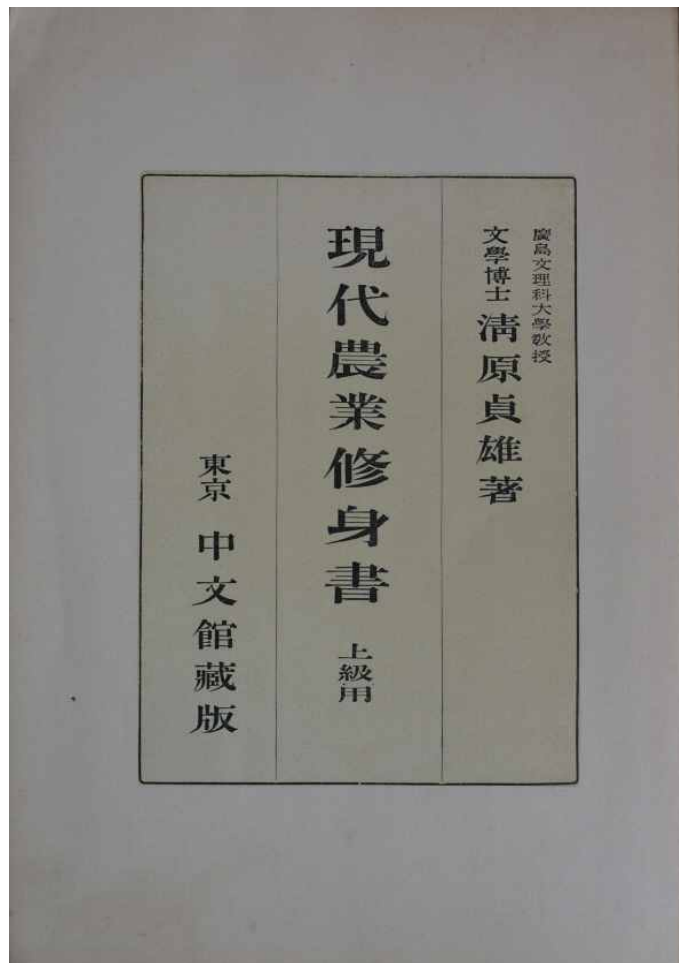


이 저작물은 크리에이티브 커먼즈 코리아 저작자표시-비영리-동일조건변경허락 2.0 대한민국 라이선스에 따라 이용하실 수 있습니다.

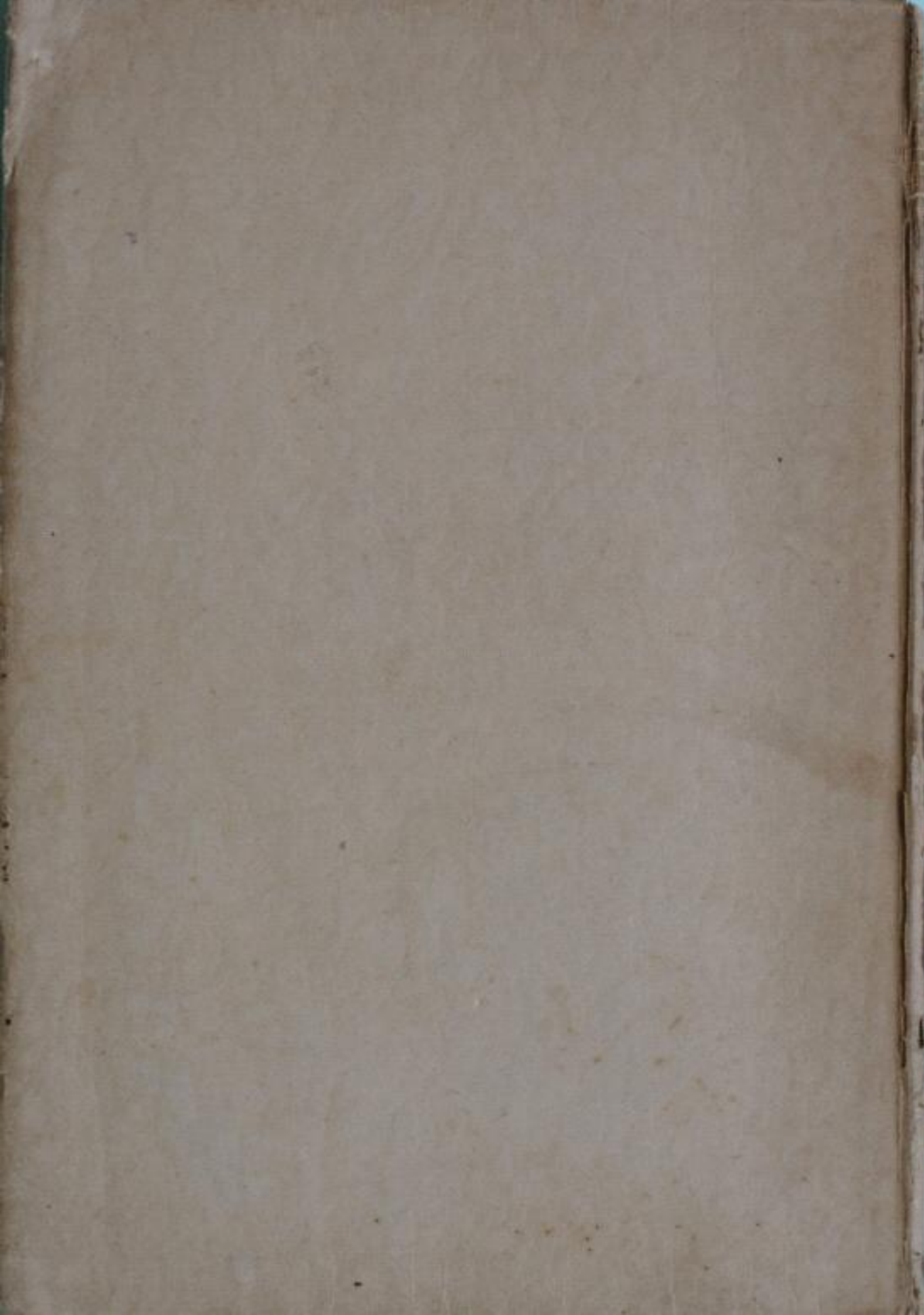
(주의) 본 자료는 본교의 교직원연수용으로 제작하였습니다.

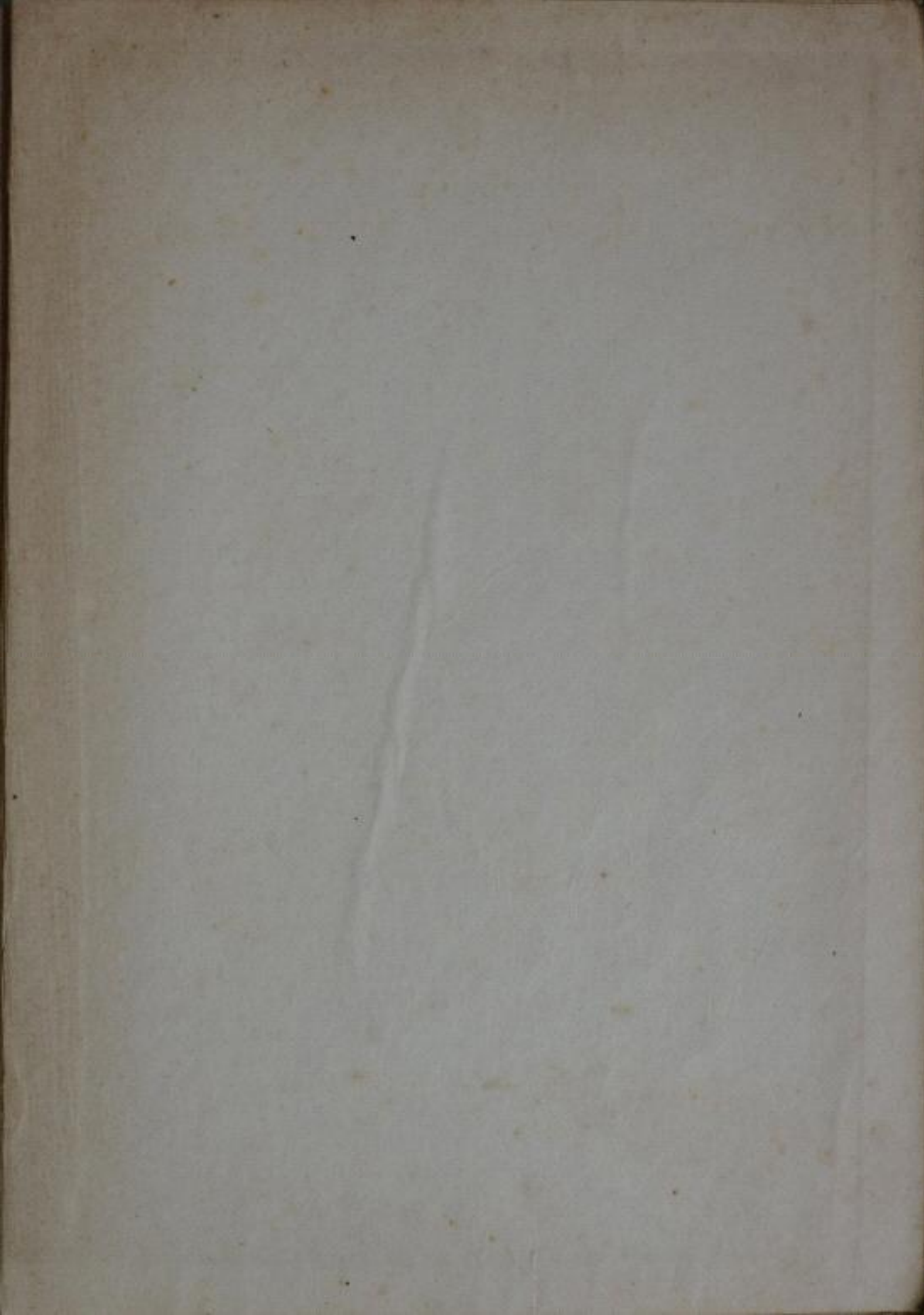
본 자료의 인용 시에는 반드시 출처를 밝혀주시기 바랍니다. (편집자)

現代農業修身書 上級用 (WEB판)



도천초등학교





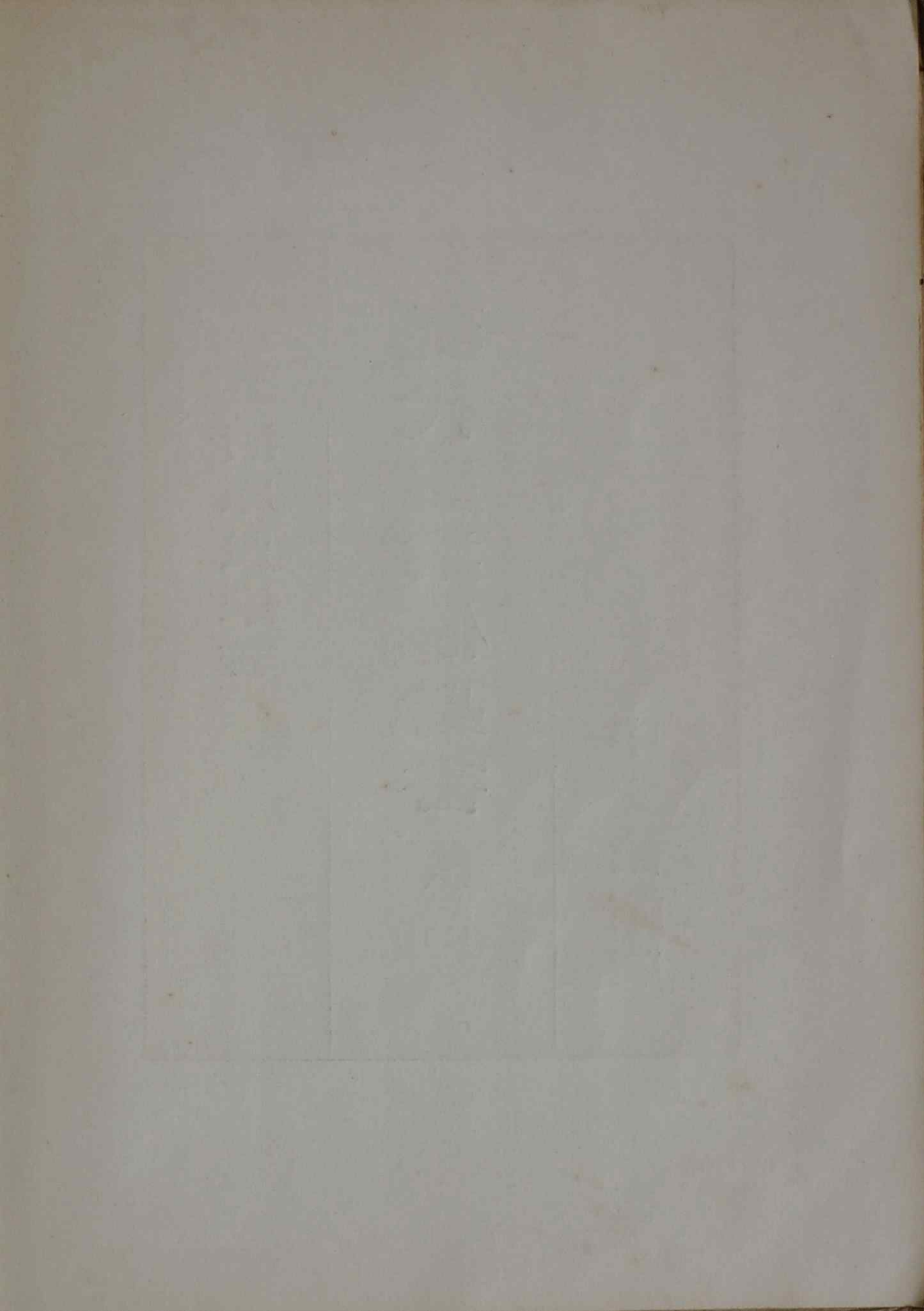
廣島文理科大學教授

文學博士 清原貞雄 著

現代農業修身書

上級用

東京 中文館藏版



例言

一、農業學校の卒業生は、直ちに實業界に出でて新しい境遇に立つのが普通である。然るに其の新境遇たるや、未だ實世間を知らざる新卒業生にとつては、全くの新天地であつて、これに處するがためには、そこに凡百の生きたる處世上の心得を必要とする。随つて今や卒業期を眼前に控へた生徒諸子にとつて、これ程切實なる要求はあるまいと思ふ。茲に於て本書では從來の修身書の行き方を排し、上級用をば特に「實業處世訓」として、専らこれらの修養に力めることにした。

二、農業學校卒業生の方向は、大體歸つて直接農業經營に従事する者と、出でて他に就職する者との二つに分けることが出来る。されば本卷に於ては、先づ職業の選擇に筆を起し、次いで農業經

營に當るべき者のために、特に農村に於ける處世訓を説き、進んで他に就職する者のために、就職に關する心得を述べ、更に是等のいづれを問はず、廣く實業界に處する上の處世道の大要を示すことに努めた。これを以て大體職業に就くに當つての豫備的修養は、積まれ得ることゝ信じてゐる。

三、併し卒業後の方向の如何を問はず、元來處世道の根本は一つであるから、本巻説くところのすべての道徳は、直接間接にあらゆる卒業生の上に適用せらるべく、各人の得るところは決して少くないと考へる。

四、將來實業界に立つがためには、特に禮儀作法の訓練を必要とするから、卷末に附録として中等作法要項を掲げておいた。これによつて十分修練の實を挙げられんことを切望する。

五、此の卷の紙數は他卷に比して非常に多いが、これは卒業期に臨

六

める特別の必要に出でたものであるから、修身科には一層の力を注ぎ、以て十分の研究を積まれんことを希望する。

本巻は所謂上級用であつて、其の修業年限の如何に拘らず、すべて最上級生徒に課すべきものであるから、他の各冊とは全然材料上の關聯なく、且つ行文も出来るだけ平明を期した積りである。されば修業年限三ケ年又は四ケ年の學校に於ても、最上級に於ては特に本巻を使用せられんことを希望する。

著 者 識

常 修 編

二、此の如き本館を刊行せしめんとするは、

一、本館編輯の編輯に本館又編輯の字の編輯は、

二、本館編輯の編輯に本館又編輯の字の編輯は、

三、本館編輯の編輯に本館又編輯の字の編輯は、

四、本館編輯の編輯に本館又編輯の字の編輯は、

五、本館編輯の編輯に本館又編輯の字の編輯は、

六、本館編輯の編輯に本館又編輯の字の編輯は、

現代農業修身書 上級用

目次

第一章 卒業後の職業……………一

- 一、最高學年を迎へて
- 二、職業選擇の必要
- 三、自己の天分
- 四、周囲の事情
- 五、社會の需要

第二章 獨立經營と就職……………一〇

- 一、自營か就職か
- 二、獨立經營の資格
- 三、獨立經營の苦樂
- 四、獨力の創業
- 五、就職する者

第三章 農村の中堅としての覺悟……………二〇

- 一、農村の中堅人物として
- 二、農村に於ける生活
- 三、崇高なる農

業生活 四、憂ふべき青年の離村 五、農村生活と感激 六、離村の

弊風打開と勇氣 七、郷土の熱愛 八、勤勞精神の振興

第四章 農村の改善に關する努力 …………… 三

一、農村の改善へ 二、農村改善の將來 三、農業經營の合理化 四、

共存共榮の精神 五、販賣方面の研究 六、地主と小作との問題

七、不況に處する態度

第五章 就職の爲めの準備 …………… 五

一、就職心得の必要 二、近時の就職難 三、就職準備の必要 四、人

格第一 五、常識の養成 六、虛榮心を斥けよ 七、其の職業を一貫

する決心 八、志望の職業に對する理解 九、健康と態度

第六章 就職を迎へる心得 …………… 三

一、就職の一路へ 二、履歴書の書き方 三、依頼の手紙 四、先輩の

紹介状 五、訪問面會の心得 六、就職不成功に處する心得

第七章 實際社會への出發……………六

一、世の中への第一歩 二、仕事を熱愛せよ 三、職業を轉換するな
四、一度入つたところは動かぬ決心 五、實務見習の態度を失ふな
六、新境遇に順應せよ 七、新聞を讀め 八、健康第一

第八章 實力才幹の發揮……………一〇〇

一、學歷の價值 二、學問よりも實行力 三、卒業は學問の打切に非
ず 四、活眼活識の要 五、組織的能力の修養 六、獨創力の涵養
七、數字の觀念

第九章 堅忍奮闘の精神……………一二三

一、新卒業生の弊 二、奮闘心の振起 三、豫定計畫の實行 四、精力
の集中 五、周到なる用意 六、成功を急ぐな

第十章 誠實勤勉の精神……………二三

- 一、成功者は皆誠實勤勉の人 二、其の日暮しの動人根性 三、自ら
經營者の心持で 四、不平は出世の禁物 五、人の二倍を働く

第十一章 生活安定の態度……………二六

- 一、始めての收入 二、經濟生活の定則 三、特に交際費の節約 四、
借金せぬこと 五、結局は人格の修養

第十二章 卒業生と母校……………二七

- 一、憧れの卒業 二、母校の支柱 三、母校愛 四、先輩の感化 五、將
來の相談相手 六、同窓の親睦

現代農業修身書 上級用

清 原 貞 雄 著

第一章 卒業後の職業

一、最高學年
を迎へて

■最高學年を迎へて 輝かしい希望に胸をおどらせながら、諸子が此の學校の門をくゞつたのは、昨日今日のやうに思はれるのに、早くも數箇年の歲月が夢のやうに流れてしまつて、今やこゝに最高學年を迎へるに至つた。斯くして待ちに待つた卒業、あこがれの實業界への門出も、最早目の前に迫つて來た。此の際往時を追懷し、又將來に想ひを致して、まことに感慨の深いものがあるであらう。併し此の際第一の問題は、何といつても卒業の曉に於て如何なる方面の職業に従事するか、

又如何にして其の職業に就くことが出来るかといふこととてなければならぬ。然して是等の問題はもと頗る大切なこととてあつて、卒業の後慌てゝそれに思ひを致すやうなことでは既に遅い。未だ一箇年の餘裕のある今日から、ゆつくりとこれを研究して用意を整へ、以て其の向ふところを誤らないやうに、深く心を用ひることが肝要である。

■職業選擇の必要 諸子が卒業後に入るべき廣大なる新天地は、全く諸子にとつては希望の國であり、光明の世界である。併しながら諸子が將來に於て、眞に其の理想を實現して、實業界の成功者と謳はれる身分にならうがためには、先づ人生の旅路の出發點に於て、諸子にとつて最も正しく、且つ最も有望なる職業を選擇しなければならぬ。尤も人生には運不運といふことがあつて、所謂人の立身出世も、成功不成功も、世の中の廻り合せに依ることがないとは言はれない。されど人の一生が、其の生れぬ先きから世の因果に由つて決つてゐるものである。

とすれば、最早我等には努力も發奮も無用である。我等は斷じてそんな獨斷的な思想に囚はれることなく、どこまでも忍耐持久其の運を開拓して通らうとする意氣の下に、勇往邁進しなければならぬ。此の意味から我等は職業の選擇其の宜しきを得た者が、大體に於て光明ある前途を拓くべき者と考へ、深く自己の職業の問題を研究すべきものと信じてゐる。勿論、農業學生の目指す方向は、大體に於て實業界といふことは決つてはゐるが、併し細かに考へると、實業に屬する職業の中にも種々の業務がある。随つてどの業務が最も自己の將來を幸福にしてくれるであらうかを研究することは、随分と困難なもので、何人も卒業の近づくにつれて、これが判定には頭を悩ますものである。兎に角諸子は、やがて擇ばんとする職業の如何が、斯くも重大なる關係に立つてゐることを思ふて、慎重にこれが研究に當らねばならぬ。

三 自己の天分 職業の選擇については種々の條件があるが、先づ第

らば、「好きこそ物の上手なれ」の譬への通り、仕事の能率もずん／＼と
擧げることが出来、又其の出来榮えをも思ひのまゝに立派にすること
が出来ろのみならず、一面に又言ひ難き仕事の趣味が油然而と湧き來つ
て、そこに全力を投じることにもなるものである。

四 周囲の事情 此の如く、自己の天分といふことは、慥かに職業選擇
の根本要件ではあるが、併し實際に於ては、自己の周囲、特に家庭の事情
がそれを許さぬやうな場合がないとも言へぬ、例へば自分が農家の
長男に生れたために、如何に學問の上に才能が秀でてゐても、都會に出
て修學するを許さないとか、又は自分は商事會社に入つて運命を開拓
したい熱望があり、又それに適した性能をも有してゐても、父祖傳來の
暖簾を繼承して家憲に従へといふ周囲の命を如何とも仕難いといふ
やうなことが、何處でも随分あるものである。此の場合に處して、斷然
是等周囲の事情を無視して、自分の志す方向に突進するは、實際に於て

實現困難なる問題であるのみならず、又それが必ずしも賢明なる方法とは言ひ難いことがある。即ちそれだけの才能天分を有つてゐるならば、寧ろ周囲の要望を納れて家業に従ひ、次第に自分を其の方面に順應せしめることに努め、若し家業の遣り方が意に充たないなら、それを新しい頭で時代に適合するやうに改造すれば、必ず相當立派な仕事が出来る筈である。加之、父祖傳來の家業は、幼少の時から見馴れてゐるのみならず、又之に従事する上に資本設備其の他多くの便宜が存するのであるから、強めて此の利便を捨てる程の理由のない限りは、大體それを承け繼いで父祖の業と、志とを遂げるのを賢明とする場合が多いものである。

然るに従來時として世間に見るやうに、父祖たる者が其の子についての理解なく、子の天分をも顧みず、是か非でも強制的に家業を繼がしめようと壓迫するが如きは、餘りに固陋な態度であつて、つまり新時代

に對する理解を缺いた考へ方に本づいた謬見である。要するに職業の選擇に當つては、自分の性能天分と家業との關係を考へ、父兄先輩の意見、周圍の事情、時勢の歩みとを綜合し、決して無謀の舉に出でないやう常に時宜に應じて、慎重なる考慮を盡くさなければならぬ。

四 社會の需要　職業選擇の第二の要件としては、社會の需要といふことである。何人でも何等かの職業に従事するは、一面に於て社會人として當然の任務ではあるが、又他面に於て、それに依つて一家の生計を營み、子女を扶養し、教育せねばならないものであるから、職業を選ぶに當つて、必ずそれと生活との關係を考慮しなければならぬ。一般から見て、社會に需要の盛んな職業に従事すれば、自ら生活の安定を得易く、之に反して社會の需要少なき職業に従ふときは、生活の資財を得難いのが普通である。さればそれらの關係をもよく考慮して、然るべき方面の職業を選び、徒らに父祖の遺産や、他人の恩惠等に依頼せず、其の

職業に依つて一身一家の生計を獨立せしめるやうにしなければならぬ、併し社會の需要と言つても、精しく考へてみると、それが永久的のもの、一時的のものがある、それで若し輕々しく一時的の趨勢に誤られるときは、其の當座は需要も盛んにあつて、面白く發展をしてゐても、やがて何時の間にかこれが需要は絶えて、事業は不振に陥ることになる、されば諸子は、必ず先づ先輩の意見を聴き、事業の將來を見越して、何時までも確實に需要の見込のあると豫想の出来る職業を擇ぶことが大切である、

さればといつて、又徒らに社會の需要にのみ眼を着けて、自分の性能の適否を顧みないやうなことで、は、勿論失敗に終るの外はない、つまり自己の長所と社會の需要とは、一體の兩面のやうなものであつて、其のいづれを輕く見ても宜しくない、されば諸子は常に其の當面の需要の狀態に支配せられることなく、汎く社會の大局と、其の事業の將來

とを見通ふすと共に、他方では自分の性能をよく考へ合はせた上で、最も萬全と信ずる方法を講ずべきである。

第二章 獨立經營と就職

■自營か就職か 諸子はこれから前章に於て述べたるが如くして、愈々卒業の後に身を投ずべき職業の方面を決定せねばならぬが、こゝに今一つ大切なことは、自營か就職かといふ問題これである。思ふに諸子の中には、卒業の曉に於て、歸つて自家の事業を承け繼ぎ、以て父祖傳來の家業の繁榮を圖り、比較的平安なる方向に進まふとする者もあらう。又中には進んで自ら獨立の事業を興し、大いに奮闘努力して、以て斷然そこに新しい境地を開拓しようとする者もあらう。又他人の經營する農場、會社、其の他各種の方面に就職して、堅實に今後の發展を圖らうと期する者もあらう。然してこれらの方向如何は、要するに自

己の志望や周圍の者の考へ方に基くものではあるが、又必ず前述の如き自己の天分並に社會の需要如何に基礎を置いて、十分慎重に考慮しなければならぬ問題である。此の如くして、諸子が將來の方針を立て、自ら獨立經營をするか、又は他に就職するかを決定すべきであるが、其の上に必要とする心得の一斑を左に述べることにしたい。

■獨立經營者の資格　獨立經營とは、言ふまでもなく自己の計算を以て營利事業を經營することである。即ち其の事業に伴ふ一切の損益を自ら負擔するのであつて、事業に利益があれば其のすべてを企業家自ら占めることが出来るに反し、若し事業に損失があるときは、當然これが全額を企業家に於て負擔せねばならぬ。此の點が、彼の他人に損益の危険を負はしめ、他人の計算によつて事業の經營に従事するところの事務員・俸給生活者とは、全く其の趣きを異にするところである。此の如く自ら全責任を負ふてする獨立經營の實際は、企業の大小、方

面の如何によつて幾分の違ひはあるが、其の大體の前途に於ては、凡そ次ぎの如きものである。即ち(一)企業家は先づ豫め市場に於ける現在並に將來に亘つて如何なる種類の品物が如何なる程度に需要されるかを測定して、其の見込を立て、(二)其の見込に應じて適當の事業を計劃し、これに要する一切の資本を調達し、設備を整へ、労働者を傭入れ、(三)進んで愈々其の事業經營に關する一切の事務並に勞役を指揮監督し、(四)斯くして生産したり、又は取得したる物品をば、適當の時期に於てこれを賣却するのである。然るに今日の生産はすべて大規模なる組織であり、之が市場は常に轉變極まりなく、其の製品に對する需要供給の關係は始終變動するものであるから、企業者は當然自分の識見を以てこれを洞察し、これに對する方策を決せねばならぬ。然かも尙ほそれが果して的中するか否か、事業が成功するか又は失敗に終るかは、一に企業家の雙肩にかゝつてゐるのである。即ち果して企業家の豫想の通

り、其の物資が生産せられるのであらうか、又はそれが豫期通りに生産せられたとしても、其の物品が果して見込通りに販賣することが出来、そこに多くの利益を擧げることが出来るであらうかは、何とも豫測し難いものである。然してこれらの危険を侵して、思ひのまゝに經營の衝に當るのが、所謂企業家である。されば斯くも至難極まる企業に任ずる者は、必ずや十分の知識と、決斷と、勇氣と、忍耐力とを兼備し、常に周到なる用意を以て事業に臨まねばならぬものである。

目獨立經營の苦樂 此の如く獨立經營に於ては、これが經營に當るものは、其の事業全般の責任を負はねばならぬために、これに要する苦心は並み大抵のことではない。即ち其の生産に於ても、其の販賣に於ても、決して豫想通りに運ぶものではなく、相手はすべて活き物であるために、時に豫期せざる業界の轉變にも遭遇すれば、又時に自分の見込や計畫が、妥當を缺いたことを發見することもある。然かも其の時々

に被るべき損失は、悉く自己一身に降りかゝるのであつて、其の爲めの慘澹たる苦心は、俸給生活者に於て、到底想像も及ばぬ程深刻なるものがある。されど又一面に於ては、爲すこととすることを悉くが、自己の自由な意見に基くものであつて、そこには何等の拘束もなく、思ひのまゝに自由に自己の手腕を振ふことが出来、延いて自己の意思の下に一貫して志す方面に活躍する其の愉快は、又事務員等に於て味ひ得べからざるものがある。然かも幸に正しき自己の識見を以て、よく業界の状況に投じ、順潮に掉して進む時は、其の大なる利得は悉く自己の富榮を加へることゝなつて、其の成功の樂みは更に一入のものがあるであらう。

四 獨立創業 獨立經營といふ中にも、父祖傳來の事業を繼いでこれが經營に當るものと、全く自分の獨力を以て新たに事業を創始して、これが開拓に任ずるものとの二つがある。然るに之が經營に於ては、兩者の間に幾分の違ひはあるが、我が國では、從來更もすれば後者の方向

を選んで名を成した所謂一代身上の人を輕蔑する傾きがないでもない。即ち舊家とか暖簾とかいふが如き父祖傳來の歴史を尊重し、そこに一種の風格を望み、彼の一代に於て名を爲し、産を作つた人々を輕視するやうな風があるが、此の如きは餘りに舊習に囚はれ過ぎた偏見であると言はねばならぬ。尤も一代に於て大身上を作つた者の中には、偶然なる風雲に乘じ、全くの僥倖によつた者もあれば、又それがために幾分の無理をした者も無いとは言はれない。併し之を大體から見るときは、斯かる人々は概して全く獨力を以て自己の新天地を開拓した一種の勇者であつて、其の成功までの奮闘史の上には、幾多の勤勉努力、隱忍持久、機智果斷等諸種の長所を備へないものはなく、常に我等に對して大なる刺戟と教訓とを與へられるのである。彼の米國に於ける近代の大富豪の如き、殆んど其のすべては斯かる一代身上の人であり、又我が國に於ける今日の大成功者、富豪と稱へられる人々の中にも、貧

家から身を起した所謂立志傳中の人士が數限りもないのは、我等が常見聞するところである。

勿論斯く獨力を以て創業する者は、誰でも大成功を収めると限つたことはないが、併し其の勇敢なる奮闘心と、溢れるやうな活氣とは、必ずや將來に亘つて何物をか力強く握らねば已まないことであらう。然かも世に斯かる氣風が横溢するに至れば、其の成敗は第二としても、これがために、我が實業界には、益々新事業も起れば、新人物も輩出するることとなつて、益々隆盛に赴き、常に活氣を保つに至るであらう。諸子は卒業後、自分の家に未だ何等事業上の歴史がなくとも、進んで是等の新企業を起し、奮闘努力以て自己の運命開拓の一途に進むことは、實に男子としての一大快事であらねばならぬ。

四 就職する者 然るに近時すべての産業を擧げて大規模の組織となり、いづれも競うて大資本を投じて、大仕掛の事業を經營するに至る

や、當然そこに多數の就業員を雇用するの必要を生ずるやうになつた。加之、一面に於て、小資本家がこれら大企業家に對抗することは、次第に困難の度を加へるに至り、自然大企業家の使用者即ち俸給生活者となることを希望する傾向が強くなつて來た。斯くして今日實業學校を卒業しても、兎角他の大企業家の下に集り、そこに就職せんことを望む者が少くないのは、つまり經濟組織の變化から來た結果であると見ねばならぬ。

然して實業界に於ける俸給生活者の實際を見るに、其の事業の危険は全く企業家の負ふところであつて、企業家のために一定の勞務を提供し、それに對して企業家から一定の報酬を受ける譯で、其の實は官公吏といはれる人々とあまり異なるところはない。されば其の日常の仕事の上から考へても、企業家から命ぜられた仕事の範圍内に於ては、幾分自分の意見を行ふことは出來ても、到底表面に立つて、全般的の仕事

を専行することは許されない。又場合によつては、全然自分の意見に反することでも、尙ほ且つ忍んでこれを爲さねばならぬことさへ決して少しとせぬ。然して其の將來を見るも、獨立企業家が一朝風雲に乗じて華々しき活躍をするやうなことは固より望まらるべくもなく、常に企業家のために所謂楦の下の方持に甘んずる位の心持を失つてはならぬ性質のものである。

されど又一面に於ては、もとゞ事業經營上の危険を負担せぬものであるだけ、大體から見ても、其の事業の盛衰如何によつて、直接其の身上に大した影響を蒙ること少く、随つて比較的安定した生活を送ることが出来るといふ長所がある。併しこれも固より絶對的のものではなく、若し其の事業にして、不振の悲境に陥らんか、忽ち失業の運命を免れざるのみならず、今日大抵のところでは、未だ失業後に於ける生計の支持方についての保險制度の如きものも完備せず、延いて將來の不安

を脱することの出来ない有様である。

此の如く考へて來ると、諸子が卒業の後に於て、實際に獨立經營に進むがよいか、又は他へ就職するがよいかについては、元來其の事業の性質や、其の人の天分、特質や、周囲の事情等、錯雜なる各種の方面から決定すべきことであつて、決して簡單には考へられない。中には又將來獨立經營を志してゐながら、暫く實際の仕事の經驗を得んがために、つまり自營の豫備的訓練として、一時他の企業家の下で仕事の見習をしようとする動機の下に、就職を志す者もある。又此の如きは實際に於て頗る意味の深いことでもある。兎に角之が決定に當つては、大體に於て上述の如き事情があることを考慮の中に加へることが肝要である。然して今日、農業學校卒業者の進路を見るに、實際に於ては、歸つて自家の農業の經營に従事する者が多いが、又中には他の企業家の下に就職口を求めたり、各官署に職を奉じたり、或は學校教員を志望したり等、つ

まり俸給生活者として身を立てんとする者も尠くはない。されば本書では、大體卒業後の方向をば、自營と就職との二方面に大別して、其の各々について將來の處世の上に必要なる心得の大要を説かうと思ふ。尙ほこれが順序としては、先づ自家の農業に従事する者のために切要なる根本態度を説き、次ぎに就職志望者に對する一般的の心得を述べ、更に其の方向の如何を問はず、共に必要とする處世訓に説き及びたいと考へる。

第三章 農村の中堅としての覺悟

■農村の中堅人物として 農業學校の目的は、農業生産の原理を明かにし、農業技術の改良に資する知能を授けると共に、又農業經營の改善を圖り、農村に於ける各種の問題に對して、之が指導に任じ得べき、所謂農村改造の中心人物を養成することに在る。されば農業學校の卒

業生は、先づ農村に在任して、直接農業の經營に従事し、常に農村の中堅人物を以て任じようとの自覺の下に、農村の改造に當るべき熱と力とを有する強い農士になることが本當の筋途である。随つて彼の徒らに空理空論を唱へて實地の經驗に乏しく、實際の農業經營に當る勇氣を缺き、兎もすれば机上の農業知識を以て、農村の人々に當らうとするが如きは、最も忌むべき傾向と言はねばならぬ。されば近く卒業期を迎へんとする諸子に於ては、斷然外面的なる虚榮や見榮に囚はれることなく、進んで郷土の地に安住して、父祖の業を承繼し、多年に亘つて學び得た知識をばこれを實地に活用して、以て家運の振興を圖るのみならず、更に進んで一村一郷の中堅人物となつて、廣く地方の農事改善のために貢獻するやうに、最も眞面目に、最も誠實に、自己の使命にいそしまねばならぬ。これ農業學校卒業者としての諸子に於て、先づ歩むべき自然の方向である。

■農村に於ける生活 然るに農業學校に學ぶ者の實際を見るに、中

には此の如き着實なる農業經營に従事するを以て飽き足らずとなし、
兎もすば或は農村を捨て、都會の地に生活を求めたり、或は勞働を厭
ひて知識的の仕事に入らうとする者が尠くない。これらの者は先づ
退いて、靜かに農村に於ける生活が如何に意味の深いものであるかを
思はねばならぬ。世間の職業には數々あるが、其の中自然に親しむこ
との最も多いのは、いふまでもなく農業である。即ち農村は自然の懷
に抱かれ、自然の恵みを最も多く受けてゐる。春は和やかな風を頬に
受けながら、新芽の伸びゆく野に土を叩き、又は早苗のそよぐを見、夏の
桑食ふ音を聴く。夏は麥の取入れを喜び、果物の大きくなるのを見て
ほく笑む。秋は青空の清く澄んだ下に、ひねもす稻刈にいそしみ、豊作
の實りを祝ふ。冬は雪の日を豊作の兆と喜びながら、やがて來ん春の
支度をする。又は山深く別け入つて、丁々と谷間に木魂して木を伐り、

或は廣い牧場に牛を飼ひ、朝まだきに乳をしぼる。斯くも平和な大自然に抱かれたながら、ゆるぎなき大地に足を踏みしめて、田に畑に親子兄弟互ひに語らひつゝ、耕作に従事する。そこには何の詐りもなく、汚れもなく、たゞ温い情愛の流れがあるのみである。勿論雨を霰く寒い日もあれば、又烈日の下に田草取る苦しみがあつてみても、彼の狭い工場や市中の塵の中に働く人達の勞苦には比ぶべくもない。

斯くして農民は自然を敬し、土地を愛し、心を傾けて作物をいたはり育て、其の收穫を俟つ。そこには聊かの輕佻浮薄の風もなく、隣人との交りは親切で、悲しい時、嬉しい時は、共に悲しみ共に喜び、吉凶禍福相扶けて恰も一家の親がある。随つて農村には他に求め難い隣保團結の美風をもつて、床しい風俗を楽しむことが出来る。然かも山高く水清く、不斷に蒼空を仰ぎ、衛生施設の不完備にも拘らず、一般に粗食して尙ほ長壽を保つ者が多い。此の如く考へ來れば、我等は農業學校の卒

業後靜かに此の自然の懷に起臥し、一家團聚の中に在つて、悠揚迫らざる性格を養ひ、醇朴なる農村氣風の下に、多年の蘊蓄を傾けて次第に村人の指導に任ずる立場にも進み、我が郷黨のために之が改善に關與するが如き、其の行末を想像するだけでも、胸のおどる感じがするではないか。

三、崇高なる農業生活

目 崇 高 なる 農 業 生 活 此の如く農村に住む者は、朝夕常に大自然に親しみ、大自然其のものが農民の職業に親しんでゐる。もと／＼農業の業態は、人工を加へるとはいひながら、其の實大自然の支配の下に行はれるものである。即ち種蒔も刈入れも、自然の時を以てせざれば其の結果を挙げ難く、又陽熱・水濕・土壤を外にして、其の生産は營まれない。まことに農業は大自然の計畫に基くもの、神の大御業の下に在るものと考ふべきものではあるまいか。されば我が國では、昔から農家は其の年の農作を神に祈願し、神と共に力を合せて農事を營まうといふ心

持が、種々の神事として残つてゐる。こゝに農業が他の産業に比べて崇高なところがある。即ち信仰に燃ゆる崇高なる人間の生活は、農業生活、田園生活を通じて我等に恵まれるものであると考へることが出来やうと思ふ。

特に我が皇室と國民とが、農作に對する祈願と感謝とを、天地神明に捧げたことは、古へより著しい事實である。即ち農業信仰に基く各種の儀禮が、國家の祭事、行事の上に執り行はせられたことは、既に諸子の知れるところであらう。先づ年の始の祈年祭に於ては、穀神に今年の豐作を祈願し、秋の神嘗新嘗の祭に於ては、初穂をばそれ〴〵皇祖天神地祇に獻げて、感恩の誠を表はしてゐる。又天皇御即位の大典に當つては、豫め悠紀主基の齊田を定められ、其の收穫稻を以て調えたる神饌神酒を、皇祖を始め普く天神地祇に供へ奉り、天皇また神と共に之を聞食し給ふ壯嚴なる盛儀を行はせられる掟となつてゐる。

此の外、我が皇祖以來の尊農の御精神が、殆ど信仰的に歴代治世の要諦となり來つたことは、史上に明かなところである。殊に明治天皇が深く農事に御意を留め給ひし大御心は、『暑しともいはれざりけりにえかえる水田に立てる賤を思へば』の御製に於ても、十分にこれを拜察し奉ることが出来る。又今上天皇は御内苑に水田を拓かれ給ひ、親しく御田植、御刈入れを遊ばされ給ふことは、畢竟我が皇家の厚き農業御信仰より流れ出でたる雄有き御盛徳に外ならぬ。元來天皇が御千づから農業の御體驗を遊ばされるといふことは、我が國の歴史に於ても極めて珍らしい事柄であつて、我等農業に従事する者は、其の愼慮の程を拜察して、深く肝に銘じて其の途に勵み、以て聖慮の萬一に奉答せねばならぬ。然して此の如く上下一致、尊農の信仰を貫くに至つて、瑞穂の國の名實始めて全しと言ふことが出来るであらう。

斯く考へ來れば、我等が天地の創造、化育の働きに與かり、神意に添ひ

奉つて、此の尊き神聖なる職業に従事することは、實に限りなき喜びでなくてはならぬ。我等は此の職業をば、信仰としてこれに従ひ、日々の生活上の不安を除き、子孫永久の生命を開くことに力め、以て他の職業に於て容易に得能はざる大きな特色を發揮すべきである。

四 憂ふべき青年の離村 然るに今日、農村青年の實狀はどうであらうか。これを全體的に見る時は、兎角地味な農村の單調さを嫌ひ、繁華な都に心を惹かれて、田園を捨てようとする青年が次第に多きを加へ、相率ひて都會の地に翹集する傾きが日増に著しくなつて來た。然かもこれら大部分の青年は、自己の將來についての周到なる計畫と、旺盛なる意氣との下に、着實に其の向上發展を圖らうとするのではなく、唯だ徒らに都會生活の外面に眩惑せられ、虚榮と流行とに惹きつけられ、空虚なる享樂生活を夢みて、都戀しの一念から、都へ／＼と集まるのである。然かもそれが單に醇朴なる青年氣質を失つた安逸遊惰の徒の

みであるかといふに、決してそれに止らず、やがて堅實朴直なる青年までも、これらの氣風に釣り込まれて、次第に離村するに至るのが今日の有様である。斯くして自ら農村の生活をして益々寂寞無味なるものと化せしめ、識者をして田園將に荒れんとすとの嘆聲を發せしめることになるのである。此の現象は諸子の如く、中等教育を卒へて今後我が農村の中堅として自ら任じ、すべての農村改善に當らうとする者にとつて、實に重大なる問題と言はねばならぬ。

抑も現代に於ける農村青年が、徒らに堅實なるべき農村生活を嫌惡する風潮は、一面に於て近時の農業經營が一般に經濟的に多難となり、農村の生活が物質的に豊かなものではなくなつたといふ點に原因したところもあり、見方に依つては一應の道理があるやうにも考へられる。併しながら農村生活が多難であるからとて、將來農村の興廢を双肩に負ふて立つべき有爲の青年が、これに見切りをつけて農村を捨て

てしまふといふのであつては、何時の日か國家の原動力としての農村の立直しが出来るであらうか。青年にして一片の尊農の信念、愛郷の情愛があるならば、農村を捨てる前に、先づ満身の力を傾けて、これが改良、改善の方策を講じ、率先して農村の振興に力を入れるべきではあるまいか。勿論地方によつて幾分の違ひはあつても、これを全國的に見て、我が國の農村が今日眞に行詰つたと決めてしまふことは出来ない。即ち其の行詰つたと考へるのは、要するに見る人の皮相の考へに基いた輕佻浮薄な見方であつて、我等は此の問題をばもつと本質的に考へなくてはならぬ。

四 農業生活と感激 元來農業者が物質的報酬が薄いと考へるのは、つまり其の生活に信仰と感激とがないからである。昔のことを考へて見るに、我等の祖先は農業より得る物質は決して豊富でなく、隨つて其の生活に餘裕はなかつた。されど我が祖先は常に孜々營々として

農業生活に勤しみ、「この秋は雨か風かは知らねども其の日のわざに田くさ取るなり」といふ古歌其のまゝの感激に満ちた氣持を以て、農業に従事して來た。随つて貧弱なる分配にも甘んじてこれを忍び、地主小作の爭議も、又青年の離村も、決して今日の如く甚しくはなかつた。然るに近時に於ては、農業技術の進歩に伴ひ、反當りの收穫は激増したし、又小作人の純收入も尠いとはいふものゝ、これを往時に比べると、慥かに増加をしてゐるに拘らず、尙ほ今日盛んに農村の不安不和を口にしてゐるのは、要するに農業に對する信仰と感激との精神に缺けてゐるからである。

願ふに我等が農民の子として、此の昭和の聖代に生を享けたるは、遠い昔から農民としてのあらゆる艱難と辛苦とに耐え、たゞ信仰と感激とを力や糧として農村に踏み止まり、奮闘を續け來つた我等の祖先の賜である。彼の都會の地に於ては、「三代續いた長者がない」と言はれ

る位に、其の生活は不安極まるものであるのに、我等は何の幸ぞ、斯かる精神的なる祖先を有し、代々承け繼いでこゝに農業者として、強く大地に立つことが出来たのである。特に我等の社會的地位は、今や我等の祖先が夢想だも爲し得なかつた程の向上を見、又我等の經濟的地位に於ても、努力の如何によつては、明かに今後大いに發展の餘地がある。斯く考へ來るときは、我等は感激に充ちた心を以て、ほゝ笑ましい歎を執つての生活を樂しまねばならぬ。これこそ我等が祖先の餘慶を承けるの道であり、又未來の子孫に對するの義務である。

然るに今日一般農村の青年には、兎角かういふ農業生活に對する信念を缺いてゐる。こゝに農村が難局に立つに至つた第一の原因がある。然るに諸子は既に農業學校に學び、日々農業に於ける中心人物たるべき修養を積んでゐるのであるから、今日から一層眞面目な態度を以て其の業を勵み、一入強烈なる信念を涵養して、卒業の後は身を挺し

て、由來行詰つたと言はれてゐる我が農村立直しの大業に當らうとする燃えるやうな氣魄を有つことが肝要である。然るに若しも諸子にして、今日まで永く學窓に在つて、比較的知識的の仕事に従事して來た其の習慣を捨て難く、卒業後も土に對する親しみを缺き、相率ひてたゞ外面的に體裁のよい職業をと志すやうなことがあつては、我が農村は遂に打開される歡喜の日は迎へ難いであらう。我等はこゝに繰り返へして、農業學校はかうした熱烈なる精神に燃える農村の中堅青年の養成が、終局の目的である所以を言つておきたい。

六、農村の弊
風打開と勇氣
農村の弊風打開と勇氣 以上に於て、農村青年の農村の弊習を改めるためには、先づ農民が信仰感激の態度を有つことが必要である所以を述べた。然るに此の際又考ふべきは、現時の青年が、兎角困難に出遇つた場合、これを克服、打開しようとする氣力に乏しいことである。言ふまでもなく人間生活の困難は、敢へて農村生活に限つたことでは

なく、今日如何なる方面に於ても、夫れ／＼或る程度の難關に陥り、行き詰りの嘆聲を洩らさぬ職業は殆どあるまい。若しも斯かる難關、困難に萎縮してしまつて、これに打ち克つことが出来ないとなれば、我が國の前途は最早寒心に堪えざるものがある筈である。然るに實際に於て、今日あらゆる産業界が一様に此の難關打開のために、協力一致努力してゐる有様は、實に雄々しい限りであるのに、獨り農村青年に於て、其の勇壯なる氣力なく、農村生活が苦しいからとて、直ちにこれを回避し、一定の確乎たる目的をも有たずに、たゞ都會にさへ出て行けば、何とか局面が開かれるものと仇なる望みを胸に抱いて、漠然と都會を口指して集中するが如きは、堅實なるべき農村青年にも似合はしからぬ輕々しい態度であると言はねばならぬ。かういふ有様では、やがて都會の地に於て墮落して痛ましい運命に陥るか、又は一敗地に塗れ、其の苦痛を郷土に塗やさんと、敗殘の身を故郷に運んで、更に農村に懦弱の惡風

を傳播せしめるか、いづれかの結果を招くの外ないことになるのである。即ち農村に於ける困難の突破の出来ないやうな弱行の徒は、何處へ行つたところで成功を見るべき道理はない。然かも又斯かる困難打破の勇氣を缺くといふよりは、寧ろ浮華軟弱の風潮に染み、着實に鋤鋤を手にするを厭ひ、都會生活に眩惑され、徒らに空想に耽つて離村するやうな者に至つては其の行末は素より知るべきのみである。

要するに今日の青年は、隱忍持久の精神と、どこまでも困難を切り開いて通るだけの勇猛心とがなければ、到底局面展開の出来るものではない。我等は諸子に對して、今後の農村生活が如何に困難の度を加へようとも、又農村の經濟が如何に不安なものにならうとも、斷じて農耕を捨て去らうといふやうな無分別の舉に出でることなく、飽くまでも祖先から承け繼ぎ來つた此の農村を、諸子の懸命なる努力と、真心より湧き出でたる愛郷の念とによつて、展開を試みるやう、切に希望して已

まないものである。

四 郷土の熱愛 抑も農村青年が、一旦農村が不振となれば、直ちに弊履を擲つが如く、其の生れ故郷を打捨て、都會の地に奔るといふことは、又一面から見るときは、彼等青年にして愛郷の心が乏しい結果であるといふことが出来る。元來我等は夫れ〴〵郷土の中に生れ、郷土の中に人となり、又其の郷土の生活に親しむことによつて、眞に人間としての自覺を得ることが出来た。彼の環境が人を作るといふ言葉は至言であつて、我等が今日あるに至つたのも、亦之が大部分は家と郷土との賜である。我等が朝夕祖先の墳墓に詣り、祖先の遺業を懐しみ、山川風物に親しむとき、又此の郷土こそ我等が終生奮闘するの地であり、骨を埋める場所であり、且又未來に亘つて我等の子孫の住むべき土地であるとき、眞に我等の生命が此の土地を通して、我等の胸に躍るのを覺えるであらう。我等は何と言つても農村郷土の産であつて、

此の郷土の大地を離れた生活は、恰も彼の切花の如く、生氣の缺けたもの、やうな感じがしてならぬ。

殊に我等は我が農村郷土が今日まで發展し來つた長い間の歴史を考へてみたい。我等の祖先が、今日の農村郷土を開發するがためには、如何なる奮闘努力が續けられたものであらう。今日我等が耕してゐる此の水田も、此の麥畑も、又校もたはゞに實る此の果樹園も、之が開發のためには、實に血のにじみ出るやうな命がけの苦心と勞役とが拂はれたに違ひがない。又我が水田の用水路の開鑿、堤防の修築、土地の埋立に當つては、どれ程大きな犠牲が拂はれたであらうか。實にこれがためには、私産を蕩盡するは愚か、時に進んで人身御供に立つた人さへあつたのである。我等は此の如き祖先の尊き遺業に對して、自ら嚴肅なる氣持に打たれざるを得ないのである。若し郷土の古老を訪ひ、郷土に在る棚田の築設者、河川の改修者、泉池の開鑿者、新田の開發者等を

調査するならば、そこには自ら頭の下るやうな事實が數多く物語られることであらう。我等が今日安んじて其の業に服し得るのは、一面に於て全くこれらの歴史があるためである。我等はどこまでも郷土愛、農村愛を唱へたい。郷土を愛し、農村を愛することは、やがて又國家を愛し、祖國を愛することになる。彼の家なく、郷なく、浮浪して生活する者が、兎角愛國の念に乏しいのも、亦當然のことであらう。随つて國を興すためには、先づ郷土を愛する美しい心が、其の基礎とならねばならぬ。然して我が國に於ける將來の農業は、全く是等の先輩の足跡を踏んで行くところに大きな意義があり、偉大なる發展がそこに芽ぐまれてゐるのである。諸子は決して我が郷土を輕視することなく、どこまでも我が生れ故郷を熱愛して、郷土の中堅となり、以て我が郷土の發展開發を心からの任務と心得、努力するところがなければならぬ。

勤勞精神の振興 近年我が國民がおしなべて安逸遊惰を好み、勤

勞の美風が地を拂はんとするの有様であるは、讀者の等しく憂ふるところである。殊に其の境遇上質實勤勉であるべき我が農村青年にして、日に勤勞を厭ひ、月に遊惰に趨るの風が募りつゝあるは、實に嘆はしい限りである。近年の農村青年が離村するのも、亦こゝに大きな理由が存するのであつて、彼等は兎角一般に懦弱に流れ、遊蕩氣分に充ちて、勤儉も手につかず、農村の勤勞生活を振り捨て、放縱なる享樂生活の氣分を憶れ、延ひて農村の荒廢が目の前に現はれんとするに至るのである。言ふまでもなく男子としての眞の生活態度は、所謂油と汗とによつて其の糧を得ることである。然るに農村青年が自己の尊い天職を忘れ、一攫千金を夢みるが如きは、其の不堅實、不眞面目なること夥しく、まことに許し難き不心得と言はねばならぬ。實に今日の文明の基礎は、悉く我等祖先の粉骨碎身勞働を厭はなかつた賜であつて、過去の人々の奮闘努力が今日の文化を建設したのである。されば我等は決

して文弱に流れることなく、先輩の後を承け繼いで、日夜勤勞を惜しまず、勤勞精神を復興して、以てより以上の文明文化の發展に寄與するところがなければならぬ。勿論其の勤勞たるや、決して單なる打算に出でたものではなくて、心から進んで楽しく仕事にいそしむものでなくてはならぬ。斯くして農村青年が勤勞精神に目覺め、何もせず安樂に暮すことが上品だといふやうな誤つた考へ方を排し、天意に従つて働く振ふことが農民としての誇であり、名譽であるといふ信念の下に終日田畑に立つに至れば、農村荒廢の如き問題は、やがて解決せられるに至るであらう。我等はやがて學堂を出でんとする諸子に對して、此の點特に切望に堪えぬ。

第四章 農村の改善に關する努力

■農村の改善へ 前章に於て我等は農村が次第に寂れ行く傾向を

打開するには、先づ青年が農村尊重の信念を有たねばならぬ所以を述べた。然らば次ぎに農村青年は、果して此の如き信念の下に、如何なる改善の方法を執るべきであるか。即ち如何にすれば我等の農村を改善し、農民をして安んじて農業生活を樂しましめることが出来るかについて、具體的研究に歩を進めねばならぬ。

農村の不況、農村の衰微の聲は、今日如何なる地方に於ても同じく耳にすると、ころの大きな問題であるが、これが主要なる原因は、つまり前述の如き農村の人々の精神の弛緩の外に、尙ほ農村經濟の窮迫を擧げることが出来る。即ち元來我が國は、人口の割合に耕地面積が狭いため、農村の經營は仲々容易でない上に、近年一般物價が著しく騰貴したに拘らず、農産物の價格はこれに伴はず、自然經濟上の壓迫を受けるに至つた。斯くして我が國に於ては、農業は動もすれば全く引合はない産業かの如く考へる者さへ見受けるやうになつた。加之、小作爭議は

殆ど全國的に發生し、地主も小作人も互に甚大なる損失を蒙り、益々農村の疲弊を大きくしてゐるのが今日の實狀である。されば農村に於ける中堅人物たるべき諸子は、此の實際をよく理解し、一方に於て熱烈なる農村愛の信念を有つと共に、又一方に於て専ら是等農村に於ける諸問題を研究して、以て農村改善の實を擧げるやうに努力するところがなくてはならぬ。

■農村改善の將來 此の如く農村は立て直さねばならず、又農民は立て直らねばならぬのが、今日に於ける農村の狀勢である。若しも農村にして舊態を脱し難く、又農村にして徒らに舊習に囚はれてゐるやうなことで、到底現狀を維持することさへ出来ないことになる。されば農村は早くこゝに目覺め、進んで農業經營、農村問題の改善に着手し、以て農村をして本當に安住の場所とせなければならぬ。然るに何と言つてもこれは大きな問題であるために、此の指導に當る方面に於

ても、何處から手を着けてよいか分らず、又比較的教育に恵まれざる一般農家に在つても、たゞ焦るばかりで同じく着手のところを辨へないといふのが今日の有様である。

元來我が國の農業は、昔から生産の方面にのみ力を入れてゐた。即ち何處でも稲作に主力を注ぎ、特殊の地方では養蠶を主業として努めて來た。然るに近年の如く米價は下落し、繭も値下りとなれば、益々我が農業は經濟的に引き合はぬことになるのは當然の結果である。これはつまり我が國の農業が一般に従來餘りに單調であり、又其の經營の方面に於ても、頗る幼稚であつたからである。随つてそれだけ今後に於ける改善の餘地は極めて多く、研究改善をすればする程、農村の前途には洋々たる希望があり、又農家の將來には頼母しさがある筈である。即ち全國の農民が、其の農業の經營に當つて、單に舊風になづむことなく、進んで「一」如何にして生産費を減少することが出来るか、「二」如何

にして仕事の上に一層能率を増進することが出来るか、(三)剩つた農家の勞力をば、如何なる方面に消化することが有効であるか、(四)如何なる農作物には加工をすることが有利であるか、(五)農作物の販賣を如何に改善し、如何にして市場に出するのが利益であるかといふやうな、各般の方面について眞剣なる研究と工夫とを積むに至らば、必ずや我が農村の面目はために一新することであらう。

勿論、如何なる方面でも革新の時期に際しては、それにつれての悩みのあるのは當然であるから、今日の農村の窮狀と、農家の困苦とに接して、徒らに悲觀をしたり、失望したりするが如きは、餘りに世の推移に處するの道を知らない者と云はねばならぬ。古歌にも「なせばなりなさねばならぬ何事もならぬといふはなさぬなりけり」とある如く、たゞ行き詰つた不況だと萎縮してゐては、遂に萬事休することになる。特に今後此の衝に當るべき青年に在つては、よろしく「精神一到何事不成」の

意氣の下に協力一致、斷えざる努力を拂ふべきである。然して何事に付けても倦み易く、飽き易いのは我が國民の通弊であり、又始めは脱兎の如く、終りは處女の如くなるのも亦共通の缺點である。されば堅く實行を約した事でも、督勵せざれば中絶の恐れがあり、又鞭撻せねば挫折する心配がある。されば將來農村の中堅人物を以て任ずべき諸子は、常に農村の行き詰りは實は人心の行き詰りであると考へ、徒らに利己心や名譽心に囚はれることなく、絶えず犠牲獻身を以て、農村に於ける各種の團體と力を併せ、又其の實行を援助して、改善の計畫並にこれが遂行に當るの覺悟を有たねばならぬ。

三、農業經營の合理化

目 農業經營の合理化 前述の如く農村改善の方法は種々あるが、其の第一は農業の經營を合理化することである。産業の合理化とは、近時すべての産業界を通じて研究せられてゐることとて、つまり事業の各方面について、出来るだけ無駄を省いて仕事の能率を高めるやうに、合

理的に經營することである。然るに由來農業に於ては、彼の商工業が盛んに經營方面に研究改良を重ね、すべてを一層合理的にし、なるべく生産費を少くして、然かも大きな効果を収めるやうに研究を重ねてゐるのに對して、其の着眼も一般に徹底的でなく、又其の進歩も甚だ遅々たるものである。元來是等合理化の實施は、すべて最新の科學の研究に基き、從來行ひ來つた各種の不合理なる遣り方を改めるのが其の本領であるから、之がためには先づ以て鋭い頭と、科學的の學殖とを必要とするのは言ふまでもない。然るに農民は由來一般に此の如き學問的研究に中心を置かず、單なる實地の經驗のみに頼つて事業に當つてゐるがために、自然是等の方面に後れをとるに至るのは免れないことである。若しも將來に於ても、依然として舊習を墨守するに止り、毫も研究的の態度を有つことが出來ない時は、農業は益々時勢に後れて、更に一層の衰頹に向ふのを如何とも仕難いであらう。諸子は幸にも

農業學校に學び、専門的の農業教育を受け、最早各種の科學の大綱にも通じ、延いて合理化の運動にも與かり得る知能を有するに至つたから、卒業の後はよろしく農村に於ける新運動に正しき理解と、強い興味とを有ち、以てこれに寄與するところがなければならぬ。

然してこれがための方法は、素より種々あるであらうが、其の最も根本的の方針としては、從來の餘りにも單調なる經營方法を改め、又は從來の何等統制のない生産方法、並に販賣方法を改めることである。即ち此の方針の下に、先づ(一)其の經營を技術的に改革して、小農經營ながらもそれに相應し、且つ科學的に研究せられた機械的方法を出来るだけ應用すること、(二)組合制度を整備改善して、同業者に共同施設をなさしめ、肥料其他の共同購入、生産設備の共同、作物販賣の共同等を実現すること、(三)農閑期を利用して、種々の有利なる副業を起すこと、(四)信用組合等を振興せしめて、農業金融機關の能力を十分に發揮せしめるこ

と、五、耕地整理・土地改良・未開墾地開拓の如き積極的の施設の促進を圖ること等は、其の最も主要なものであらう。

四 共存共榮の精神 斯くして農村の改善開發を圖り、各方面に於ける振興を期するは、素より大きな事業であつて、到底一個人の力を以てよくすることは出来ない。即ちこれがためには、必ずや一村一郷の農民が、たゞ自分一個の利益と幸福とを希ふことなく、どこまでも心を一にして、村全體、郷全體の共存共榮を念とする美しい公共心を有たねばならぬ。彼の自分一人の拔け駆けの功名を欲したり、又は他を押しつけても自分の福利を圖らうとするか如き淺ましい者の間に於て、農村の振興も改善も到底考へることは出来ない。然るに幸なことに、農民はすべて祖先代々同じ郷土の地に住み來つたために、昔からの親しみと、強い團結心とを有し、吉凶禍福共に隣保相扶けてこれに當るといふ美風がある。此のため今日農村に於ける共存共榮を本旨とする圖

體には、可成り多くのものが設立せられて、各々組合員一致して公共的福利を念じてゐるのである。

農村に於ける此の如き團體には種々のものがある。即ち汎く農業の改良發達を圖るための機關としては農會がある。農會は或は農業の指導獎勵、又は農民の福利増進に關する施設をなし、或は農業に關する研究調査を行ふ等の事業を營んでゐる。又産業組合があつて、組合員の結合によつて、或は農村金融の便を圖つたり、或は農作物の加工又は共同販賣を爲し、或は貨物の共同購入に當つたり、農産や加工のため設備を利用する等種々の事業を行ふてゐる。此の外水利組合、畜産組合、重要物産同業組合等種々のものがあるが、いづれも其の依つて基く精神は一つである。

此の如き各種の組合を健全に發達せしめ、農村の福利を完からしめるためには、素より種々の條件があらうが、其の第一は經營の衝に當る

役員の經營方法の巧拙並に人物努力の如何に依ることが多い。されば是等の者は常に私心を去り、公正を旨として不斷の努力を致し、誠心誠意を以て事務に當り、組合の發展を期し、成績の向上に努むべきである。然るに是等組合は元來組合員の道德的結合の上に成立したものであるから、各員自己の利害を後にし、組合の隆昌を思ひ、組合の繁榮を得、それに依つて自家の福利を得ようといふ美しい團體愛の精神、共存共榮の念慮を失つてはならぬ。又其のためには組合の役員を信頼して、強りに不平不満を抱くことなく、どこまでも和衷協同以て團體の發展を圖らうとする誠意がなければならぬ。然るに組合員の中には往々にして此の理解と雅量とを缺き、兎もすれば組合の統制に従はず、役員に反抗して自己の欲望を遂げんとする者があるが、此の如きは全く獅子身中の蟲と云ふべく、到底公共的、道德的の事業の營み難き人といはねばならぬ。諸子はよく此の意を體し、毫も中等教育を受けたこと

を自負するが如き態度なく、心から人と共に仕事をするの氣持を失はず、共に農村振興の大業に努むべきである。

五、販賣方面の研究

販賣方面の研究 今日の農業經營に於て、一般に閉却されてゐる今一つの方面は、商業方面の研究の不足、即ち販賣法の上に於ける不徹底である。元來近代の我が農業は、昔のやうに一家又は一地方に於ける自給的の生産ではなく、全く農作物をば之を商品として市場へ出して、利益を收めようとする營利的の産業である。されば單に如何にして品質のよいものを作らうかと、如何にして多收穫を得ようかと、かといふが如き、生産技術上の研究を積んだところで、そればかりでは十分に營利といふ目的が達せられるものではない。即ち又他方に於て、今日の消費者は一般に如何なるものを嗜好してゐるのであらうか、又如何なる販賣方法を執るのが最も有利であらうか、或は之が販路の擴張並に宣傳廣告は如何なる方法が有效であらうかといふが如き、市場進

出に關する各種の研究を積むことに依つて、頗る有効に收益を見ることの出来るものである。若し農村にして是等の方面についての理解なく、單に昔ながらの仕來りのまゝに消極的なる農耕にのみ從事するやうなことで、やがて商業的の眼識と手腕とを以て積極的に進出せんとする地方に壓倒されて、同じ作物を產出しながら、其の販路に於て、其の収益率に於て、遠く及ばざる結果を見るに到るは火を見るよりも瞭なことである。特に今後市場に於ける競争激甚なる果實、蔬菜等の栽培・發送に當つては、鋭い頭を働かせて、よく一般商界の狀態を察して、其の商機をつかみ、臨機應變の處置を誤ることなく、以て最も有效なる販賣方法を執らねばならぬ。然かも此の傾向は今後益々著しく現はれ來るべく、考へ方によつては今後に於ける農村の振興如何は、又是等市場的關係の處置如何に依つて決すると見ることさへ出来る程の狀態となつて來た。然るに我が國の農村では、一般に未だ此の如き理解

がなく、農業はたゞ作物を作る職業で、これが販賣は商人のすることだと決めてしまつて、收穫するや全く問屋任せてこれを發送するのみで、商機を捉えて巧みに賣却しようといふ考への全く無い地方も珍らしくない。此の如き昔ながらの遣り方を墨守してゐるやうなことで、は容易に農村の振興を見る時期は來らないであらう。然るに諸子は既に専門の農業教育を受けたことであるから、今後とも努めて此の方面の修養と研究とを怠らず、將來農村の先驅者となつて、郷黨に勸奨して、最も有利なる販賣方法を探り、延いて一路農村の立直しに邁進するやう一層の力を盡さねばならぬ。

四 地主と小作との問題 現今農村の社會問題として農民の離村と共に注目すべきは所謂小作問題である。小作問題はもと地主と小作との間の紛議であつて、要は小作人が地主に向つて小作料の減額を要求するところの、經濟上の問題が主なるものである。併し小作料減額

の要求に基く問題は、必ずしも近時に起つたことではなく、随分以前から各地に存在した。然るに近年に及んで、農村經營の困難は、農民の生活を窮迫に陥らしめた上に、歐洲大戰以後、一般民衆は著しく思想的に目覺めるに至り、然かも都市に於ける労働問題等に大きな刺激を受け、遂に平和なるべき農村に不祥なる紛議の發生を見るやうになつた。然るに近時の紛議は漸次思想的に深刻味を加へ、地主に對する要求はすべて多數小作人の團體の力に俟ち、集團的の運動に訴へて之を貫徹せんとし、或は小作組合を組織し、農民運動を起すが如き直接的行動に出づるに至り、地主も亦これに對應して、兩者の間の抗爭は日に深刻となり、月に惡化し來つて、其の及ばず所は全國殆ど普き情勢となつた。

我が國に於ける地主と小作人との間柄は、古來全く地親と子作の關係に在り、全く溫情を主とする親子的の立場に在つたものである。然るに今や此の古來維持し來つた溫情は廢れて、互に敬愛の念慮を失ひ、

交々權利の主張の上に立つに至つたことは、農村の平和と、地方振興のために眞に慨すべきの至りである。元來農村は他の産業に比して其の利得は薄く、随つて農民の生活は地味なのが本質であつて、地主も小作も其の利得は華々しい生活の欲望を満足し難いのが普通である。然かも地主も小作も相對抗してみたところ、結局其の享ける利害は一つであつて、兩者は全く唇齒輔車の關係に在り、共存共榮の立場に立つものである。然かも徒らに爭議を續けることは、單に双方の不利益だけに止らず、やがては相互に農村と共に衰滅の運命を辿らねばならぬやうになる。されば兩者は互ひに相依相助の念慮を厚うし、地主は小作に同情の念を以て對し、其の人格を尊重し、小作人は又自重自省して尊き天職を自覺し、共に融和して、どこまでも生活の向上、農村の改善開發を圖るべきものである。

然るに是等農村に於ける爭議の實際を見るに、大抵地主と小作人と

が苦しまされの争を始めるや、此の際に乗じて争議を煽動する不良分子が農村に入りこんで、益々それを險惡なるものと化せしめ、次第に局面を混亂せしめて收拾の出來ないやうにしてゐる事實が在る。つまり地主と小作人とは、彼等一派の者の食ひものにされてゐるとも見られる慘狀を呈してゐるのである。すべて農民は一般に教育の程度が低く、廣く世間を達觀するの眼識に乏しい者が多いから、諸子はよく此の間に處して農村愛護の精神の下に冷性なる判斷を誤らず、農民をして行くところを誤らしめず、常に農村の平和を保つやうに、一層の努力を拂はねばならぬ。これ中堅人物を以て任すべき諸子に課せられたる重大なる責務である。

四 不況に處する態度 近時世間に不況、不景氣の聲が高くなるにつけ、これに對する農民の態度を見るに、それには種々の傾向がある。即ち中には不況に對して、徒らに悲觀的の考へ方をして、奮闘的の氣魄を

喪つたり、又は其の難局を切り抜けようとする勇氣なく、忽ち自暴自棄に陥つたりする人々を見受けることがある。元來不況は來るべきものである。即ち天に晴雨ある如く、節に寒暑ある如く、世に景氣不景氣のあるのは當然のことである。然るに不景氣が襲來したからといって、意氣消沈して爲すところを知らざるが如きは、意氣地のない薄志弱行の徒といふべきである。

我等は景氣は人々を眞面目にする神の試練であると考へたい。随つてそれに悩むは平素の不用意を罰せられる所以とも見ることが出来る。されば我等は不景氣に處して、最も嚴肅な心持で自己を顧みるだけの眞摯な人になりたいものである。即ち不景氣は必ず來るものだといふ道理を辨えて、平素の用意を怠らず、所謂治に居て亂を忘れざる用心さへ有つことが出来るならば、誰でも不景氣を迎へて狼狽せず、泰然としてこれに堪えることが出来る筈である。我等は不景氣に際

して、我が國民の嚴肅なる緊張を見ることを切に祈らざるを得ない。由來農村の人々は悠揚迫らざる性格と、醇朴にして堅實なる氣風とを有つてゐるに拘らず、一度世の不況に際會するや、忽ち失望して職業を轉換したり、農村を見捨てたりする不健實なる人々が擧ぐないのは、まことに遺憾なこと、言はねばならぬ。此の如き柔弱なる人々にとつて、深刻なる不況の如きは、寧ろ感謝してこれを迎へ、謹んで其の試練に服する位の誠實なる覺悟を有たねばならぬ。

すべて試練に勝つものは必ず興る。諸子は不況を迎へるや、存亡興廢の舞臺が我等の前に展開せられたものと考へて、斷じて悲觀することなく、進んで大きな希望を抱いて、勇往邁進すべきである。斯くして希望を捨てざる者には、必ずや最後の成功が與えられよう。農村振興に當るべき諸子は、日頃此の覺悟を失ふことなく、世の景氣の如何を問はず、終始一貫其の理想の實現に向つて突進する心掛が肝要である。

第五章 就職のための準備

一、就職心得
の必要

■就職心得の必要 前二章に於て述べたるが如く、農業學校の卒業生は、其の本來の筋途としては、歸つて自家の農業に従事し、將來農村の中堅人物として活動すべきではあるが、今日までの實際に於ては、卒業生の全部が必ずしもさういふ方向にばかり進んではゐない。即ち中には自己の天分性向や、又周圍の事情等が、此の如き本來の方面に進むことを許さず、或は農場會社等の如き大企業の方面に就職口を求めたり、又は技術員等を志して、官公署其の他の方面に入らんことを志望したり等、種々の方向を執らんとする者が少くはない。されば本書に於ては、是等の者に對しても、其の就職に關する各般の心得を述べて、將來の進路を誤らしめないやうに力めることの頗る重要な所以を信じ、以下二章に互つて専らこれらの注意を促しておかうと思ふ。然かも

これは單に就職志望者のみならず、將來活社會に出づべきすべての卒業生にとつて、相當重要なる參考ともなり、又心の糧ともなることである。

■近時の就職難 此の如く、卒業生が就職の希望をもつて、夫れ々々然るべき方面に向つて、種々の運動を續けるとして、こゝに重要なる問題がある。即ち今日多數の學校から出る夥しい卒業生が、其の卒業の曉に於て、果して夫れ々々自分の志す方面に職を求めることが出来るであらうかといふことである。今日の實際を見るに、それは近年次第に困難の度を加へ、眞に心から希望する職業に就き得る者は、餘程幸運な人とせられる有様となつた。往年我が經濟界が活氣に充ちた當時にあつては、實業學校の卒業生といへば、別に各自就職について、さ程の考慮を拂はずとも、卒業と共に一人も残らず夫れ々々満足に其の處を得ることが出来たのである。然るに其の後年と共に世は不況に陥り、

あらゆる企業を通じて整理縮少が行はれ、従つて新卒業者の就職は次第に困難を加へ、今や各人自らはさまで希望せざる方面や、頗る不得意とする仕事につくことを餘儀なくされるのは未だしも、一度機を失すれば終に如何なる職業をも求め得ずして、永く不安なる生活を送らねばならぬ場合さへ少くはない。斯くして其の一身一家が如何になり行くかを思ふ時、就職の問題はこれら青年の生涯に對して、實に重大なる問題であるといはなければならぬ。

目就職準備の必要 諸子が學校を卒業し、就職の目的を立派に達するがためには、先づ在校中から就職に對する十分の準備を整へて置くことが必要である。特に今日の如き就職難の時勢に於て、豫め是等の準備なくして漫然と卒業期を迎へるが如きは全くの無謀である。然らばその準備として如何なる事が必要であるか。

第一は今日の實業界が如何なる人物を要求してゐるかを研究する

ことである。此の點に於ける實際の要求を察するに先づ、最も圓滿なる人格を有ち、諸事快活なる青年、頭腦明晰にしてよく仕事の能率を擧げ得る人物、職務に忠實な上に強健なる體力を有し、どこまでも活動的な人物である。若しも是等の條件を具へ、眞に信頼するに足る有爲の青年であるならば、如何に今日不景氣であるといつても、各方面とも喜んで之を採用するであらう。是等は固より至難なる條件ではあるが、最後の學年に於て、諸子は誠實な態度を以て只管之が修養に努めなくてはならぬ。

第二は豫め自己の性能にふさはしい動機口を物色して、就職實現までの準備手配を周到にして置くことである。彼の「泥棒を捕へて縄を細く」の語の如く、平素の用意を閑却しながら、卒業間際になつて俄かに狼狽して奔走するやうでは、其の成果は固より覺束ないといはねばならぬ。されば平素から先生方にも誠意を以て相談をなし、又母校の先

輩や其の他の知己に對しても、眞に赤誠を以て自己を知つてもらふことに努め、愈々卒業の晩には、是等の方々への責任ある紹介や、推薦の勞を懇願するのである。平素は先輩知己に對しても何等敬意を表することもなく、冷淡な態度を見せておきながら、卒業間際に臨んで俄かに足繁く訪問を続け、紹介・推薦を依頼するが如きは、却て先方の感情を害して決してよい結果は得られないであらう。

第三は豫め目指す方面の事業の一斑、經營の狀態の大要位は研究しておくことである。人物試問に臨んで、場長・社長の姓名を知らないうち赤面したといふ卒業生もある。自分が終生を托する決心で入らうとするに當つて、此の如きは餘りの不用意といはねばならぬ。

此の如く考へて來ると、諸子が此の一箇年間に於て爲さねばならぬ就職準備の方面は、まことに多岐に亘つてゐるが、これから其の最も主要なる事柄について其の大要を述べることにしよう。

四 人格第一　　どの農場會社でも、其の採用標準の第一には、哲人格に
ついての項目が在る。勿論立派な人格の必要なるは、すべての場合を
通じて人間に取つての根本的の問題ではあるが、徹頭徹尾信用の上に
立つべき實業界に於ては、特に此の點を重要視し、第一に高潔圓滿なる
人格の所有者を要求するのである。諸子が眞に廉直正義の青年であ
り、性格の圓滿な人物であるならば、諸子の先輩は決して諸子を見殺し
にはせず、必ず熱心を以て喜んで各方面に推薦紹介の勞を執つてくれ
るであらう。又斯かる人物は人と應對する場合にも、其の態度風貌の
間に、自然と奥床しい人格のかほりをあらはすもので、詮衡の場合に於
ても、必ずや當路者の認めるところとなるであらう。まことに人格の
如何は、永き人生の行路に於て、其の浮沈を握る唯一の秘鍵であり、又實
業家としての最高の資本であるともいふことが出来る。

然らば斯かる人格の根柢は何かといふに、言ふまでもなく高潔なる

品性である。然して其の品性は、潔白なる心情となり、鞏固なる意志力となり、嚴正、溫雅なる儀容となる。斯くて其の人格の放つかほりが、又やがて實業家としての節操を確立せしめる。されば品性高き人格者は、如何なる場合にも自己の節操を賣らず、卑しき欲情の誘惑を排して、常に良心の命ずるところに従ひ、堂々と實業の正道を歩むものである。實業界に於て特に人格高潔の青年を歓迎する所以は實にこゝに在る。斯く考へて來ると、何等自己を内省することもなく、唯だ目前に割のよい就職口を目指して東奔西走し、或は巧みに游泳しつゝあるやうな輕薄者流の將來も、大體想像されるのである。諸子は運命開拓の最も重大なる原動力が、實に自己の人格の如何にかゝつてゐることを思ひ、これが修養に全力を盡さなくてはならぬ。

四 常識の養成 現代の學生の一つの缺點として、唯だ學術的の知識を求め、事に偏して、一般的なる常識の涵養を輕視する傾きがある。

其のために折角學校を卒業しながら、どうかすると殆んど分り切つた日常生活上の事柄すら解しない非常識なものを見ることがある。固より人間處世の上に、學問の力を輕んじてよいといふのではないが、吾等の日常生活の上に最も必要なるは、圓満に發達せる常識である。殊に實業界に於ては、深遠な専門的の學問よりも、寧ろ豊富なる一般的の常識を有し、よく世態人情の機微に通じた所謂物分りのよい人物たることを必要とする。即ち常識に富める人は、次ぎへ／＼と起つて來る實際問題に對して、臨機應變の處置を誤らず、着々と其の効果を収めることが出来るのである。若し之に反して、斯かる圓満なる常識を缺く者は、何事も一面的の見方に陥つて偏屈となり、人情を解せず、動もすれば他人と衝突し、或は極端に走り、奇矯なる行爲に陥り、遂に融通の利かぬ人間として、一定の仕事以外には殆んど無能視されることにもなる。斯くの如きは、實業家として最も不適當な人物といはねばならぬ。

然らば如何にして常識を養ふべきかといふに、先づ社會の生きたるさま／＼の事柄に細心の注意を拂ひ、其の働きを明かに觀察することが肝要である。即ち出来るだけ多方面に活動し、出来るだけ廣く見聞し、日常の経験に依つて得た知識を常識として生かすことに努めなければならぬ。又讀み物の如きも、學校の教科書の外力めて日常の新聞雑誌に目を通すことに心掛けるがよい。又なるべく公開の席にも出て、知名の士の談話も聴き、良友と交際し、先輩を訪問する等種々の方面に経験を積むことが大切である。併しながら眞に圓滿なる常識は、断片的なる経験の寄せ集めてはなく、それを原理・原則の根柢の上に置き、其の経験したる知識を十分合理化しなければ、本當に實際生活の上に役立つものではない。されば諸子は此の意義を解して、よろしく學理に根柢を置いた眞の常識を養ふことに心掛けねばならぬ。

因 虚榮心を斥けよ 近頃の卒業生の中には、就職に當つても兎角外

面的な體裁のみを重んじ、壯麗なるビルディングに事務を執ることを憚れたり、仕事の外見がよくて氣樂なところを希望するものが多く、斯様な方面にのみ集るやうな傾向がある。此の如きは、勿論餘りに虚榮に囚はれた不眞面目な態度である。實業界の活舞臺は決してそんな狭いものではなく、諸子の活躍すべき天地はもつと廣大である。此の如き大規模なる場所は、眞の意味に於ける理想的の訓練場では無い。斯かる事務一方の仕事をしてゐては、他日獨立の經營に入る場合に於て、種々の困難に逢着するを免れないであらう。生涯を通じて給料生活者たらんとする者は別として、將來獨立して實業界に活躍せんとする者に在つては、寧ろ小規模なる農場、會社等に職を求めて、實際に其の事業の經驗を積む方が、遙かに有利となる場合が多いのである。されば、徒らに大企業ばかりを目指して焦るよりも、他日の發展の階梯として、是等の方面に進路を求めるも、亦賢明な考へ方であらう。

是等いづれの場合にせよ、諸子は斷然輕詭浮薄なる虛榮心を捨て、地位や待遇に不平をこぼすことをやめて、よろしく最低の段階から一步と堅實に進まうとする蕭實なる覺悟を有つべきである。又就職の後は誠意其の仕事に精勵して、萬事上席者の指揮に従ひ、撻まず自己を磨くやうに心掛けなければならぬ。

セ、其の職業
を一貫する決
心

四 其の職業を一貫する決心 卒業者の中には、兎角最初の出發點の重大なる意義を辨へず、極めて之を軽く考へて、「就職後いけなければ、又其の時の思案に任せよう」といふやうな可い加減な心掛け、勤め先を決定する者がある。斯様な人は就職後も、常に何か外にもつと可い勤め先があるやうな氣がして落ちつかず、少し意に滿たぬことがあれば、直ちに轉じて他を物色するといふやうな、不眞面目極まる態度を有つてゐる。かういふ青年が、到底將來に於て大成する筈なく、必ずや西に東に轉々として其の生を終るの外はないであらう。されば諸子は、

最初の業務をば、眞に我が墳墓の地としようといふ位の眞剣さを以て、慎重に方向を決定すべきである。古來、大成功者といはれる人々は、皆最後まで萬難を排して奮闘努力、初志を貫いた者に外ならない。尙ほ此のことについては、後章に於て更に詳しく述べるであらう。

■志望の職業に對する理解 前にも述べた如く、諸子が就職せんとするに當り、先づ自分の希望する職業を選択した上は、其の方面の農場會社官署等の業務の一斑について、出来るだけの豫備知識を積むことが肝要である。然るに世には巧に立ちまはつて單に就職の開門さへ通過すればそれでよいといふやうな無責任な考を有つ者がある。斯様な人は採用されても何等其の職業に對する希望もなく、趣味も湧かず、熱誠もなく、唯だ機械的に事務を執るに過ぎない。かういふことは、到底將來の發展を期することは望まれぬ。されば出来るならば、豫め一應は其の農場會社を訪ねて、實際經營の狀態を見學する事が最も

望ましい。又時に縁故を求めて、實業界の知人や先輩を訪問し、種々の實際的の意見を聴かせてもらふ等も、頗る有益なことである。然るにそれだけの用意をしようともせず、唯だ漫然と就職口を求めて一舉に成功しようと焦慮するが如きは、餘りに無謀であり、無計畫である。諸子はよく此の點を理解して、力めて卒業期までの數箇月を此の方面の研究に費やし、以て最も適當なる就職先を求めると共に、又誠心誠意全力を注いで、其の職分に勉勵し、それに生涯を捧げる程の覺悟を有つて欲しいものである。

九 健康と態度 繁激なる近代の社會に立つて活動する者にとつて、身體の健康は實に重大なる要件である。特に日常多忙を極める實業界に身を投ずる者は、其の方面の如何を問はず、第一に頑健なる身體と強い體力とを必要とする。近時いづれの農場會社でも、新社員の詮衡に當つて、先づ此の點を重大なる項目として取扱ふのも、固より當然の

ことである。言ふまでもなく體格不良の者や、病弱者が、競争激甚なる實業界に立つて、其の業務に精勵し、十分に能事を舉げる事ができやう道理がない。就職しても忽ち身體を害し、軟弱勝ちとなり、事務の進歩を妨げられるは勿論、延いて斯かる虚弱者を有する會社、農場全體の能率に影響し、事業の上にまで至大の關係を有することになる。さればこそ、すべての方面に於て、社員の身體の健否如何を重視することになるのである。

又之を實際について見るに、在校中成績優秀なる者にして、尙ほ體格のために不採用の憂目を見るに至る者も決して少くはない。されば先づ自分の身體を顧みて、若し不健康にして劇務に堪えないと考へる者は、最初から思ひ切つて其の健康の許すやうな職業に就くことが肝要である。此の意味に於ける選擇調節がよろしきを得るならば、假令健康狀態の思はしくない者でも、或る程度まで自分の目的を達成する

ことが出来るであらう。即ち斯かる人は徒らに焦慮することを止めて、寧ろ競争激甚なる都會の地に出ることを避け、靜かに田舎の地に於て、自分の體力で爲し得る程度の職業につき、以て他日の發展を期するのが、遙かに賢明なる考へ方である。

次ぎに近時の實業界では、身體の健康を重要視すると共に、又一面に於ては、其の容姿の端正にして人に好感を與へるやうな青年を希望する風がある。是等は一見男子に對して見當違ひの要求のやうにも考へられるが、併し實際について見るに、それが常に大勢の人々に接する仕事であつてみれば、又當然の詮衡條件といはねばならぬ。勿論人には夫れ／＼の天禀があるが、併しこゝにいふ容姿態度とは、決して單なる外面的の容貌、風采の意味ではなく、内面的なる人物修養によつて洗練された姿態のことである。されば眞に洗練せられた優雅な性格を具へた青年は、自然にそれが外にあらはれて、何となく床しさに満ちた

風姿態度を具へるに至るのである。斯かる人物こそ、今日實業界に於て要求する所謂容姿端正の人である。されば容姿の如きは生れつきで、如何ともし能はざるものであるなど、自棄せず、日常努めて行動を慎しみ、修養を積み、野卑な態度や、不真面目な舉動のないやうに心掛けることが肝要である。

第六章 就職を迎へる心得

■就職の一路へ 以上によつて、諸子は將來實業界に身を投じ、成功を冀ち得んがためには如何なる修養を必要とし、如何なる覺悟を有すべきかを、十二分に理解したことと思ふ。又自分の生涯を托すべき仕事は如何なる方面か、如何なる方向に進む事がよく我が天分に合致してゐるかを研究して、既に大體の見當がついたであらう。さればこれから、一面に於て右に述べた通りの各方面の準備に精勵すると共に、

又他面に於て次第に就職の運動に歩を進め、着々と手落なきやうに畫策することが肝要である。學校の先生方は云ふまでもなく、然るべき先輩知己にも誠意を以て就職方を依頼し、十分に諒解を求めて置かねばならぬ。勿論他人に對して依頼心を有つことは可いことではないが、こゝにいふ依頼は、決して實力伴はず單に情實にのみよる依頼の意味ではなく、是等の人々に對しよく自分の眞意を訴へ、自分を正しく理解してもらつて、然る後推薦紹介の勞を煩はす事である。斯くして就職の準備を整へ、推薦紹介の段取りを終へた上は、萬難を排して目指す方向へ突進するのみである。併し既に述べた如く、職を求めるといふことは、決して豫想の如く易々と實現するものではなく、特に今日の如き就職難の時代に於ては、猶更困難なことである。されば今後、諸子は従事すべき就職の運動についても、十分慎重なる考慮を拂ひ、萬遺漏なきを期せねばならぬ。これに就て特に主要なる心得の大要を述べて

置かう。

■履歴書の書き方 履歴書は就職申込を爲す場合、第一に差出すべき必要資料である。言ふまでもなく履歴書は、各自過去から現在までの経歴を自筆で認むべきもので、これによつて採用者側では最初の詮衡を行ふのであるから、特に慎重に作成すべく、決して之を形式的のものと思へてはならぬ。

「文は人なり」といふ語があるが、履歴書は、自分の全人格をば文字・文面を通して、赤裸々に表示するものである。されば之を認める場合、最も眞面目に、最も入念にする事が大切である。之に依つて、其の人格の奥床しさを示す事が出来るのである。其の第一は筆蹟に注意することである。勿論文字の巧拙は急にどうする事も出来ないが、併しこゝでは叮嚀に、綺麗に正しく書けばよいのである。第二は誤字・脱字のないやうに注意することである。履歴書に誤字を認めて、詮衡の第一關門

に於て自分の不注意粗忽を表示するが如きは、愚の至りであると言はねばならぬ。之を認め終つたならば、必ず更に誤字脱字のないかを一讀再讀して、萬殊漏なきを期すべきである。第三は簡にして要を得ることである。即ち必ずくどくどしく書き連ねるやうな事なく、どこまでも正確簡潔に認め、先方をして一見して其の要を得せしめる程度に書くがよい。

三、依頼の手紙

目依頼の手紙 就職運動に當つては、履歴書を書く一面に、先輩知己又は其の他の方々に就職依頼の手紙を書かねばならぬ場合が多い。これは大體形式の定つた履歴書とは違つて、先方の人に敬意を失はずして、其の意のあるところを十分に述べねばならぬから、一層注意を要する。勿論此の種の手紙には、文章の巧拙といふことも大切ではあるが、無暗に美辭麗句を羅列したり、又心にもない阿諛迎合の言葉等を用ひることは斷然避けねばならぬ。即ち率直に飾氣なく、自分の思ふこ

ころをありのまゝに認めて、以て自分を明瞭に理解してもらふことに努むべきである。

④先輩の紹介状　就職運動に際して、誰でも先輩や學校當局の推薦状、紹介状を得ようとするものである。若し是等の方々が、眞に自分の人物學識・才幹を認めて、自發的に推舉される意味のものであれば、最も有效である。然るに自分の眞價如何を度外に置き、單なる情實によつた紹介に頼らんとするが如きは、やがて紹介者の信望を失せしめることとなるのみならず、延いては自己の將來をも誤ることになる。されば平素より先輩、知己の方々に對しては必ず謙虛な心持をもつて、自分の本當の相（すがた）を理解してもらふやうに心掛くべく、其の上で眞の紹介状を願ふのが本當である。併しかういふ紹介状を得るがためには、先づ進いて自己の人物、自己の才幹を磨くことに全力を拂ふのが、其の根本であることは既に述べた通りである。

面、訪問面會
の心得

四 訪問面會の心得 就職に際しては、先輩を訪ひ、又は直接先方の首領者を訪ねたり、又は先方の要求によつて面會に行かねばならぬ場合もある。左にそれ等の場合に於ける心得を擧げよう。

(一) 服裝 第一に服裝は高價な華美なものよりも、身分相應なさつぱりしたものを、常にきちんとした風姿をすることが大切である。すべて服裝容姿の整つた人は、又其の心持も正しく、物事に秩序正しい人であり、採用後もすべての仕事に整然として、人一倍の能率を擧げ、てあらうと推測せられるものである。服裝や容姿は、其の人格の表示であるともいふことができる。

(二) 言語應對

(二) 言語應對 第二に言語や應對について十分に注意を拂ふ事である。即ち何人にも畏怖するところなく、さりとて傲慢な風もなく、常に從容迫らざる態度でなければならぬ。尙ほ快活なこと、率直なこと、てきぱきしたこと等は、見る人の目にも必ず氣持よく映ずるものである。

併し快活であつても、其の裏に物靜かなところがなければ、兎もすれば粗暴に見える。又對話中言語は落ちついて而も明快に問はれることは明確簡潔に答ふべく、不必要なことを喋々と辯じ、又は下品な言葉遣ひをする時は、輕卒下劣な人物と見られ易い。又餘りに低い音聲は優柔不斷に見え、餘り堅くなり過ぎる時は不活潑な人物と思はれ易いものである。ありのままに飾氣なく、率直に知る限りを述べ、知らぬことは知らぬと判然と答へ、曖昧な態度は絶対に避けなければならぬ。

(三) 禮儀作法 現時の實業界に於ては、磊落豪放にして禮儀に無頓着な人を歡迎しない。無作法な人程、其の人の人格の低劣さを表はすものはない。されば訪問・面會の場合に於て、必ず教養ある人間としての禮儀を守り、常に奥床しい節度のある動作を爲すべきである。併し禮儀作法の如きは、俄かに修得しようとしても到底其の目的は達せられないものではないから、平常からよく之が修養に努め、愈々卒業といふ場

六、就職不成功
に處する心得

合になつて、狼狽しないだけの用意がなくてはならぬ。

就職不成功に處する心得 前にも述べた如く、今日は甚しい就職難の時代である。永い年月と、多額の學費とを費し、刻苦勉強を積んで、尙ほ卒業後適當なる働き場所を得られないといふことは、悲しむべきことである。然し今日我が國の實狀は、財界の不況、延いて新事業の見合はせ、新採用の極度の制限、加ふるに年々加速度に激増する新卒業生の供給過剩等の各種の原因のために、何程奔走しても豫ねて志望せる方面に出て難き者を出すのは、蓋し止むを得ないことである。されば萬一、諸子が不幸にしてかういふ運命に遭遇した場合、徒らに煩悶して日を送ることなく、自己の方針を立て直さなければならぬ。か斯る立場に置かれた時に、如何なる考へ方が必要であるかを述べて置きたい。

(一) 志望標準の引下 此の場合、最も大切なことは、志望の標準をかけることである。世間には、「今年不成功に終れば來年を待たう」といふ

(一) 志望標準の引下

人もあるが、併し來年には又來年の新卒業が送り出されるのみならず、採用者側の人情として、舊卒業生よりも新卒業生を歓迎する傾向があるから、來年は尙ほ一層の就職難に陥るものと覺悟せねばならぬ。斯くては「百年河清を待つ」やうなもので、決して此の難問題の解決は出来るものではない。されば、最初の志望の方面が遂に不成功と決つても、自ら其の前途を暗く考へたり、又自暴自棄して邪道に陥つたりする事なく、よろしく從來の就職標準を低下して、更に目標をより可能なる方面に求め、そこに新しい道を開拓すべきである。即ち一流の農場大会社ばかりを狙はずに、もつと小規模にして而も個人經營の方面を希望し、最下級から一步々登つて行く覺悟さへ有つたならば、未だ〳〵今日相當の收容力は慥かに有ると思ふ。斯くして最下層の仕事から出發して、將來の發展を期するだけの覺悟さへあれば、大会社・大農場で永年に亘る下積み生活を送るよりも、却て早く相當の地位を築くことが

出来るであらう。或る實業家は言つた、『今の學校出は駕籠^{リキ}舁^カきにならうとせず、始めから駕籠に乗らうとする』と、全く至言と言はねばならぬ。此の如く學校を出ると共に、直ちに氣樂な地位を望み、駕籠に乗らうとするが如きは、あまりに虫のよい考へ方で、斯の如きは決して成功を得る所以ではない。尺蠖^{セリ}蟲が伸びんがために屈する如く、斷然意を決して下級の方面から出發しようとするならば、やがて其の誠意は認められ、次第に信用を博して、自然に輝かしい運命を開拓することが出来るであらう。斯くて所謂禍を轉じて福と爲す事になるのである。

(二)都會集中を排せ 又今日の青年は争うて都會へ〴〵と集中し、其のため益々猛烈なる就職難を出現せしめつゝある。併し實業家としての地歩を作るのは、必ずしも都會の地に限るとは考へられない。成功不成功は其の人物の實力の如何にあるもので、決して地理的關係にのみ左右せられるものではない。されば徒らに都會に憧れ、都會のみ

が成功の舞臺だといふやうな囚はれた考へを捨て、地方に職を求め
る決心がつくならば、必ずそこに眞面目なる青年の活動すべき事業が
ある筈である。學校に學び、智能を修得した青年が、其の蘊蓄を傾けて
地方産業の開發に當ることは、實に自己の運命を開拓するのみならず、
又國家社會のためにも頗る有意義なことである。然かも尙ほ地方に
も十分其の目的を達する地が無いならば、更にこれを海外に求めるこ
とも出来る。此の際心氣を一轉して、海の外に雄飛するも亦青年の快
事であらう。

此の如く考へ來れば、一時の就職の不成功に依つて、決して意氣消沈
することはない。自分の天分と境遇との許す範圍に於て局面を轉じ、
出来るだけ早く實業界に第一步を踏み出すやうに意を決することが
肝要である。其の覺悟次第で、やがてそこには洋々たる希望の光を認
めるに至るであらう。

第七章 實際社會への出發

一、世の中への
の第一歩

■世の中への第一歩 諸子は積年の螢雪の功成つて、こゝにて實際社會への第一歩を踏み出すに至るのである。或は甚しい就職難をも突破して、適當な職業を贏ち得た者、或は父祖傳來の家業に従事した者、又は新たに獨立創業を爲す者等、其の方面に違ひはあつても、自己の生きて行く道を見出し、燃ゆるが如き信念と意氣とを以て、生きたる社會へ始めて乗り出した喜びは一樣であらう。

併し深く諸子の前途に就て考へるならば、實に多事多難であつて、山岳重疊の道を登るの觀がある。果して成功の榮譽を擔ふか、又は一敗地に塗れるかは、今日に於ける覺悟と、今後に於ける奮闘努力の如何とによつて岐れるのである。諸子の今後活躍すべき實社會は、決して學校生活の如く單純なものではない。定められた課程を定められた方

法によつて進んで行きさへすればよいと云ふやうなものとは違つて、今後の諸子は極めて複雑な仕事を、自己の力だけを自ら働かして行かねばならぬのである。随つて今後に於ける諸子の生活は最も眞剣でなければならぬ、分時も呑氣であることを許さない奮闘の生活である。諸子の立場は勝つか負けるかの瀬戸際に立つところの、戦場の騎士に比すべきものである。即ち學校生活は、其の爲した事が失敗しても、これ皆訂正することの出来る演習であるのに對し、今後の社會生活は一舉一動悉く二度と遣り直し、立て直しのできぬ實戦場である。されば諸子は就職の當初から、十分の信念と覺悟とを以て、最も眞剣に其の與へられた職務に全生命を打ち込んで進まなければならぬ。

尤も職業の方面の異なるに従つて、之に處するの道にも幾分の相違はあるにしても、一方如何なる職業にも共通するところの根本原則がある筈である。本章に於ては、此の共通の事柄に就いて述べて置く事と

二、仕事を熱
愛せよ

する。

■仕事を熱愛せよ 實業界は、學窓の裡から眺めた場合と、實際自分が體驗して見た場合とは、餘程其の趣が違つて居るのであらう。中には自己の豫期しない方面に職を得たために、一時は何事もわからず、不安と焦燥とに煩悶する事もあらう。又志した方向に出た者でも、自分は最も下級の者として待遇せられ、日々の仕事に何の興味もなく、何時の日になつて人並の働きがひのある仕事に就かせてくれるものか、少しも見透しがつかず、斯くして學校時代に豫期して居つた事は、一つ／＼裏切られて行くやうな氣持になることも少くない事であらう。併しこれは一時の試練に過ぎない。此の開門を通り過ぎると、そこには本當に楽しい働き甲斐のある天地が開かれるのである。故に最初は何なる難關があらうとも、此所を最後の墳墓とするの決心を以て、其の與へられたる職務に向つて全精力を傾注しなければならぬ。斯

くして倒れて後止むの熱誠があれば、あらゆる困難も何等恐れるところはない筈である。自己の職務を熱愛して、自己と仕事とが一つになつた時、其の職業に従事するの愉快は、何ものにも替へ難いものである。何事にも趣味を有たなければ、能率は上らぬ。我が職業に精勵することとが一つの樂みであり、其の職業に従事することが、一つの希望ある人生となつた時に、始めて茲に完全に自己を完成する事が出来るのである。されば最初どんなに苦しくても、これこそ他日の發展の礎を築いてゐるのだといふ理解と意氣とを以て、あらゆる困難に堪え、誘惑を排除することに全力を注がなければならぬ。

斯くして仕事を熱愛すれば、決して自分の職業に不平も起らねば、不満も生ぜぬ。之に反して、自己の仕事を愛することの出来ないものは、やがて他人の仕事に羨望を感じるに至り、遂には自己の職業を放棄しようとするやうになつて来る。斯くては其の前途に光明を望む事は

絶対に出来ない。

三、職業を轉換するな

目職業を轉換するな 自己現在の職業を蔑視し、他人の職業を羨む者の進むべき途は、結局職業の轉換である。誰でも就職當初は其の仕事の呼吸も分らず、又境遇の變化の甚しいために、十分仕事に對する趣味が起らず、延いて仕事に魂を打ち込むやうな徹底した態度に出でにくいために、人情の常として又一倍他人の仕事が楽しく見える。併しよく反省するときは、此の如きは努力の足りないために、自分の仕事に對する十分の趣味が湧かないからである事がわかるであらう。一時の困難を忍んで不斷の努力をつゞけ、十分自分の仕事を理解するに至れば、必ず次第に興味も起り、自分の働きが認められる筈である。斯くて轉職の必要もなくなり、其の地位に安住するやうになる。されば一旦決心して選擇した以上は、少々の困難があるからと云つて輕々しく轉換すべきものではなく、如何なる仕事にも困難や不満はつきものだ

四、一度入つたところには、
かぬ決心

と覺悟して、忍耐すべきである。單なる我儘や不平から、輕々しく轉職するやうな人は、一旦轉職してみても、又其の中に必ず別の不平不満が起り、斯くして終に終生身の安定を得難いてあらう。殊に今日の如き時代に於ては、一度職業を失ふときは、容易に他の業務に就くことは出來ない。諸子は假令多少の不滿があらうとも、よくそれに耐へて初一念を誦すことが、結局の成功をもたらす所以であることを考へて、決して輕率妄動をしないやうにせねばならぬ。

四 一度入つたところは動かめ決心 右に述べたるが如く、一旦擇んだ職業を轉換するは決して策の得たるものでないが、尙ほ一旦擇んで入つた勤務先から斷じて動かめといふ決心を有つことの必要な事も同様である。新卒業生の就職する事は、之を處女の結婚に譬へることが出来る。「貞女は二夫に見えず」といふ昔からの教があるが、諸子も亦一度縁があつて或る會社、農場に入つた以上、自分の我儘や、不平のため

にそこを飛び出すが如きは、甚しき無節操である。何所でもさうであるが、實業界に於ても、節操を頗る重視し、一旦入社しながら輕々しく他の移る如きは、嚴に戒められたところである。一旦入社して退社したものは、最早一種の「疵物」で、女子の「出戻り」にも比せられる。出戻りの女子が何處でも歡迎されないと同じく、疵物になつた青年は、如何なる方面から排斥せられるであらう。それは斯かる落ちつきのない輕薄者を採用しても、少し不満があれば忽ち飛び出すものと見られるからである。殊に不況の今日、出戻り者を採用せずとも、意志強固なる有爲の人物がいくらでも得られるに於てをやである。

由來實業界の中には、學校出よりも小僧より叩き上げた者の方がよいといふ見方をしてゐる人がある。勿論學校出は其の學問、智識に於て、小僧上りよりもすぐれて居るのが普通である。しかも尙ほ此の見解の行はれるのは、種々の理由もあらうが、主に幼年の時から實地に就

いて、辛抱強く努力を續けた者の方が、幾多の短所はあつても、實業生活に於て最も大切な訓練を経て居り、強固なる意志を磨へて居るからである。此の事實は學校出身者の深く反省すべき問題で、學問を自負したり、又は活きたる社會では學問以外の實地の訓練が大切であることを知らないために、自分に末梢的の仕事に課せられたことを飽き足らず思つたり、又餘りに成功を焦つて、他に轉ずれば、一層容易に、且つ早く華かな成功が得られるやうに考へたりするものは、轉々として職を替へて、遂に何事も成功せず終る事になる。されば諸子は、一旦何所かに入つた以上、堅忍不拔自己の職業を飽くまで死守するの決意をもつて、一意其の道に進むべきである。

四 實務見習の態度を失ふな 一たび實業界に入れば、先づ其の仕事の實際について、一日も早く習熟しようとする心構へをもつて、精勵しなければならぬ。然るに實際新就職者の状態を見るに、此の實務の見

習を重要視してゐないものが少くないやうな感がある。彼等は未だ實際の世間が分らないために、兎もすれば「我れ既に學べり」といふやうな考へをもつて、實際の仕事を眞剣に見習はふとしないのである。併し實業界といふものは、そんなに單純且つ容易なものではない。故に入社したならば全然學生時代の態度を改め、其の起居動作、其の言葉遣ひ等は言ふまでもなく、從來のすべての氣持を根柢から取り去つて、新しく事務を見習ふことに努めなければならぬ。

何の職業でも、他の側から見るときは、さしたる困難はなく誰でも出来るやうに單純に見えるものであるが、自分が實際其の中に入つてみると、決してさうでなく、必ず慘澹たる苦心を要する事が分つて來るものである。「實業に關する事は何でも學校で習得した」と考へ、之を直ちに實社會に活用して自分の腕が役立つものであると考へたならば、それは全く世間を知らぬための誤解である。實業學校に於ける教育は、

實業界に入る爲の單なる準備教育に過ぎず、それで早速實地に役立つものが出來上る譯ではない。されば如何に學校に於て成績優秀なる者であつても、實業界に入つた當座は、其の仕事の仕振りに於て、到底丁稚小僧にも及ばないのである。又工場に入つても、學問的教養に乏しい職工の方が、遙かに技術の上に於ては優つてゐる。是等の者は、既に長年月に亘つて實際の仕事に修練を積み、實務に當つて來たからである。學校での勉強は大體机上の勉強であるに對して、實業界に於ける仕事は、すべて現實社會の生きたる實地の仕事である。學校に於ける勉強が自分のための勉強であつたやうに、今後は自分の日常の仕事を、會社のための仕事、主人のための苦役と考へることなく、どこまでも自分のための修養であり、自己完成のための仕事であると思へて精勵努力すべきである。斯くて始めて、其の努力は自己の血となり肉となるのであらう。此の眞面目な氣持さへ持ち得るならば、決して不平も

起らず、不満も生ぜず、其の誠實と努力とはやがて上者の認めるところともなつて、自己の運命は益々開けて行くのであらう。

六、新境遇に
順應せよ

因新境遇に順應せよ 實業界に入つた當座は、誰でも永年の學生生活に比べて、餘りに急激なる境遇の變化に苦痛を覺えるものである。即ち、そこには殆ど自由といふものなく、萬事主人や上者の命のまゝに動かねばならず、又日々の仕事は實に木杓的のことばかりで單調を極め、そこに仕事の趣味などは容易に求め難く、しかも始めての仕事のこゝとして仲々思ふやうに行かず、日々失策ばかり繰りかへし、これで果して將來相當にやつて行けるやうになることが出来るものであらうかといふ不安をさへ、感ずるに至るものである。斯くして自然に故郷がなつかしくなり、父母兄弟が戀しくなつて、學生時代の自由な生活を偲ぶやうになる。かうなれば、自分の現在の仕事は益々苦痛となつて趣味は湧かず、日々倦怠を覺えるばかりで仕事に身が入らず、地位そのも

のに不満を感じるやうになる。それで成功しようなどは、思ひもよらぬ事である。故に最初は其の新しい境遇がびつたりと自分の氣持と合はなくとも、こゝを生涯の奮闘の場所と決めた以上は、すべて自分を捨て、其の新しい生活に馴れるやうに力めることは、如何なる職業に在つても必要である。斯様に努力して行けば、其のうちに自然に其の境遇に順應して次第に生活が愉快になり、やがてそこに自分の安住の世界を見出し得るやうになり、始めて自分の新生活が展開され、仕事にも練達すれば、事業成功の機微をも悟るやうになるものである。

新聞を讀め 新聞は今日の社會生活に於ては、實に衣食に次いで缺くべからざる心の糧である。即ち社會に於けるあらゆる出來事の變化を時々刻々報導して、以てあらゆる階級に對して生きたる指針を與へるものである。政治家も、學者も、實業家も、其の立場は異つてゐても、夫れ／＼有用なる新聞記事の報導に本づいて、そこに各自の指針を

立てるのである。されば新聞を一日讀まねば、それだけ社會の進歩に遅れをとることになるのである。別けても實業家にとつては、他の如何なる階級の人々にも増して、新聞と離れ難き關係に立つものである。即ち實業家はすべて日々の新聞記事によつて、全經濟界の動向を察し、新しい活動の機會を捉へては、問髪を入れざる機敏なる處置を採る。若し實業に携はる者にして、新聞記事を等閑に附する時は、恰も羅針盤のない船舶の如く、到底正しく進む事は出來ないのである。

然るに學生時代に於ては、此の如き重要な新聞記事に對して、さしたる注意を拂ふことなく、唯だ一途に學校の課業ばかりに没頭して來たのである。隨つて日々新聞に對しても、大抵社會面や運動欄に注意する位のことで、將來の自分にとつて最も大きな關係のある經濟面の讀み方さへ分らない者も少くない。併し既に活きた實業界に入つた以上は、最早從來のやうに新聞記事に無關心な態度をもつてゐてはな

らない。單に社會記事のみならず、政治記事にも、經濟記事にも日々相當の注意を拂ひ、常に時勢の動きを知り、輿論の存する所を察し、自己開發の資としなければならぬ。特に經濟面に對しては深甚なる注意を拂ひ、刻々の財界の推移についての知識を養ふやうに努めなければならぬ。

新聞を読むことは一つの習慣である。即ち新聞記事は其の種類によつては随分解し難いところもあり、特に經濟記事等は種々特殊の専門語があつて解し難いものであるが、併しこれらは勿論學術物ではないから、さう科學的研究を要する程のものではなく、要は新聞を読み馴れることが第一である。即ち斯くして新聞に親しみが出來て、一日でもこれなくては寂寥を感じるやうになれば、新聞はどの面でも決して讀みづらいものではない。新就職者は、是迄未だ其の讀み方に習熟してゐないのであるから、一日も早く新聞に親しむ習慣を養ひ、經濟欄

相場面に對する讀み方に練達することに努むべきである。勿論就職早々新聞記事を活用する機會は少いが、他日のために夙に用意する事が必要である。

八、健康第一

健康第一 各社とも新採用に當つて、特に健康といふ事を重要な項目として詮衡するに拘らず、すべての新入社員が永く其の健康を保ち得るかといふに、實際は必ずしもさうでなく、間もなく其の健康を損ねる者が多い。前にも述べたるが如く、實業界に於ける仕事は仲々の激務であつて、其の地位が高まり、責任が重くなるに従つて、日々の仕事は益々繁激となり、時に就眠も十分でないやうな場合すら珍らしくない。況して健康のために特別の休暇等を取ることも容易ならず、結局頑健なる身體を有し、如何なる激務にも不然としてこれに堪え得る者が、最後の勝利者たり得ることにもなるのである。不健康なる者は、眼前に成功の鍵が横たはつてゐても、それをつかむことが出来ない。

誰でも學生時代に於ては、萬事自由であるために、思ふまゝ、十分の運動をなすことも出来、随つて常に精神も爽かであり、身體も強健である。然るに一旦實社會に出ると、其の境遇は急激に變化し、すべてについて拘束を受け、一時精神も憂鬱になれば、身體の運動も心に任せず、不知不識健康を害ひ勝ちになるのが普通である。斯くして數箇月を出てずして、遠大の志望を有ちながら、空しく歸郷して、靜養するの餘儀ないことになる者が決して少くはない。これが、一つの歸さとなつて、病癒えて後も、爲すこととすべてが志と違ひ、焦燥のうちに日を送ることになる。されば諸子は、先づ在學中に於て努めて身體を鍛鍊し、今後如何に境遇の變化があらうとも、其の爲めに毫も身體の健康を損ふことのないやうにすると共に、社會に出てゝからも、僅かの時間を利用しては身體の鍛鍊をつゞけると共に、一方十分に攝生を守つて、如何なる激務にも耐え得る身體を保つやうにしなければならぬ。

第八章 實力才幹の發揮

一、學歷の價値

■學歷の價値 一般に我が國では學歷を大變に重視して、立派な學歷を有たないものは、到底大きな成功を望むことは出来ないと思へてゐる人が多い。即ち中等學校を卒業した位のことは、何の役にも立たぬ、進んで大學を卒業しなければ、到底一人前の人間として社會に處することは出来ないと思へて、隨分無理をしてまで、最高學府に學ぼうとする風習がある。従つて、從來實業學校を卒へて實社會に出る者の中には、學歷に乏しい自分の將來を悲觀し、到底人並みの地位にまで昇ることは出来ないと思へる者もないではなかつた。

併し社會の實際を見るに、必ずしもさうでは無い。官界の如く萬事が學歷資格等によつて定められた社會に於ては、慥にさういふ傾向もあるが、實業界に於ては事情が餘程違つて居る。殊に此頃では學歷本

位の時代は去つて、實力本位の時代になつたのである。最高學府を卒へたからとて、必ずしも實業社會に處する上に適切な實力が豊富であるとは限つて居らず、必ずしも實社會に成功するとも決つてゐない。又學校に於ける優等生のみが、必ずしも實社會に於ての最速者であるとも斷言は出來ず、成功はたゞ眞に實力をもつて、眞面目に奮闘する者のみが占める榮冠である。たゞ今日の所では、大合社、銀行等に於て新社員を採用するに當つて、一般に學歷の如何を一つの標準とし、又人社後の昇級等に於ても、それを基準とする傾向のあることは否定し難い。併しながら、これらのことはたゞ從來からの傳統的の形式を踏襲してゐるだけのことで、眞劍な意味に於て、決して學歷のみが將來の成功の程度を規定する根本的の基準となつてゐるのではない。少し大きい所に眼をつけて見ると、結局は其の人の人物と、實力と、努力との如何に歸着するのである。されば假令中等程度の學歷だけしかないものと

雖も、其の人物次第、實力次第では、忽ち頭角を現はし、學歷のみを頼つて居るものを一蹴して、指導的の重要な地位を占めることが出来る筈である。如何に立派な學歷を有つた者でも、實力の豊かな者に對しては、到底相伍して進むことは出来ない。されば今日各方面に於て、詮衡採用するに當つても、一面傳統に従つて學歷を考慮するものゝ、これを以て唯一の標準とはせず、必ず人物本位、實力本位に基いて採否の決定をしてゐるのである。又今日廣く實業界を見渡して、別にこれといふ程の學歷を有するでもなく、たゞ自己の人物、實力のみに依つて樞要なる地位を占め、多數の學歷に富む者を配下として、盛んに活躍し、斯界の指導者としての立場に立つて居る人も少くない事を考へたならば、學歷が少いからといつて、決して悲觀する必要の無い事がわかるであらう。中には全然學歷といふものを有たず、唯だ自分の腕一本の力によつて、最下級の地位から漸次叩き上げ、大成功を遂げて居る者も決して尠く

はない。固より高等教育を受けることを不必要であると云ふのではないが、諸子の如く中等教育を完了して直ちに實社會に進む者であつても、今後努力次第で、成功の榮冠を贏ち得ることの至難でないといふ事を述べるのである。諸子は決して、學歷等のために肩身を狭しと考へることなく、堂々と信ずるところに邁進すべきである。

■學問よりも實力 實業界に於て、斯く學歷や肩書が必ずしも成功不成功を規定するものでないといふのは、實業界に於ては學問よりも其の實力を尙ふからである。勿論學校教育には幾多の効果もあるが、實業といふ仕事は其の性質上、學問の外に更に轉變極りなき財界の動きを洞察し得る識見と、正確に機敏に實務を處理し得る手腕、才幹とを有たなければ、到底大成功を爲すことは出来ないのである。斯くの如き實際經營に對する實力は、自らこれを實地に於て體得する外はないのである。即ち實際の仕事に接觸して、實務の呼吸、取引の要領、

業界の洞察等、各般の能力を養成することが肝要である。言ふまでもなく實業界は實行の舞臺であつて、議論を事とするものでは無い。如何に高遠なる學理を説いても、それが實行力を伴はなければ、それは單なる空理空論に過ぎない。所謂畫餅である。今日實業界に於て大をなして居る人は、學殖の有無に關係なく、旺盛なる實行力に依つて其の地位を得たものに外ならぬ。

三、卒業は學問の打切にあらず

目卒業は學問の打切に非ず 以上實業家は學歷、肩書にこだはる必要なく、一に實力の士、實行の人たらねばならぬ所以を説いたのであるが、さればといつて學問の研究を不必要であると言ふのではない。學校に學ばざる者にして成功した者があるといふのは、學問が無いから成功したといふのでは無い。それらの人々は實は人一倍の學問勉強をしてこそ、始めて今日の地位を贏ち得たのである。たゞそれは形式的には學校で學んだのではないが、社會の實際に觸れ、事に當つて、間斷

なき勉強・研究に依つて、實際的の學問、生きた學問を修め、修養に努めたのである。

諸子は實業學校を卒業したのであるから、假令高遠なる専門的學殖の分量は乏しくとも、實際の仕事に當面して、それを如何にして研究をすれば正しく解決し得るかを判斷する素養を有つてゐる。即ち何事に處しても狼狽することなく、これを處理するだけの準備が出来てゐる筈である。故に學校で學んだところを基礎として、其の上に實際的の學問、生きたる修養を積むやうに、絶えざる努力を拂へばよいのである。然るに學校を卒業すれば、最早學問の研究は済んだものと心得、學究的態度を放棄する者があるが、これは甚しい謬である。今日の實業界の仕事は萬事が次第に合理的となつて、學問の上に立脚せざる経験や常識だけでは、十分にこれに處し能はざる程微妙なものとなつてゐる。されば之からの實業界に立つものは、一面に於て益々深く學問を

究め、一面に於て愈々これが實際化に努め、實力、實行力を養ひ、それらが相俟つて始めて事業の發展を期する事が出来るのである。唯だ其の學問が、單に學問のための學問になつてしまふことなく、常に實際の仕事の指導原理として、實務に役立つものとしなければならぬといふ一點に、深き考慮を拂ふべきである。

目、活眼活識の要

四 活眼活識の要 實業家たらしとする者には、生きたる學問を必要とする事は幾度も説いたことである。然るに所謂生きた學問をするためには、單に書物によつて先輩の研究の跡を追ひぬのみならず、進んで周到たる用意を以て、常に正確に物事を觀察し、判斷することが必要である。即ち日々に起り來るすべての事象について、明敏なる眼識を以て之を觀察し、推理し、判斷し、以て事の真相を闡明し、之に處して謬らざる活眼活識を有たねばならぬ。是等の觀察や判斷力に缺けたるものは、何事につけても現勢を觀て其の將來を推察することが出來ず、地方

の状況を見て其の民情を察する事も出来ず、人物を見てよく其の品性、能力を計る事も出来ず、随つて何事につけても適當な處置を執る事も出来ない譯であつて、斯くては到底實業家として成功の要件を具備せる者とは言ひ難いのである。

活眼活識を具へた者は、あらゆる方面に對して常に綿密なる觀察判斷を爲すと共に、確なる先見の明があつて、よく時勢を洞察し、時代に先驅して大衆を指導するの卓見を有し、以て前途に大きな光明を見出すのである。今日斯界に馳驅する大成功者は、いづれも斯かる資質を有する士ならぬはない。然らば如何にして活眼活識の士たんとするかといふに、先づ書物よりも社會の實際に處して實情を知ること、務め、何事でも輕率に批判し、斷定することなく、常に深思熟慮する習慣を養成すると共に、又一面他人の經驗をもよく參考し、それらを活用する力を養ふことが肝要である。

四 組織的能力の修養 時代が進歩して、何事も複雑になるにつれて、これを組織的に整理することが必要となつて来る。殊に實業界に於ては、近年すべての規模が大きくなり、事業は益々複雑化して來たのであるから、自然各般の事務を秩序立て、一絲紊れざる組織の下に能事を舉げることに留意せねばならぬことになつた。

斯の如き時代に於て、組織的能力に乏しい者は常にその遣り方が粗雑放漫に流れ、複雑なる事務に規律を立て、秩序を整へて、要不要を辨別することが出来ず、又臨機應變に仕事を正確に處理することも出来ない。これでは到底事業の發展は望み難く、又人に使はれても其の價値を認められる事は出来ない。常に數理的の頭腦を練り、事を行ふに緻密なる用意を以てし、物事を秩序づけ、分類し整理するやうな性能を養ふ事は實業界に志すもの、第一に務むべき所である。

五 獨創力の涵養 次に實業界に立つものに要求せられる條件とし

て、又獨創力のある事が必要である。斯かる人は、何事についても他人の計畫に盲従することなく、すべて自己の創意によつて自ら立案し、自ら構成することに全力を傾倒する。随つて其の遣り方は常に積極的であり、建設的である。されば他人の模倣を忌み、現在の状態を無爲に路襲することなく、常に改善改良を圖り、事物の進歩發展を促進し、斯くして文化の向上、進展に寄與するのである。由來實業界に於て成功せる者は、概して斯かる獨創力に富める人物であつて、絶えず作物製品に新考案をめぐらし、新工夫を凝らして一新機軸を出だすことに努め、進んで之を市場に出だすに當つても、常に機先を制して縦横に嶄新なる方案を立て、巧妙なる宣傳を以て進出するを常とする。然るに若しも是等の性能なく、常に他人の後塵を拜し、其の轡轡を嘗めるのみであれば、何事についてもたゞ舊態を維持するに汲々として、何等の新鮮味を出だす能はず、到底進轉常ならざる實業界の事情に應ずことは望み難

いことであらう。

然して獨創力を有つことは、其の天性・天分に依る部分も尠くはないが、又自己の自覺と努力次第で、或る程度までこれを養成することも爲し得るものである。之を養ふには第一、其の職業に對して、常に熱心にして、努力を惜しまぬことである。何人でも眞に熱心に其の業務に努力するならば、其のうちには必ず意外の思ひつき、考案・發明・發見をも爲し得るであらう。所謂天啓は斯くして得られる。今日世界の文明に貢獻せる各種の新考案・新發明の中にも、斯くして熱心に實務に従事する間に案出されたものが決して尠くはない。されば諸子は、單なる模倣を以て満足することなく、常に積極的に斯界の先驅者たる抱負をもつて、只管實地の研究に熱中し、緻密なる觀察を以て事物に接し、力めて創造力を涵養し、以て他日の大成功に資すべきである。たゞ注意すべきは眞に創造力の無いものが強て新しがらうとすれば、徒に奇を衒ふ

事になつて、必ず失敗に終る。此の間の區別は十分に立てなければならぬ。

四 數字の觀念 緻密なる數字の觀念は、すべて人間生活にとつて最も必要なものである。數字的觀念に乏しき者は、何事についても考が雜駁に流れ、或は大掴みの見方をするために、やゝもすると大なる失策に陥る。殊に實業界の仕事は、其のすべてが數字を基礎として成立したものであつて、數字觀念の如何は、其の成功不成功に最も大きな關係を有つ。然して文明が進歩すればする程、生活に數字は益々切要となり、計算上の數字は益々大きくなる。従て經濟界に活動するものは、計數の觀念並に之に對する十分の知識を有たなければ、此の大勢に順應する事は出来ないのである。實業界に於てよく口にせられる組織や整理の如きも、畢竟此の數字の問題である。故に數字的に明確でなければ、企業の基礎を明かにすべき資産狀態も、漠然たるものとなり帳尻

も合はない結果となるべく、遂に事業經營の根本方針すら立たないこととなるのであらう。されば日常數字を粗路に取扱ふが如き習慣に陥ることなく、微細なる端數と雖も、これを明確に算出する習慣を作ることに努力しなければならぬ。

第九章 堅忍奮闘の精神

一、新卒業生の弊

■新卒業生の弊 今日の新卒業生は、一と通りの知識技能は修得してゐるが、概して堅忍持久、刻苦奮闘の精神に缺けてゐる憾みがある。されば次第に仕事に慣れるに従つて、兎も角も無難に其の日々の務を果たすことは出来るが、堅忍持久、萬難を排して何所までも目的貫徹に努める強固な意志の訓練の出来てゐない者が多い。成功の原因は一にして足らないけれども、其の最も大切なことは、事に當つてどこまでも隠忍自重、奮闘努力する氣魄を有する事である。古今東西に亘つ

て、成功者と言はれる者にして、堅忍持久、刻苦奮闘の勇氣のなかつた者は一人も無い。苦境に立つてよく其の運命を開拓し、遂に成功の喜びを迎へ得た者は、すべて剛健なる意志を以て窮境を忍び、失敗に屈せず、遂によく其の逆境を切り抜けた人々である。如何なる社會に處するにも、必ず刻苦の必要がある。持久力とは自己の目的を固執して、最後まで奮闘する不屈不撓の精神力である。力の限りを盡して奮闘し、倒れて後止むの意氣を以て努力する根氣である。

實業界の行路は常に轉變極りなきもので、決して平坦々たる大道ではない。従つてこれに處するがためには、一倍の堅忍不拔の精神が必要である。一度や二度の失敗で挫折するやうなことは、到底成功することは出来ない。七轉び八起きはすべての成功者の經驗した所であるが、別けても實業界に立たんとする者にあつては、一層強く此の精神を持ち、目的を貫徹するまで惡戦苦闘を續ける覺悟を以て、勇往邁進

二、奮闘心の振起

しなければならぬ。

■奮闘心の振起 然らば如何にして斯かる奮闘心を振起すべきかといふに、先づ前途に明るい希望を有つことである。若し我が前途に何の希望もなく、何の光明をも認めないとしたならば、奮闘奮發せんとする意氣は決して生じないのであつて、唯だ其の日々を空虚な心持を有つて過す事になり、仕事に對する誠意もなければ、又其の効果を擧げんとする熱情も起らなくなつて終ふ。之に反して我が將來に希望を有ち、光明を認める者は、其の達成のためにはあらゆる努力を惜しまず、飽くまでも奮闘し、努力せんとする決意を有つて事に當る事が出来、又常に自己の信用、名譽を重んじ、行動を慎しみ、私情に打克つて、自己の事業、職務に對して奮闘するであらう。

斯くして、奮闘努力するならば、必ず其の目的を達成することが出来るといふ固き信念を懷くことが大切である。若し如何に前途に希望

を有つてゐても、小さい自分の力を以てしては、到底或は達成し得ないかも知れぬといふやうな觀念を有する場合には、到底奮闘の勇氣が十分に出来るものではない。

之に反して、我が成功に對しては何等の疑念を有つことなく、確固たる信念の下に勇奮邁進するならば、假令中途にして如何なる困難に遭遇することがあつても、其の信念に勵まされて、更に勇を鼓して突進する事が出来るであらう。成功に最も大切なものは、實に確固不拔の精神である。此の精神があつてこそ、常に不屈不撓、勤勉努力を一つの習慣として、心から愉快に事業に従事することを得べく、延いて其の事業の發展期して俟つべきである。

目豫定計畫の實行 更に一步を進めて、是等の奮闘努力の結果を最も有効に實現するには如何にすべきやの方法を考察しなければならぬ。其の爲めには事を始めんとするに當つて、仕事の豫定計畫を樹て

ることが肝要である。若し是等の計畫なく、唯だ漫然と所謂行き當りば、つたりであつては、決して其の目的を貫徹し得るものではない。すべて仕事には規律が必要であり、秩序が大切である。若しも此の如ききまりがなく、或は勝手なところで打切つてみたり、或は氣の向くまゝに際限もなく續けてみたり、すべてが無計畫的、斷續的の遣り方であつては、到底最後まで事を成し遂げることは出来ない。されば仕事を爲すには、必ず豫定計畫を立て、それに従つて着々と進めて行かなければならぬ。即ち明日の仕事は必ず今日に於て豫定しておき、明日が來れば直ちに此の豫定に従つて活動の出来るやうに準備をするのである。若し其の日の仕事が多岐に渉る場合は、豫め一々其の順序を定めて、遺漏なきやうにすることが大切である。斯くして一旦仕事に就いたならば、必ず其の順序に従ひ、時間の浪費を省き、努めて精神の散漫を防ぐやうに心掛くべきである。

斯く豫定計畫を立てることの必要は、單に明日の仕事ばかりではない、明日の豫定が必要なる如く、又向ふ一週間、一箇月の豫定計畫が必要である。尙ほ進んでは一箇年の豫定を樹てることも必要であれば、又一生涯の豫定計畫を確立することは、更に必要である。勿論遠い將來に亘る豫定計畫は、或は其の途中に於て修正し、變改する必要が起る場合もあるであらう。されど將來に涉る大體の計畫を立て、これによつて仕事の緩急順序を豫定するときは、必ずや時間も都合よく有利に使用することが出来、又仕事の進行も迅速に運ぶべく、終始一貫無駄のない眞剣な生涯を送ることが出来るのである。

併しながら、如何に其の豫定計畫が細密に樹てられたとしても、之を實行に移さなければ何の役にも立たず、それが實行されて始めて豫定計畫が生きて来るのである。即ち其の日の豫定は必ず其の日に實行し、一定の規律と順序とを以て之を結了することが大切である。今日

怠つても未だ明日があるといふやうな態度であるならば、到底立派な仕事の遂行が出来るものではない。明日になれば必ず明日の仕事と重複して無理を生じ、延いて豫定計畫の根本が破壊せられるのであらう。千里の道も一歩より始まるが如く、一日々々の仕事を怠らず勵むことに依つて、やがて一箇月の仕事、一箇年の事業も成し遂げらるべく、斯くて最終の大目的も達する事が出来るのである。されば如何なる小さな事柄であつても、毎日々々其の豫定を完全に仕上げて明日に延ばすことなく、常に多少の餘裕を存する位にして行かなければならぬ。世に成功者と言はれる人は、すべて豫定計畫の實行者であつたことを銘記すべきである。

四 精力の集中 奮闘的の生活に於て次に大切なことは、事を爲すに當つて全精力を其の一つに集中することである。古來大なる事業を成し遂げた人々の跡に就て見ても、精力集中といふ事が必ず其の條件

の一であつた事が判る。二兎を追ふものは一兎を得ずの諺は眞に至言である。

今日知名の實業家は、何れも精力の集中を實行した人々である。然るに兎に一流の實業家と言はれる人々の中には、多數の事業に關係して居るものが少くないのを、諸子は怪しむかも知れない。併し是等の人には、普通人と違つて特に其の精力が強いと考ふべき點もあるが、實際はそればかりでなく、如何に多くの事業に關係して居つても、其の中の一事をなす時は、必ず其の仕事にのみ没頭して他を顧みず、それが一先づ落着いてからでなければ、次の事は考へぬといふ風に、必ず精力の集中といふ原則を守つて居るのである。斯くてこそ多くの事業に關係しながら、夫れ／＼立派に成績を擧げて行く事が出来るのである。是等の點は、後進者たるものゝ十分に理解すべき事である。されど今後の諸子に在ては、寧ろ是等の先輩に倣はず、なるべく一つの事業を完

全に經營して行く方針を採る事が必要であると思ふ。

五、周到なる用意

周到なる用意 次に大切なことは、事に當つて常に周到なる用意を以てし、小事と雖も忽せにせざることである。大事には力の全幅を傾けるが、小事は馬鹿にしてかゝるといふ態度を採る人は、必ず失敗を招くものである。大事といつても小事の集積に外ならぬ。又小事と思つて閉却したために思はぬ失策を演じ、其の失策が本になつて大事を誤つた例は甚だ多いのである。或は小事と思つてよい加減にした事が、上役の人の注意に上つて、全體的の信用を失墜する事も有り勝ちの事である。故に諸子は在校中から事の大小に拘らず、常に全幅の注意を拂つて、手落のない様にして行く習慣をつけて置かねばならぬ。

六、成功を急ぐな

成功を急ぐな 誰でも、自己の成功の一日も早からんことを希はない者はない。出来るだけ速に目的を達すべく努力する事は、固より大切であるが、さればとて無理に成功を急ぐことは、却つて事業の失敗

を招く所以である。

勤勉努力以て目的に邁進すると云ふ事と、成功を急いで焦慮する事とは全然別物である。無理に成功を急いで、當然爲すべき手順を省けば、必ずそこから破綻を生じて、全體の計畫が崩れて終ふであらう。自分の健康を顧みず、成功を急ぐ事のみ考へて、晝夜の別なく狂奔すれば、遂に目的達成の前に斃れて終ふ。急ぎ過ぎて思はぬ失策を演ずる。これらは血氣に富む青年の最も注意すべきところである。

實業家にして失敗した人々を見るに、大抵自己の成功を急いで焦慮した事が、其の原因である場合が多いやうである。身分不相應の成功を夢みて、自己の實力を顧みず、夥しき負債をして事業を起したり、或は他人の言に乗ぜられて、借金してまでも會社の株を引受けて一時に巨利を獲んとする如きは、何れも功を急いで焦慮する心から來るものであつて、斯くて一朝財界の變動等に際會する時は、忽ち收拾すべからざ

る状態に陥つて、再び起ち得ないことになるのである。何事によらず、成功の前には一定の順序・道程がある。随つて、たとへそれが迂廻を要する順路であらうとも、決して無理な近路を取らず、一步步堅實に此の行路を辿ることによつて、始めて達成せらるべきである。「急がば廻れ」「急いては事を仕損じる」とは、よく此の焦慮を戒しめた言葉である。時に他の成功した事業の結果のみを見る時は、何の苦もなく容易に到達したやうに思はれることもあるが、併し其の實際の過程を熟視すれば、そこには幾多の迂餘曲折があつた事がわかるのであつて、焦らず、隱忍自重して、履むべき道を履む所に成功の眞の秘訣がある。

青年の中には、唯だ徒らに自己の成功・榮達の速かならん事をのみ望む者があるが、併し如何程焦慮しても、履むべき道を履まずして、其の目的を達し得るものでは無い。諸子が成功・榮達を望むならば、先づ自己の人格を磨き、實力を養成し、常に研究的態度を失はず、熱誠を以て倦ま

ず撓まず全力を其の事業に投ぜねばならぬ。これ以外に自己の榮達を促進し、成功を収むべき如何なる近道もあり得ない。一見最も迂遠なる道行きの如く見へる此の眞面目なる態度こそ、實は最も成功を早めるところの捷徑である。

第十章 誠實勤勉の精神

■成功者は皆誠實勤勉の人 古今、洋の東西を問はず、大業を成し遂げた人は、必ず誠實勤勉な人である。誠實なる人は、常に眞面目にして正直親切であり、且つ萬事によく行き届いた性質を有つてゐる。又精勤なる人は、常に物事に對して熱心であり、忍耐力が強く、随つて世間の信用を博する。かうした資質を具備せずして、人並み以上に仕事の成績を挙げ、社會の信頼を得て、事業界に覇を稱することの出来る道理は無い。又必ずしも上に立つ場合のみでは無く、會社、農場等に使はれる

身分の者にあつても、若し是等の徳に缺けてゐては、これに商品の仕入を爲さしめることも出来ねば、又會計を委ねることも出来ず、殆ど用ひ場所の無い人間と言つてもよい。

近時我が社會の各方面に、忌むべき種々の問題が頻出する其の原因は、固より多岐であるが、誠實の徳の缺乏に歸する場合が頗る多い。特に實業家の間に不義不正なる利得を欲して、社會道德に反した行爲をして恥とせざるもの多く、惹いて實業界全體の體面を汚して顧みざるに至るが如きは、誠實の一念さへあれば決して起る筈はないのである。誠實の念のない者は、如何に表面を粉飾して社會の眼を晦まさうとしても、何時かは自然に曝露するもので、其の結果は社會の排撃を受け、破滅に陥るの外はない。如何に才智人に優れた者と雖も、誠實・勤勉の念慮のない者は、職分に對して積極的に働かんとするの熱心なく、兎角怠慢に流れ、上役の者から注意を受けると、一時は精勵してみても、

すぐにもとの怠慢に歸つてしまふために、折角の才智を役に立てる事は出来ない。不正直で、横着で、恥を恥とも思はずに不正を敢てし、常に表裏のある行爲を繰り返へして、世の信頼を裏切るやうになるのも、一に誠の一徳を缺くからである。之に反して誠の徳を備へた者は、すべての仕事に熱意を有ち、苦難を忍び艱難に堪え、よく事業の本質を理解して、一意其の發展を図る。虚言を弄せず、無理を通さず、信ずるところに堅く、眼前の小利に囚はれて卑い打算的な所が無く、従て世の信頼を博し、自己の向上を實現することが出来るのである。

■其日暮しの勤人根性 同時に卒業し、同じところへ就職した青年社員であつても、一方にはめき／＼と頭角をあらはし、長者・同輩の信頼を得て、極めて速に進展する者があるかと思ふと、又一方には一向に進境を見る事が出来ず、何時までも同じ状態、同じ地位に居つて、不満な日を送つてゐる者がある。此の如く兩者の間に甚だしい相違を生ずる

に至る原因は、素より一にして足りないが、主として、心からそれを自分の仕事として、熱誠を以て従事するか否かに依つて岐れるものである。就職の當初より、日々の仕事を雇傭主の事業とは考へず、全く自分自身の経営する事業であるといふ信念の下に、常に勞を惜まず、努力を續け、又絶えず仕事の基礎を爲す各種の研究を怠らず、一身を投じて仕事に従事する。斯かる青年は常に緊張を缺かず、精神が旺盛であるから常に健康であり、活氣が溢れてゐる。斯くして他に先んじて拔擢を受け、昇進するに至るのは當然のことである。

然るに、折角就職しても、何時までも榮進もせず、志を得ないで居るものを見るに、當初から仕事に對する熱心にも乏しく、活氣もなく、型に嵌つて、毎日與へられたる仕事を機械のやうに片づけるばかりで、所謂其の日暮しの勤人根性ともいふべき型のものが多い。斯の如き人は何事にも消極的で、唯だ間違ひさへなければよい、給料さへ貰へばよいと

いふやうな退屈的の氣分で、なるべく少い仕事を樂な方法でやつて行かうとする。然かも斯様な青年の常として、たゞ給料の多からんことを望み、それが思ふやうにならなければ、忽ち不平不満を懷き、益々不誠實となり、從て能率は愈々舉らなくなり、人に對して不愛想になり、仕事に對して不親切になつて来る。然してかういふ青年は、兎角誘惑に陥り易く、隨つて不品行に流れ易いものである。斯くして年月を経るに従ひ、知識は次第に遅れ、融通は利かなくなるに反し、虛榮心や氣位のみが徒らに高くなり、眞面目な獨立心や、尊い犠牲の精神は全然見る事は出来なくなつてしまふ。

斯く其の目／＼を暮らせばそれでもよいといふやうな無氣力を勤め人根性は、青年社員に必要な積極的の氣魄を奪ふもので、最も憂ふべきものであるが、而も之が今日一般の傾向である。青年は餘程確乎たる精神を有ち續けて行かなければ、兎もすればかうした輕薄な自己本

位の、我がまゝな根性に陥るの危険がある。此の如きは、これから實社會に入つて行かうとする諸子の、深く自戒しなければならぬところである。

三、自ら經營者の心持

目 自ら經營者の心持で 勤人根性を排するといふことは、自ら經營者の心持をもつて、日々の職分に従事することである。即ち此の事業は自分が經營してゐるのである。此の事業の成功不成功も、すべて自分自身に關する問題であるといふ考へを有つて居るならば、其の日々の行動は決して間に合はせ主義や、ごまかし主義で済ましてはゐられない筈である。誰でもそれが自分のものとなれば、一生懸命に努力するに至るのは人情の常である。故に會社に就職し、會社によつて生活してゐる者は、常に會社の爲めになることはどしどし實行して、會社の利益になるやうにと畫策するのが當然であつて、それは自己の事業によつて自分が生活するのと、何の擇ぶところはない筈である。即ち會

社が利益を挙げれば、それだけ会社も發展し、隨つて社員も亦それだけ多く利益を受けることは解り切つてゐる。歐洲大戰當時、各会社が非常の好況を呈し、社員はいづれも空前の厚遇を受けたが、其の後の不況に際會し、いづれの会社も非常の打撃を受け、延いて社員の減俸を見るに至つたのは、会社と社員との利益の相關を明示するものである。若し会社の事業が何所までも不振を續けるときは、遂に会社は破産し、解散の止むなきに至り、延いて社員は其の日から失業の渦中に投げ込まれるの外はない。此の點のみから考へても、会社と社員との利害關係が如何に密接不離のものであるかを知ることが出來よう。されば社員は常に自己に與へられた仕事に對しては、經營者としての態度を持ち、業績の上にも始終經營者としての關心を有つて、熱誠を込めて努力しなければならぬ。

然るに多くの青年社員の中には、此の眞面目な態度に出づる能はず、

日々の仕事に對して苦痛を感じ、愚痴をこぼす者があるが、是等は其の心の持ち方が根本的に間違つて居るのである。日々の仕事の完成は、やがて自分の仕事の完成であるといふ信念を有つときは、仕事の苦痛をも苦痛と感ぜず、所謂雇人根性を有するものが、常に時計の針ばかりを氣にして居るのとは違つて、其の心は常に仕事の實績によつて支配されるのであるから、何時、如何なる場合と雖も、自分の仕事といふことが頭から離れる隙はない筈である。斯くして間斷なく、我が仕事は如何に改善すべきか、又如何にすれば能率を挙げ得るか、又自分の仕事に對して如何なる知識の練磨に心掛けねばならぬか等と、諸方面に對する努力を拂ふことを怠らぬであらう。

此の如く、自分が經營者の立場に立つ時は、縱令些細な事柄でもこれを忽せにすることはない。例へば會社の物を消費するにしても、自分の物を消費すると同じ心持で對するから、出来るだけの節約を圖り、決

して會社の物であるからといふ考へで濫費するやうなことはたい然るに斯かる心掛のない者は、いくら損失があつても、それは會社の損失であるといふ氣持を以て、會社の物といへば、平氣にこれを濫費して憚らぬ、手紙を書くにも、徒らに會社の用紙を濫費したり、或は會社の用箋を平氣で鼻紙代用に使つたり、或は會社の電話を勝手に私用のために使つたり、夕方には電燈をつけたまゝで退社するが如きことをする。又、會社の器具は故意に粗暴に取扱はないまでも、少しの注意をも拂はず、其のため屢々破損せしめたり等するやうになる。斯くして永年の間に會社に對して蒙らしめる損害は、幾何の額に達するか計り知るべからざるものがある。若し彼等にして、眞に經營者の立場を理解し、自ら經營者になつた心持になるならば、決して斯かる不經濟・不親切なことをする筈なく、一枚の紙と雖も、これを有効に使用する心掛けを忘れないであらう。右の例は、たゞ經濟の方面に關してのことである。

が、此の外の事柄に就ても、其の考へ方一つで、或は會社の信用を高めることも出来れば、又會社の業績を擧げることにも出来る。斯くして社員の心掛の如何は、實に會社興廢の岐るゝ所となるのである。

四 不平は出世の禁物 如何なる社會に在つても、將來の出世・成功を希ふならば、必ず誠意を以て其の業務に努力することが大切である所以は、今まで度々述べた通りである。

それと同時に、常に遠大の目的に意を用ゐ、目前の些々たることに心を動かさず、高尚にして確乎たる信念の下に、奮闘努力することが肝要である。目前の細利を捕ふるに汲々として、遠き將來の虚りなき者は少しの事にも不平を起し、不満を感じることになり易い。例へば月給の昇進が遅いとか、賞與の額が少いとかといつては不平を起し、此の不平はやがて怠慢となり、果ては故意に遅刻をするとか、怠勤をするとかいふ風で、全く一定の俸給を支給せられて居る者としての責任觀念を

減却して終ふことにもなる。斯くして仕事の能率の擧る筈はないのみならず、此の如き氣持を以て其の會社に居ることの如何に不徳な事であるかを反省しなければならぬ。

斯く目前の僅かばかりの待遇上の問題について、兎や角と不平を並べるやうな事になるのは、自分の遠い將來に對して眞面目な考を有たないからである。遠大なる企圖の下に大事業を完成せんとする抱負を有するならば、斯の如き些々たる問題に心を悩ます筈はない。斯かることに對して、不平をこぼす餘裕があるならば、自己の仕事の進展に就て頭を働かせるがよい。「怒るな働け」之は何事をなすにも必要な心得であるが、殊に實業界に立つものにとつては最良の格言である。自分の待遇昇進の遅いには、必ずそれ相當の理由があると思はねばならぬ。眞に至誠を以て仕事に従事し、常に會社の發展を念として精勵する者は、必ず上者の認めるところとなる筈である。人の上に立ち、

人を使用する程の者は、部下の事に對し必ず相當の考を有つて居る。時に幾分の見損じがないとは言へないが、永い間には、必ず其の眞價はわかるものである。一時の見損じにも不平を言はず、益々誠實に働くならば、後に到つて本當の價値の解つた時に、一層其の人格の光りが輝くわけで、所謂禍を轉じて福となす結果を得るのであらう。

學校卒業者にして實務に就いた多數の人々を見るに、其の就職の當初にあつては、何等の差も無いやうであるが、暫くしてから其の實務上の成績に、次第に差異の現はれて来るのを見出すことが出来る。又在學中の成績と、就職後の成績とも必ずしも一致せず、學校に於て相當成績優秀であつた者が、案外就職後に好成績を挙げない者もある。之は其の職務に對して誠意を以て當るか否かに依るものであつて、斯くて一年々々次第に其の差は大きくなり、數年の後には、其の活動量に於ても、亦其の地位・待遇に於ても、著しき差違を生じて来るのである。され

ば諸子は常に心を高く大きく持ち、現在に於ける些々たる待遇上の問題に囚はれて不平を述べるなどを慎み、會社の爲めに一身を捧げるといふ眞心を以て、着實に努力を続けねばならぬ。春秋に富む諸子の將來は實に遙遠であつて、心掛一つで大きな發展を遂げる事も出来るのである。仕事を怠けて爲す事なく過すも一生であり、精勵して大に發展するのも一生である。よろしく誠心誠意を以て職務に精勵し、仕事について不平などを言はず、目前の小利に囚はれることなく、遠大なる理想を胸に描いて、其の達成に向つて努力すべきである。

四 人の二倍を働く 青年の中には、兎もすれば自分がこんなに働いてゐるのに、誰もこれを認めてくれない。これでは働くだけ自分の損だといふやうな考を起すものがある。併しかうした場合に、自分が如何によく働いてゐるかを量るものは、唯だ自分だけの感でであり、随分と自分勝手な見方から出た計量であることが多いものである。普通

自分自身では餘りに働き過ぎたと思ふ位に働いて、それで第三者からは恰度適當の働きである場合が少くない。特に新卒業生の就職當時の實際を見るに、自分以外の者はすべて皆先輩であつて、其の仕事の呼吸の分つてゐる點に於て、又其の仕事の出來榮えに於て、勿論遠く及ばぬところである。是等の先輩と相伍して行くに當つては、出來るだけの努力を拂つて、人一倍の仕事をするといふ心持で居なければならぬ。さもなくば、就職當初の第一步に於て、早くも落伍者の中につき落されることになる。初から人並みの働きをして行くつもりで居つては、何時までも人並みのことより爲し得ないのである。常に自己の力の足らざるを思ひ、これを補はうとして、人の二倍も三倍も働く決心で仕事に當る事が必要である。

常に人の二倍を働く決心さへあるならば、朝の出動時間に遅刻するやうなこともないであらう。今日は何處でも出勤の時間は決つてゐ

るが、社員の中には朝はなるべく遅く起きて、時間一杯に出勤すればそれでよいと考へてゐる者がないでもない。始業間際に駆けつけるが如きは、たとへ時間的には遅刻ではないにしても、それでは何等始業についての準備を爲す餘裕がないことになり、又狼狽、始めた仕事には必ず間違を生じ易いもので、其のために種々の過失や失敗が生れることになるのである。若し少し早や目に出勤して、一と通りの準備をしておけば、自然そこに餘裕があり、假令突發事件が起ることがあつても、決して狼狽する要もなく、着々とこれを處理することが出来るのである。此の如く誠實に精勤なる者は、必ず業績の上に頭角をあらはし、人物も認められて次第に榮達する事は確實である。又退出の場合に於ても、時計の針の進みにのみ心を奪はれて、引き寄せる思ひでひけの時間を待ち設ける者があるが、かういふ態度を以て自己の運命を切り開かうとするが如きは、所謂木によつて魚を求めるよりも難い事である。

勿論此の際故意に上役に認められようとか、又他人の前で働く振りを
見せようとかといふやうな、浅ましい動機からでなく、眞に職務に熱心
の餘り、特に慎重に残務の處理をしたり、又更に仕事の研究をしようと
して、人一倍働く者には、必ずそれだけの結果が現はれる。自分は人並
の力は無いもの、それで人一倍の業績を挙げなければならぬといふ固
い決心を有つ事は、實に立身出世の第一の要諦である。

第十一章 生活安定の態度

一、始めての
収入

■始めての収入 諸子が卒業後職業に就くことになる、既に生れ
て始めて自分の汗によつて収入を得る身分となるのである。斯くし
て今日まで、別段體驗の機會のなかつた諸子の眞生活といふものが、愈
々茲に開始せられることになる。此の際諸子は心を靜かにして、今日
まで經來つた諸子の物質生活の實際を反省してみる必要がある。先

づ過去に於て、諸子は自己の修學のために夥しい金錢を消費し來つたことであるが、これらは皆諸子の兩親や兄姉より受けたものであつて、諸子が自ら額に汗して得たものは殆ど絶無であつたであらう。隨つて學生時代に於ては、學資書籍代、被服類に至るまで、すべてを父兄の恵みに依頼するがために、中には是等は學生の當然なる權利であるかのやうに考へて、別に有難味や嬉しさや感謝の念を有つこともなく、日を送つて來た者さへ無いとはいはれまい。然るに諸子は就職してから、眞に自己の勞力に依つて生じた最初の金錢を手にした時こそ始めて本當に金錢の尊さについて、しみじみと味ふことが出来るのであらう。然して永年に亘つて父兄に扶養せられた其の恩恵をも、痛切に感ずることであらう。

斯くして諸子が獨立の生活に入り、漸く自己の力によつて收入を得るに至つた以上は、今後は絶対に父兄から金錢上の援助を受けないと

いふ確乎たる決心をすることが大切である。即ちこれによつて永年の父兄の恩恵に報ずることゝもなるのみならず、又自ら働いて自立することは、素より男子としての本務であらねばならぬ。然るに新卒業生の中には、今日の状態にまで潰さつけたことは、恰も自然の結果か、やうに考へて、依然として今後も生計費の不足額は、父兄に補つてもらはふ等と考へる者がある。是等は素より誤れるの甚しきもので、若しも今後生計費に苦しむやうな場合には、自分の學校の卒業に至るまで父兄の拂ふてくれた失費の如何に大きいものであつたかを思ひ遣つて、縱令父兄から諸子の生活を援助しようと言はれても、斷然其の厚意を辭退して、所謂文字通りの獨立生活に入るべき決心を定めなければならぬ。言ふまでもなく、就職當初に於ける諸子の收入は言ふに足らないのが普通であつて、定めし萬事不足勝ちのことであらうと思ふ。そこでつい永年の習慣のまゝに、父兄に頼らうといふ氣持を起し易い

ものである。併し自分の收入が如何に小額であらうとも、遣り方によつては決して生活の出来ないことはない。元來經濟生活といふものは、どんなにも伸縮の出来るもので、引き締めてやつて行けば、決して父兄に此の上ながらの迷惑をかける必要はないものである。斯くして諸子が眞に獨立生活に入つて、一人前の男子としての面目を發揮し得るに至らば、父兄の喜びは如何ばかりであらうか。定めし今日までの養育、仕送りが無意義でなかつたことを嬉しく思はれると共に、此の上もない安心を得られることであらう。諸子は深く慮り、固く決するところがなければならぬ。

■經濟生活の定則　經濟的獨立の必要は右の通りであるが、然らば進んで如何にしてかうした生活を維持して行くかといふ實際問題について、特に心すべき要點を述べることにしたい。普通誰でも收入が多からんことを欲し、それによつて生活の安定を望むのが人情である。

が、然らば果して収入の増加は、必ず生活の安定を伴ふものかといふに、決してさうとばかりは斷言の出来ない事情がある。元來金錢關係といふものは實に微妙なもので、少しばかりの手加減によつて、或は貯蓄が出来たり、又は借金をこしらへたりする。それで如何に多くの収入を得ても、徒らに生活を膨脹させるならば、矢張り残るところなく、常に家計は不足勝ちとなるのであらう。これでは少額の収入者で、其の全額を消費してゐる者と、其の結果に於ては何の違ひもない譯で、生計の苦しみの程度も亦同様である。すべて収入の如きは、高きを望めば際限のないものであるが、要は其の金額の大小よりも、寧ろこれが収支に對する心の持ち方によつて、如何やうにもなるもので、月收五十圓の者でも安定した生活も出来れば、又遣り方によつては、それが百圓に増加しても、矢張り不足を生じなければならぬことにもなる。されば諸子は將來常に自己の収入を限度とした豫算を作つて、几帳面に、規則立

つた生活をするならば、世間の収入の多い者よりも、遂かに安定した経済生活を営むことが出来るのであらう。即ち多く取ることのみに焦慮するよりも、寧ろ一面に於てこれが消費経済に心を用ゐることが肝要で、斯くしてどこまでも其の日暮しの不安定の生活を排して、必ず幾分の剩餘を産むやうに心掛けねばならぬ。

これについて考ふべきことは、俸給生活者であればボーナス賞與金、農業者であれば臨時の収益等の如き特別収入に對する態度である。即ち大抵の俸給生活者は常に半期々々のボーナスの収入を當にして、平素から掛買ひをする習慣をもつてゐるが、斯くしてボーナスを受ければ、それを直ちに平素の埋草に利用するやうな消極的の生活をしては、生涯を通じて到底経済難から救はれることは出来ないであらう。又農業者の中には臨時収入がは入れば、恰も豫期せざる豫算外の収入を得たやうな氣持になつて、忽ちにしてこれを遊樂や酒食のために費

消してしまふやうな者もあるが、此の如き遣り方は、言ふまでもなく生活の安定や向上を念とすべき青年にとつて、實に沙汰の限りと言はねばならぬ。若しも定まつた収入の中から剩餘を生ぜしめることの出來ない者にあつても、せめてボーナスや臨時収益だけは、必ずこれを見ものとして貯蓄するやうにしたいものである。これが方法としては、其のまゝ貯金するもよからうし、又有價證券を買入れるも面白からうが、更に角斯かる臨時的の収入は、斷じてこれを生活費に充當しないやうに、固き決心を有つことが肝要である。

然らば我等は、生活の安定の爲めに常に如何なる方法を探るのがよいかといふに、先づ第一に、収入の範圍内で生計を維持するといふ定則を立てることである。斯くして収入の範圍で生活をすれば、不時の特別出費のない限り、其の經濟生活は常に安定すべきは分り切つた話である。然るに實際に於て、此の簡單明瞭な眞理が容易に實行され難い

もので、こゝにあらゆる生活の不安が醸成されることになる。元來無より有を生ぜしめよと言へば、それは勿論不可能なことであるが、併し一定の収入の範囲内で生活することは、斷じて出来ないこと、は言はれない。若し青年にして此の決意さへあるならば、少し位の不自由は我慢しなるべく必要少きものに支出をせぬならば、誰でも十分實現される筈である。これが出来ないといふのは、つまり眞に生活問題を自覺して、これを一貫しようとする確乎たる意志がないからである。此の意志さへあるならば、假令収入が少からうが、又家族の數が多からうが、斷じて出来ないといふことはない筈である。兎に角諸子は、必ず収入の範囲内の支出を維持して行くと共に、尙ほ幾分かの剩餘を作り、以て不時の出費に備へるだけの周到なる心掛けを怠つてはならぬ。

第二にはこれが方法として、必ず確實なる豫算を作つてこれを實行することである。元來豫算生活は經濟上最も必要なことで、大は國家

の財政から、小は我等の家計に至るまで、頗る重大なる意義があるのである。若し一國の豫算が成立しなければ、其の財政は行詰りに瀕すると共に、又一家の豫算が實行されないにあつては、其の家計は必ずや崩壊の危機に立つものと言はねばならぬ。然してこれがためには、必ずや身分相應な程度に生活の出来るやうに、又心身の能率を健全に維持することの出来るやうに考慮すると共に、更にどこまでも自己の向上發展のために、生活の安定を期することを豫算の眼目とし、假りにも不合理なる豫算の立て方をして、折角の向上を阻害するやうなことがあつてはならぬ。尙ほ又生活の合理化を研究して、絶えず豫算の改善に心掛け、豫算をして固定化せず、常に改善進歩をするやうに、常に研究的態度を失はぬことが大切である。

第三は豫算はこれを嚴重に實行することが肝要である。即ち豫算を如何に巧妙に立て、も眞に誠實にこれを實行するのでなければ何

にもならぬ。然るに誰でも、自己の生活の改善を痛切に感じた時には、大いに決心して豫算生活を始めてはみるが、そこは人情の悲しさで、日ならずして斯かる規則正しい生活に堪えられず、何時とはなくにだらしのないもとの生活に歸へり勝ちなものである。さればこれが爲めには、最も強固なる意志を以て、實行の途中に於て濫りにこれを變更することなく、どこまでも一念を貫徹して行かねばならぬ。

此の如き生活の合理化に力め、なるべく冗費に亘ることはこれを避けて、少額と雖も貯蓄に力むべきである。勿論當分は貯蓄といつても少額には違ひがないが、如何に少額なりとも、これを月々と累積する其の將來の結果に思ひを遣つて、決してこれを輕視することなく、豫算に於て、必ず將來のために天引きをして、其の幾分を繼續的に積立てることに心掛けねばならぬ。斯くして行けば、いざといふ場合に役立つのみならず、其の生活の氣持は極めて安らかで、且つ絶えず緊張した生き

甲斐のある態度を有ち続けることが出来る、勿論如何に蓄財が大切だといつて、我等は決して諸子に守銭奴たることを笑罵してゐるのではない、世には少し貯蓄が出来ると、僅かの金も出し惜んで、當然出すべき場合でも出さうとせず、諸方の義理を缺くことを顧みぬのみか、萬事が消極に陥つて、將來益々發展しようがための原動力たる修養研究の費用までも惜しんで、只管半老人のやうな態度を執る者がないとは言へないが、是等は誤れるの甚しきもので、前途有爲の青年は、決して斯ういふ消極觀に囚はれてはならない、要は冗費を省いて生活の安定に志し、後顧の憂ひなからしめることに力めると共に、益々勉勵努力して、將來の向上發展を圖ることにある所以を忘れてはならぬ。

目次に交際費の節約 諸子が實業界に處して、多くの人々と交はつて行く爲めには、交際關係の諸經費は、生活費中必ずしも無くしてはならぬものである、併しながらこれは若し一步を誤れば、交際費の領域を

越えて、時に虚榮費とも、見榮費とも化し易い性質のもので、特に警戒を要する。即ち青年は、兎角長上同輩に對して、圓滑な交際を持続することとは、將來の成功、榮達の上に缺くべからざる要件であると心得、時に身分不相應の體裁を作つたり、收入に釣合はない買物をしたりすることになる。併し何と言つても、身分に相應せぬ交際は、其の者の收入に對比して無理を敢てすることであるから、結局は行き詰りの時期が來るのは必定で、遂には淺ましい不正行爲を爲して身の破滅を招くことさへ少くはない。又次第に交際の範圍の廣くなるにつれて、慶弔送別款迎等を始め、或は忘年會や、盆暮の贈答や、轉宅祝等の機會が、次ぎから次ぎへとあらはれて、實に際限もないであらう。若しもかういふことのすべてについて、人後に落ちざらんことを努めるならば、それこそ自分の全收入を投じて、尚ほ足りないであらう。然るに青年の間に於ては、要は誠實を披瀝すれば済むことで、徒らに見榮を張らんがために汲

をとするが如きは、何等の効果が無いのみならず、却つて心ある人達からは、其の心裡を觀破せらるべく、決して自分の信用を増し、榮達に向ふの道ではない。加之、これが結果は、直ちに經濟生活の上に波及して、生活の不安をもち來たすものであるから、諸子は斯かる無駄な交際費は出來るだけこれを節約し、よろしく身分相應に義理を缺かない最低の程度に止めることが肝要である。然して其の爲めに生れて來る金や時間をば、將來の自己開發のために或は書籍を求め、或は調査、研究の上に振り當て、以て自己の能率を擧げると共に、又成功の道をも開拓すべきである。併し是等の事柄は青年に對しは相當大きな力を有する誘惑であつて、これを征服することは容易の業ではないから、諸子は常に鞏固な意志を有ち、眞摯な生活態度を一貫して、どこまでも經濟的獨立の確保に向つて邁進せなければならぬ。

④借金せぬこと 借金には事業の資金を借りる場合と、日常の生活

費を借りる場合との二種がある。前者は企業家と言はれる人の誰もがする通り、他に資金を求めて積極的に事業を經營するのであるから、こゝでは問題外として、後者は全く自己の収入の範圍内に於ける生活を営む能はず、所謂經濟生活の破綻から無理算段をして借金をするのであつて、これでは到底生活の安定を實現することは出来ない。元來生活上の借金は、其の生活態度の如何に依つては、これを完全に豫防し得べきことであつて、借金をしなくてはならぬ人は、もと／＼其の暮しの遣り方にだらしがなく、延いて將來に於ても決してこれが返済を爲し得ざる人である。斯くして一度借金を始めると、自ら次ぎから次ぎへと借金を重ねるやうになり、漸次これが習慣となつて、家庭生活はすべて借金の上に立てられるに至り、其の爲め生涯借金に苦しめられ通すことになり勝ちなものである。此の如くしては、一身の成功、一家の繁榮等は素より思ひも及ばぬことである。元來誰でも借金の始めは、

暫時の間の借金で、直ぐ返済するからといふことに始まるのであるが、實際に於て借金とはもと無理な遣り方であるために、なか／＼思ふ通りに返済の出来るものではなく、次第に深みに陥るばかりで、何時も此の苦しみを存負ひ通すことになる。然かも遂に借金癖がついてしまへば、人から金を借りることが、如何に恥づべきであるかといふことも感じなくなり、随つて百方畫策して、一日も早くこれを返済せねばといふ眞面目な態度もなく、一方からの催促が厳しければ、即ち他方から借りてこれを返へすといふ風に、徒らに急場を切抜けるための借金を重ねるばかりで、遂には首が廻らなくなり、身の破滅を招くことゝもなるのである。諸子は斯くして一生借金に迫はれ通す人の生活が、如何に淺ましいものであり、無意義なものであるかを考へてみるがよからう。

然るに此の如き借金常習者は別として、普通の人間であれば、借金をしてゐることが絶えず氣になつて心が常に樂しまず、なるべく借りた

人に遇ふことを避けるやうにと、始終肩身の狭い生活を送るやうになる。特に青年社員にして借金を背負ふてゐることが分れば、會社も其の者をばなるべく責任ある仕事には就かしめないやうにするであらう。蓋し自己の生活を整へることも出来ず、借金によつて日を送つてゐるやうなものは、會社の仕事の上に於ても、時にどんなことをするかも分らぬといふ風に、危険視せられるがためである。斯くては勿論青年の進路は、自ら断たれることゝなるであらう。されば諸子は、断然借金をしないといふ覺悟を有つことが大切で、時に不時の失費を要することもあるれば、又強い誘惑に囚はれることがあつても、強固なる意志を以て、何とか自分の収入の範圍で片づけることに力め、決して借金等を考ふべきではない。併し萬一どうしても此の外に方法のない行詰りが來ても、確實なる返済の計畫の立たぬ借金をしてはならぬ。斯くして若し借金をすることがあつても、返済の期日が來れば、必ず間違ひな

く正確に返済すべく、若し返済が出来ないで延期の言譯をするやうでは、次ぎの期日が來ても到底返済の出来るものではない。斯くて貸した人の感情を害するに至るは勿論、其の信用は地に墜ちるし、世間からも信頼の出来ない人物として、評價を受けることゝもなる。然かも斯く一家の生活に於て借金 of 苦しみを嘗めるやうな人間は、如何に敏腕家であらうと、才能人に秀でゝゐようと、到底事業の上に於ても成功する筈がないことを、力強く言つておきたい。されば諸子は前にも述べた通り、程度を越えた交際費を濫費したり、身分不相應の見榮を飾つたりすることなく、力めて貯蓄に心掛け、すべての買物は現金を以てすることにし、一意經濟生活の安定を計るべきである。

四 結局は人格の修養 我等は以上數章に亘つて、諸子が卒業後實業社會に處するための處世道をば、各種の方面から其の大要を述べて來た。随つて其のいづれの心得をとつて之を見るも、一として將來輕視

してよいといふものはない。然るにこれら諸徳のすべてが最後に辿り着くべきところは、結局人格修養の一點に歸結することが出来るであらう。即ち如何に智識才能に優れた者と雖も、人格の修養に於て缺くる者は、兎もすれば其の人に優れた知能をば、他の良からぬ方面に悪用するばかりで、遂に人間としての成功を遂げることは出来ない筈である。固より實業人として才智を有つことは必要であるが、唯だ其の者が修養によつて磨かれた人格者でなければ、到底永い年月に亘つて大を爲すことの出来るものではない。換言すれば、其の根柢に高潔且つ圓滿なる人格を具へ、其の上に築かれたる智識才能でなければ、決して實業界の表面に立つて活動することは出来ない。即ち才幹の有る人間は、人の背後にあつて策動的活躍を爲すことは出来るが、一旦表面に立つ時は、やがて内外より敵を受けて、所謂不徳の爲めに忽ちに手を引くの外なきことになる。

人格の修養ある人は、常に仕事に對して至誠を以て當り、熱心且つ正直である。随つて斯かる人格者に對しては、企業家經營者は安んじて留守をも預けるであらう。此の留守を預けるといふことは、經營者にとつて實に重大事であつて、容易に誰にも與へ得られるものではない。如何に才氣が溢れ、明敏なる手腕家であらうとも、そこに至誠を歛き、不正直な者であつたならば、到底安心して後事を托し得られる筈がない。苟くも留守を預けるがためには、言ふまでもなく留守中斷じて小過なく事に處し得る人物たることを要し、志操堅實、正直且つ熱心なる人こそ、此の資格あるものといふことが出来る。諸子は今後身を修めて、成るべく早く所謂留守を托せられ得る資格を有つだけの人物となり、信頼を博するに至らんことを切望に堪えぬ。

第十二章 卒業生と母校

■憧れの卒業 諸子の最高學年に於ける學校生活も、今や残り少くなつた。數箇年間憧れてゐた卒業證書を授與せられるのも、まことに僅々のうちにと迫つて來た。諸子は卒業の後或は更に高い程度 of 修學を志す者もあらうが、又直ちに實業界に乗り出して、おのがしゝ多年學堂に於て學んだ智能を實地に活用し、將來の運命を開拓すべく第一歩を踏み出す者も多いことであらう。併し其のいづれ of 方向に向ふにせよ、既に中等教育を卒へて、茲に人生の第一階梯を終つたことは、諸子の生涯に對して意義の深いことに違ひがない。唯だ此の際諸子の胸問を往來するものは、數箇年の間、毎日同窓と共に楽しく學び來つた母校への愛着と、これから愈々實世間に乗り出してから以後についての、一種の不安とではあるまいか。我等は諸子のために、是等の點に關

する心得の主要を述べることにしようと思ふ。

■母校の支柱 精神上の故郷ともいふべき母校の將來に幸あれよとの願ひは、すべての卒業生の懐くところの至情である。元來學校としての經營を全くし、其の校運を盛んにし、斯くして善美なる校風の光を發揚するは、日々これらの衝に當りつゝある學校職員と、其の中に學びつゝある生徒各自の力とに俟つべきことは言ふまでもないが、更に又其の學校の卒業生の純眞なる後援の力に期待することも、一入多大なるものがある。いづれの學校に於ても、今日隆々たる盛運を續けてゐるがためには、必ずや其の背後に於て、母校の上を思ふ多數の卒業生の支援の力に基くものが多いのである。然かも何事にも有爲轉變は免れないやうに、學校と雖も其の内部に於ける種々なる事情や、又之が周圍から來る各種の狀勢によつて、變遷常ならず、時には其の存亡にも關はるやうな危機にさへ遭遇することが絶無とは斷じ難い。此の如

き場合に於て、先づ奮然立つて母校の急に馳せ集り、之が維持挽回に當る者は、一つに卒業生の懐ける母校愛の美しい一念ではあるまいか。まことにどの地方に於ても、卒業生の心からなる有力な援助の力によつて、母校を支援した實例は、あまりに多く見られることである。實に卒業生の母校愛の一念こそ、母校の最も強い支柱である。諸子は此の事情をよく理解して、卒業の後と雖も、常に母校のために深甚なる注意と同情とを怠らず、絶えず之が發展を祈ると共に、一朝非常時に際會することがあれば、期せずして敢然と母校に集まり、至情を以てこれを援助し、これを解決して、以て母校の隆運を維持するやうに心掛けねばならぬ。

■母校愛 人は何事によらず、永く自分に馴れ親んだものに對しては、自ら已み難い愛着の心の起るものである。即ち我が生れた家、我が住み馴れた郷土のものであれば、たとへ一木一草の微といへども、それ

に對して何ともいへぬ懐かしみの情を禁じ難いものである。況して五箇年といふ永い間、雨の朝も風の日も、そこに學び、そこに遊んだ母校を熱愛する心が、自ら湧然として起り來るのは當然のことである。回顧すれば此の間に於て、種々の忘れ難い記憶がある。彼の講堂に於て滔々と雄辯を聞はしたこと、此の運動場に於て各種の競技に我を忘れたこと、さては修學旅行の印象、野外教練の經驗等、すべてが果してなき春の夜の夢のやうに、諸子の腦裡を去來することであらう。然かも愈々此の母校を去つて、遠く異郷の地に住むやうになつてからも、事ある毎に思ひ起すのは、故郷の山川と共に、また更に愛着深き母校の面影でなくてはならぬであらう。斯くして母校時代の思ひ出は、其のすべてが未だ濁りに染まぬ如何にも美しい清らかなる追懷の種であらうし、又此の思ひ出こそ濁り勝ちなる浮世の荒浪の中に身を投じた者にとつては、此の上もなき清涼劑であらうと思ふ。諸子は單に卒業の當時

に於てのみならず、何時までも若き時代の學生生活の思ひ出と共に、又純眞なる母校愛を失ふことなく、自分の社會的地位の進むと共に、尙更母校の發展のために努力を惜しまないやう、特に切望しておきたい、

四 先輩の感化　すべて我等の修養について、頗る重大なる刺激暗示を與へられるものは、所謂大成功者と言はれる人々の立志談なり、奮闘傳なりを聴くことである。これがために、學校でも時々歴史上に名を印せられてゐる程の大人物の事蹟を、修養發奮の模範として聴かせられるであらう。然るにかうした大經世家英雄豪傑に對する心持は、兎角事餘りに崇高に過ぎて、我等凡人に於て到底到達し能はざる拔群の境に在る人々の如き感じを與へるもので、進んで自分も其の人々の言行に倣つて邁進して行かうといふやうな、痛切な勇猛心の起ることは困難なものである。つまり我等には、餘りに縁遠い存在のやうな感があるのである。然るに其の成功者といはれる人が、事實現代に生きて

ある人であり、然かもそれが我が母校の出身者であるといふ場合に於て、それらの人々から生氣躍動する立志談や、苦心談を聴くことが出来るならば、其の受ける刺激感動の程度は、到底同日の談ではない筈である。斯くしてこそ始めて彼も人なり、我も人なり、彼が我と同じ學校の卒業生である以上、我とても進んで發奮努力をするならば、彼と同じ成功を収めることは、必ずしも不可能とはいはない筈だといふ力強い信念が、そこに湧いて來るのであらう。要するに刺激の目標が著しく現實的であり、又受ける感じが力強い生氣を帶びてゐる意味に於て、切々として我等に迫るものがある。此の點諸子の深く思ひを致すべきところである。

然るに諸子は、今や將に新しく其の先輩といはれる者の列中に入らうとしてゐる。斯くしてこれまでは先輩からの刺激や感化を受け來つた地位を轉倒して、やがてこれらのものを後輩の者に與ふべき立場

に轉ぜんとしてゐるのである。随つて之が責任の重大さを感じると共に、又將來實業界に於ける相當の成功を収めた曉に、歸り來つて此の講堂に立ち、然して後輩に對して我が半生の奮闘を物語る時の心事を思ひ遣るならば、自ら諸子の胸は光明に充ちた高鳴りを感じることであらう。言ふまでもなく諸子の前途には、幾多の困難と障礙とが横はつて、これを切り開くことは素より容易の業ではあるまい。されど勇往邁進、尙くまでもそれを押し切つて、次第に母校の先輩としてのよき刺激と、強い感化とを後輩に與へ得る境地に進むことが、自己の重大なる使命であり、責任であることを自覺せねばならぬ。

因將來の相談相手 以上は主として、學校を中心として見たる卒業生の立場についてであるが、尙ほ卒業生自身にとつて、今後母校とどんな交渉が續けるべきであらうか、先づ諸子は、母校をば將來に亘つて最もよい相談相手であるといふ理解を以て、何くれとなく身上のこと

を母校に相談することが肝要である。すべて如何なる學校でも、其の卒業生の前途について種々と配慮をするのは當然であるが、特に實業學校に於ては、其の大部分の卒業生が直ちに實社會に打つて出る關係上、是等の關係は最も密接であるのが常である。且又、學校は卒業生の個性、其の長所、短所を十分に知悉してゐるのであるから、卒業生は常に身上について、何事をも先づ母校に謀つて事を決するのは、最も賢明な態度である。然るに卒業生の中には、兎角母校と疎遠になり勝ちで、卒業後一度も母校の門をくゞらぬといふ者さへないとはいはれぬ。勿論これらは甚しい心得違ひである。尤も卒業後母校を訪ねても、校長を始め職員方に更迭があつて、かねて親しくしていたゝいた方々も居ず、全く面識なき方ばかりとなつてゐるといふやうなことも無いとはいはれぬ。かういふ場合は、何だか折角の期待を裏切られたやうな氣持になり、これが原因となつて次第に母校から遠ざかることになる。

併し職員の更迭は、どの學校でも免れ難いことであるのみならず、又たとへ新しい方が來られても、卒業生に對して連絡を圖らうと思はぬ方
はあり得ないから、よろしくさういふ氣持を拂して、こたはることなく、
更めて新しい方々を相談相手として、指導を請ふだけの寛い心持が欲
しいものである。

同窓の親睦 學窓に在る時と、實社會に出でた後とを問はず、同窓
の友は互ひに親しみ合ひ、扶け合つて、どこまでも相交はつて行くべき
ものである。随つて是等の人々から受ける有形無形の利益は、まことに
數へることも出來ないものである。即ち先輩はよろしく後輩に深
い同情を有ち、其の就職方についても百方斡旋の勞を執つて、身の安定
を圖つてやり、又種々の相談相手になつてやつて、經驗の淺い後輩のた
めに、常に其の將來を誤らぬやうに、溫い指導に任じてやるのが當然で
ある。又後輩としては、常に謙虛な氣持を有つて、母校の先輩を尊敬し、

信頼して、相談相手にもなつてもらひ、其の指導後援を仰ぐべく、決して生意氣な態度を以て對したり、又それを敬遠するやうなことがあつてはならぬ。斯くして先輩は後輩を愛撫し、後輩は先輩を尊敬して共に共存共榮を圖ることは、單に同窓相互のためであるのみならず、又實に母校の發展に寄與することの甚大なる所以を考へて、常に相扶けて共に多難なる實業界に於て成功を期すべきである。

現代農業修身書

上級用 終

附 錄

現代中等學校作法要項

例 言

一、禮儀作法の訓練は、國民生活の上に極めて大切であるが、特に將來實業界に立たんとする者にとつては、一入切要な修養であるのに、從來兎もすればこれが附却せられ勝ちなのは遺憾の極みである。本書では、附録として之が要項を載せて、日常習熟の機を與へるやうに、こゝに特別の考慮を拂つた。

一、此の作法要項は、中等學校の男生徒にとつて必要な日常作法の要項を、平易に列擧したものである。

一、此の要項は、文部省調査の中等學校作法教授要項を中心として、現代に於て最も適當と認めた諸作法を説くことにした。

目次

第一章	居常の心得	一
-----	-------	---

第二章	姿勢及び進退	二
-----	--------	---

第一節	姿勢	二
-----	----	---

第二節	歩行及び廻旋	三
-----	--------	---

第三節	著持・雜檢・並に苦座・起座	四
-----	---------------	---

第四節	建具等の開閉出入	五
-----	----------	---

第三章	敬禮	六
-----	----	---

第一節	敬禮の心得	六
-----	-------	---

第二節	普通禮	六
-----	-----	---

第三節	最敬禮	八
-----	-----	---

第四節	行幸・啓拜觀の場合の敬禮心得	九
-----	----------------	---

第五節	通過・行建及び教室内の敬禮心得	一〇
-----	-----------------	----

第六節	著帽したる場合の敬禮心得	一一
-----	--------------	----

(附) 握手禮

第四章 服 装

第一節 服裝の心得

第二節 禮 服

第五章 授受進撤

第一節 授受進撤の心得

第二節 茶 菓

第三節 用 具

第四節 文 書

第六章 招待及び應招

第一節 招待の心得

第二節 應招の心得

第七章 食事及び饗應

第一節 食事の心得

第二節 日本食及び其の饗應……………二二

第三節 西洋食及び其の饗應……………二三

第八章 言語應對……………二六

第一節 稱呼及び敬語……………二六

第二節 應對の心得……………二七

第九章 訪問の心得……………二八

第十章 祝賀告送別慰問弔問等の心得……………三〇

第十一章 接遇の心得……………三三

第十二章 紹介の心得……………三五

第十三章 贈答の心得……………三六

第十四章 集會の心得……………三九

第十五章 通信及び交通……………四〇

第一節 通信の心得……………四〇

第二節 交通の心得……………四一

第十六章

祝祭日の心得

四二

第十七章

家例及び祭忌

四三

目次終

現代中等作法要項

第一章 居常の心得

一、常に儀容の端正ならんことに注意し、粗暴に涉り、横暴に流るゝが如きことがあつてはならぬ。



儀容端正に歩行

ぬ。

- 二、起臥・食事・其他日常自己の爲すべき事に就いては、一定の規律を守るべきである。
- 三、他人に迷惑を及ぼし、又は己の便宜のみをはかるが如き舉動があつてはならぬ。
- 四、身體は常に清潔にして、人に不快な感を與へぬやうにせねばならぬ。

五、衣服・履物・其の他身邊の物品は常に其の整頓に注意することが肝要である。

六、自己の威容・風采等を衒ふが如きことがあつてはならぬ。

七、外出せんとする時は、豫め行先・歸宅の時刻等を告げて、父母又は長上の許可を受くべきであ

る。

八、外出・歸宅の際には、父母又は長上に挨拶を爲すべきである。

九、聴見・立聞・耳語等をしてはならぬ。

第二章 姿勢及び進退

第一節 姿勢



歸宅の挨拶



規正しく勉勵

一、直立の姿勢 兩足の踵を接し足尖を凡そ六十度に開き、上體を眞直に保ち、下腹部に稍力を入れるやうにし、兩手は自然に垂れ、口を閉ぢ、眼は前方を正視する。

二、著椅の姿勢 成るべく深く腰を掛け、足を正しく床の上に揃へ、上體及び下腹部は直立の姿勢

に於けるが如くし、兩手は膝の上に置き、若くは軽く之を組み、口を閉ぢ、眼は前方を正視する。
三、正座の姿勢　兩足の指を少しく重ねて座し、上體を眞直にし、下腹部に精力を入れるやうにし、兩手は膝の上に置き、若くは軽く之を組み、口を閉ぢ、眼は前方を正視する。

第二節　歩行及び廻旋

一、歩行の際は姿勢を正しくし、歩調を整へるがよい。

二、室内は無論、廊下、階段等に於ても靜に歩み、特に靴の聲なるときは、爪先に精力を入れて音のせざるやうに注意する。

三、室内を歩行するときは、敷居を踏み、又は物を踏み越え、若くは器物等に踏まないやうに注意する。

四、道路は通常左側を歩む。但し、軍隊に逢ひたる時は右側に避ける。

五、車馬と同行するときは、少しく俟て、同行するを請ふ。或は同行の際は、急に他人と談話等をしてはならぬ。

六、老人、幼者、婦人等に逢ふときは、道を譲り、又同行の際は、或るべく之を保護するやうに注意する。

【注意】

道路歩行中係むべきことは左の諸點である。

1. 杖を振り廻し、又は腰物を引摺ること。

2. 人並、車道の別を素すこと。

3. 街路に佇立して他人の通行を妨げること。

4. 街路に於て放歌し、口笛を吹き、其の他喧騒に涉ること。

5. 蓋に街路に痰唾を吐き、又は紙屑等を棄てること。

6. 通行人を凝視し、若くは其の容貌、服装等を批評すること。

7. 歩行中食物を口にするること。

七、迴旋せんとするときは、先づ向はんとする方の足を斜に後に引くと共に、其の方に徐に廻るがよい。

八、迴旋するには、上座に向ひて廻るを通例とする。

第三節 著椅離椅並に著座起座

一、椅子に著くには、先づ其の左側左方上座なるときは右側に於て兩足を疊へて敬禮し、右手又は左手を椅子に掛け、左足又は右足より進んで著椅の姿勢を取る。

【注意】



ふを可許てい叩を扉



くつに子椅

人と相對して著椅せる場合は、足を組むのは禮でない。

二椅子を離れるには、先づ其の前に立ち、右手又は左手を椅子に掛け、左足又は右足より斜に椅子の左側又は右側に退き敬禮する。

三座に著くには、兩足を揃へて兩手を膝に添へ、左足を少しく引き、先づ左膝を突き、次に右膝を突き、次に右膝を揃へて座る。

四座を起つには、兩手を膝に置き、先づ兩足を爪立て、右膝を少しく立て、上體を屈せざるやうにして徐に立上る。

第四節 建具等の開閉出入

一、他人の室に入らんとするときは、日本室の場合には先づ許可を求め西洋室の場合には、先づ軽く扉を叩いて應答を俟つ。

二、扉を開閉するには、右開の場合には、右手

にて把手を取り、之を開くと共に旋りながら室内に入り、内側の把手を左手に持替へ、靜に正しく閉ぢる。左に開閉する場合には、此の反對にする。

三、戸、障子、襖等を右に開くには、右手を引手に掛けて、先づ少しく開き、次に左手で適度に押開く。又之を右に閉ぢるには、右手で引寄せ、左手を掛けて靜に正しく閉ぢる。

左に開閉する場合は、此の反對にする。

車長の座敷に在る場合は、跪いて之を開閉する。

四、障や幕等の掛つた所に入るには、其の一端を前方に押出し出るには手前に引く。場合に依つては、兩手で捲上げ、入りつて靜に之を下す。

第三章 敬禮

第一節 敬禮の心得

一、總て敬禮は恭敬の意を表することを目指す。

二、總て敬禮は適當なる場合に於て之を行ひ、敬禮を受けたるときは、必ず答禮をする。

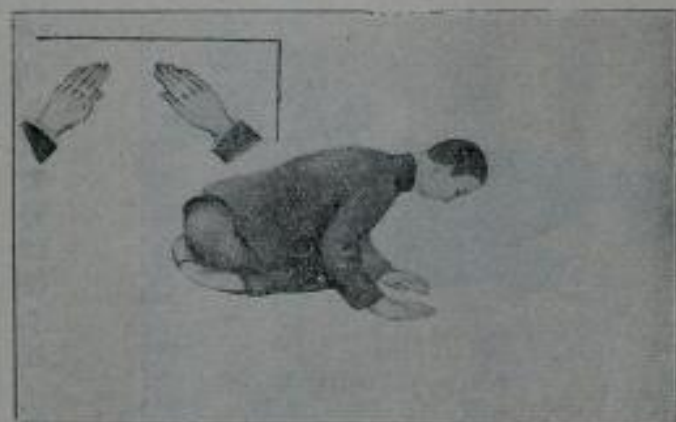
第二節 普通禮

一、立禮に於ては、先づ直立の姿勢を取り、无方の眼に注目し、上體を後に屈する。共に手は自然

に下けて其の指尖を膝頭に近づかしめるを度とし、殊更に頸を屈したり、膝を折つたりするは共に宜しくない。



禮立の通習



禮座の通習

二座禮に於ては、先づ正坐の姿勢を取り、先方の眼に注目し、兩手の指を揃へ、膝前に八字形に置き、きて指尖の間を約七握とし、徐に上體を屈し、頭は座面より凡そ十握の所まで下けるを度とする。但し殊更に頸を屈したり、腰を上げたりするは共に宜しくない。

第三節 最敬禮

一、立禮に於ては、先づ直立の姿勢を取り、先方の眼に注目し、上體を徐に屈する。共に手は自然に下げ、其の指尖の膝頭に達するを度とし、凡そ一呼吸の後徐に原姿勢に復する。但し、殊更に頸を屈する。膝を折る。とは共に宜しくない。



立禮の最敬禮



跪禮の最敬禮

二座禮に於ては先づ普通禮に準じ、兩手の食指を相接せしめ、兩肘を膝間に近づけ、後に俯伏して額の手甲に達する度とし、凡そ一呼吸の後徐に原姿勢に復する。但し殊更に頭を屈するを、腰を上げることは共に宜しくない。

第四節 行幸啓拜觀の場合の敬禮心得

一、通例行幸啓を拜觀するには、豫め帽引廻し合符等を脱ぎ、傘を畳み客儀を整へ、御車御通過の際最敬禮を行ふ。但し雨天の際は雨具の儀行ふも差支はない。

二、行幸啓は堀越又は高き位置より拜觀してはならぬ。

三、行幸啓拜觀の際は靜肅を旨とし、喧噪亂雜の舉動なく、御行列の通過を俟ち、後に退散する。

四、拜觀者雜沓の際は、幼者、婦人、老人等には成るべく前列の位置を譲るがよい。

【備考】

行幸啓の節學生生徒敬禮方

一、武裝機銃の場合

學校長及び職員は全隊の右翼に、指揮者は各中隊の右翼に位置し、豫め劍を鞘を裝せしめ、前驅の見えたるこき氣を付けの號令を下し、直立不動の姿勢を取らしめ、御車が中隊の右翼約十歩に近づきたるこき機銃の號令で一齊に機銃をなさしめ、御車が中隊の左翼約十歩

を過ぎたるときはこの姿勢に復せしめる。

御車が中隊の左翼より通過するときは、學校長職員及び指揮者は左翼に位置する。

二、武裝せざる場合、女生徒を含む

學校長及び職員は全列の右翼に、指揮者は各組の右翼に位置し、前驅の見入たるときは氣を付けの號令を下し、一齊に脱帽せしめ、直立不動の姿勢を取らしめる。御車が指揮者の前に達したるとき、禮の號令で敬禮せしめ、體の上部を約三十度前方に屈せしめる。柱に元の姿勢に復せしめる。

御車が組の左翼より通過するときは、學校長職員及び指揮者は左翼に位置する。

第五節 通過・行達及び教室内の敬禮心得

一、神社・御陵等の前を通過する場合には、脱帽して敬禮を爲すべきである。

二、人の前を通るときは合禮する。

三、尊長の前を過ぐるときは、少しく體を屈め、凡そ二三歩手前で斜に先方に向ひ、場合に應じて立禮又は座禮を爲す。

四、尊長我が前を過ぎるときは、立ち又は座せる儘敬禮を爲す。椅子に坐れる場合は、之を離れて立禮を爲す。

五、我が前を通る人が會禮したときは答禮を爲す。

六、軍服に對するときは脱帽して敬禮を爲す。但し、其の上服ある場合には之を爲すに及ばぬ。

七、尊長に行進したるときは、敬歩手前にて左方に避けて敬禮を爲すべく、婦人に行進したるときは、少しく手前で一體を爲す。

八、路上歩道の行列に進むときは其の縦に對し敬意を失はざるやうに注意する。

九、通過及び行進の禮を行ふに際し、携帶品あるときは、之を左手に持ち、若くは左腕に抱へるがよい。

一〇、敬禮すべき人教室等に臨みたるときは、教師先づ敬禮したる後教師又は指揮者の令にて一齊に起立し、敬禮を爲す。

【備 考】

1、教師は此の際教壇を降るを常例とする。

2、敬禮すべき人、教室に臨みたるときは、教師は其の人の身分氏名等を生徒に告げることがある。

第六節 著帽したる場合の敬禮心得

一、帽を冠りたるときの敬禮は、右手で脱帽し、其の前面を右の外眥に向け、軽く之に觸れる程に

して行ふ。

二、尊長と途上若くは廊下等に於て對話するときは、必ず脱帽する。但し、先方より著帽を勧められたるとき又は對話長時に渉るときは、會釋して之を冠るも妨けはない。

三、室内に入りたるときは必ず脱帽する。

(附) 握手禮



長者に對する握手禮

一、西洋人等に對しては、握手禮を行ふことがある。

二、握手禮を行ふ場合には、右手を出し、先方の眼に注目し、徐に先方の右手を執り、約一呼吸の間握る。

三、握手の禮は、尊長・主人・婦人により、先づ其の手を出すを待ちて之を行ふ。

第四章 服裝

第一節 服裝の心得

一、服裝は質素清潔を旨とし、分に應じたるものを着用する。

二 衣服は家の内外を問はず、取亂さざるやうに之を着用する。

三 慶弔、儀式其の他訪問等の場合には、相當の服裝を爲さねばならぬ。

四 喪服及び喪章は、一定の制規、慣習に従ひ之を着用する。

第二節 禮服

一 禮服の總裝標準は左の通りである。

上著 冬物は黒無地五ツ紋を正式とする。但し、場合により絹物等を用ふるも妨けはない。

喪服は通例淡黒色無紋のものを用ふ。

下著 冬物は白は鼠色、夏物は白無地を正式とする。但し、冬物には小紋形、更紗形及び絹物等を用ふるも妨けはない。

肌著 襦袢

帯 角帯を正式とする。

袴 禮高袴を正式とする。

羽織 黒五ツ紋を正式とする。

足袋 白。

【注意】

1. 袴は前を先に着け、後紐は正しく前にて結び、前後不揃にならぬやうに穿つ。

3. 羽織は襟の新返し、紐の結び方を正しくする。

二洋服の禮装標準は左の通りである。

品目	服種	禮服 (晩餐會・夜會又は特別の場合等に 着用す)	通常服 (儀式及び普通の舞臺等の場合に 着用す)
		燕尾服(通常禮服)	フロックコート(通常服)
帽	高帽	高帽	高帽 (但し場合に依り黒の山高帽を之 に代用することを得)
上衣	無地黒絨	無地黒絨又は紺絨	無地黒絨又は紺絨
チヨツキ	色及び地質 コートに同じ	色及び地質 コートに同じ	コートに同じ。但し夏季は白リンネル 等を用ゐるも妨なし。
ズボン	色及び地質 フット・チヨツキに同じ	色及び地質 フット・チヨツキに同じ	目立たざる絨絨を用ふ。
シヤワ	白(鈕は白)	白(鈕は白)	白(鈕適宜)
カラ	立襟又は折襟	立襟又は折襟	立襟又は折襟
ネクタイ	麻地白の蝶形若くは一字結	麻地白の蝶形若くは一字結	(適宜 但し白を用ひず)
手	白の革製	茶色又は鼠色の革製	茶色又は鼠色の革製
靴	黒の革製淺談塗	黒の革製	黒の革製
袴	(適宜)	(適宜)	(適宜)
外套	紬地絨(形適宜)	(適宜)	(適宜)

【備考】

國事に於ける通常服の場合は、ネクタイは黒、外套は黒若くは鼠色のものを用ひ、尙黒紗を左腕に纏ひ、又黒紗を以て袖の中帯を覆ふなどの慣例があるから、相當の注意を要する。

【注 意】

1、ジャツ・カラアは注意して共に雪白のものを着用すべく、其の下シャツを埋す等のことのないやうにする。

2、手套は兩手に穿つか、又は右手のみを脱するも、左手の手套は之を脱せざるを例とする。

3、黒靴は室の内外共に磨きたるを用ふべく、又室内に入る時は泥除靴を脱ぐやう注意する。

第五章 授受進撤

第一節 授受進撤の心得

一、物を授受進撤する際には相當の禮を爲し、粗忽にならぬやうに注意する。

二、物は總て先方に向け、受易いやうにして出すがよい。

三、物を進めるには兩手で出すべく、其の手輕のものは、右手のみで出してもよい。

四、總て物を撤するには、進めたるべきの作法に準じて之を行ふべきものとす。

五、座禮に於ける進撤は、著座の技之を爲す。

六、物を進撤するには、正面よりするを禮とする。

但し、卓に向へる人には、場合に依り左側後方より進め、右側後方より撤するこゝもある。
七、總て客に供する器具は特に注意して之を清潔ならしむべく、又飲食物は新鮮なるものを過ぶべきである。

第二節 茶 菓

一、茶を進めるには、茶托又は茶臺に載せて兩手で持出で、程よき所に至つて出す。

二、茶を受けるには、茶臺のものは兩手で茶碗のみを取り、茶托のものは先方の置くに任す。但し、場合によつては兩手で受けるこゝもある。

三、茶は茶碗を左掌に載せ、右手を添へて靜に飲む。



待 操 — ヒ — ヲ

四、咖啡、紅茶等を進めるには、茶碗を受皿の上に置き、匙を添へ、兩手で持出で、茶碗の把手を客の左方に向けて出す。

五、咖啡、紅茶は、先づ之に角砂糖を入れ匙で攪拌し、次に匙を皿に置き、皿の儘茶碗を左掌に載せ、右手で把手を持ち靜に飲む。
六、菓子、果物等を進めるには之を器に盛り

てはに懸せ其の物に應じ寄榻枝匙又は小刀等を添へて出す。

七菓子類は箸又は小楊枝で之を取る。各自に對し器物に就つて出されたときは物によつては器を取上げて食してもよい。

第三節 用具

一、座布團を進めるには、兩手で持出で、適當な位置を見計らひ、靜に先方の側に置く。

二、煙草法は、灰吹を客の右又は右向ふになるやうに向け、兩手で其の兩側を持ち出で、進める。

三、火鉢は兩手で持出で、手掛あるものは其の手掛なき側を先方に向けて進める。又椅子に若ける人に火鉢を出すには、相當の臺に据え、先方の右側に置くを例とする。

火鉢、煙草盆は、常に塵埃を拭ひ、灰を均らして置き、又出したる後に、火の立消しないやうに注意する。

四、扇千兩扇を進めるには、要又は柄を手前にして持出で、向直して之を出す。

五、空氣器を出すには、車駕（クルマ）のある方を前にし、適當の位置に之を据える。

六、燭臺、ランプ等は豫め點火し、兩手で持出でる。

七、料紙、硯函を進めるには、料紙を硯函の上に載せ、手前に向けて兩手で持出で、先方の前に至つて、己の前に置き料紙を蓋さ其に取り、生づ葉を翳り、硯函を先方に向けて出し、次に料紙をも

蓋を共に向直して、視面の左先方より見てに出す。

八、小刀又はナイフ等は、柄を先方に向けて出す。

九、輪を進めるには、其の内面を上にし、前部を先方に向け、兩手で縁を持つて出す。之を受けるには右手にて取る。

一〇、傘杖等は兩手で持ち、柄を先方の右手の方に出す。

第四節 文書

一、書翰を進めるには、表書を上にし、手前に向けて持出で、向直して出す。

二、書籍を進めるには、順序を整へ手前に向け、兩手で持出で、其の冊数が少き場合は、其の儘先方に向直して出すべく、冊数が多き場合は、一旦之を己の前に置き、兩手で取廻し、先方に向直して出す。

三、辭令書、卒業證書等を授けるには、之を先方に向け、其の折りたる場合には右手で開きたる場合には兩手で其の上部を持つて渡す。



卒業證書の授け方

四辭令書卒業證書等を受けるには、授けらるる人の前、凡そ三歩の處で立止まつて敬禮し、再び進んで兩手で取り、其の儘三歩退き、一見の後敬禮し、廻旋して退く。

第六章 招待及び應招

第一節 招待の心得

一人を招待して、應應せんとするときは、其の趣旨に従ひ、分に應じて相當の準備を爲し、誠意を以て客を待遇せねばならぬ。

二人を招待せんとするときは、其の事由、日時、場所等を明にし、凡そ七日前に口頭又は書狀を以て案内する。正客のある場合には、其の氏名をも通ずる。

三品中の人に対しては招待を爲さないのがよい。

四客の階次は正客は格別とし、其の他は、身分、年齢等に依つて定めらるるを劃とする。

五座禮に於ける階次は、床前を第一位、連棚なきある方を第二位、床脇を第三位とし、主人の座は之を最下位に置くべきものとする。

【注意】

日本室の上座下座は、通例床ある方を上座とし、床なき場合は、入口より遠き方、若くは正面の方を上座とする。



客の應待

六、立禮に於ける席次は、食卓の長邊の一方の中央席を主人若くは主婦に、又之に對する席を正客に充て、以下主人の右方席を第一位、正客の右方席を第二位、主人の左方席を第三位、正客の左方席を第四位とし、以下之れに準ずるを普通とする。

夫妻共に列席する場合に於ては、夫妻は中央席に相對するものとし、主人の右方席を婦人の第一位、主婦の右方席を男子の第一位とするを例とする。

【注意】

西洋室の上座下座は、通例燐燐飾欄（マントルピース）ある方を上座とし、之のない場合は入口より遠き方、若くは正

面の方を上座とする。

七、客の著用品若くは携帶品は、紛失等のことのないやう、丁寧に整理して置かねばならぬ。

八、人を招待したる場合には、主人は勿論、其の席に出入する者も亦相當の服裝を爲し、且つ特に坐作進退に注意すべきものとする。

九、客の參著したるとき、又退出するときは、主人は之を玄關等に送迎するを禮とする。

1997, 1998, 1999, 2000, 2001, 2002, 2003, 2004, 2005, 2006, 2007, 2008, 2009, 2010, 2011, 2012, 2013, 2014, 2015, 2016, 2017, 2018, 2019, 2020, 2021, 2022, 2023, 2024, 2025, 2026, 2027, 2028, 2029, 2030, 2031, 2032, 2033, 2034, 2035, 2036, 2037, 2038, 2039, 2040, 2041, 2042, 2043, 2044, 2045, 2046, 2047, 2048, 2049, 2050, 2051, 2052, 2053, 2054, 2055, 2056, 2057, 2058, 2059, 2060, 2061, 2062, 2063, 2064, 2065, 2066, 2067, 2068, 2069, 2070, 2071, 2072, 2073, 2074, 2075, 2076, 2077, 2078, 2079, 2080, 2081, 2082, 2083, 2084, 2085, 2086, 2087, 2088, 2089, 2090, 2091, 2092, 2093, 2094, 2095, 2096, 2097, 2098, 2099, 2100, 2101, 2102, 2103, 2104, 2105, 2106, 2107, 2108, 2109, 2110, 2111, 2112, 2113, 2114, 2115, 2116, 2117, 2118, 2119, 2120, 2121, 2122, 2123, 2124, 2125, 2126, 2127, 2128, 2129, 2130, 2131, 2132, 2133, 2134, 2135, 2136, 2137, 2138, 2139, 2140, 2141, 2142, 2143, 2144, 2145, 2146, 2147, 2148, 2149, 2150, 2151, 2152, 2153, 2154, 2155, 2156, 2157, 2158, 2159, 2160, 2161, 2162, 2163, 2164, 2165, 2166, 2167, 2168, 2169, 2170, 2171, 2172, 2173, 2174, 2175, 2176, 2177, 2178, 2179, 2180, 2181, 2182, 2183, 2184, 2185, 2186, 2187, 2188, 2189, 2190, 2191, 2192, 2193, 2194, 2195, 2196, 2197, 2198, 2199, 2200, 2201, 2202, 2203, 2204, 2205, 2206, 2207, 2208, 2209, 2210, 2211, 2212, 2213, 2214, 2215, 2216, 2217, 2218, 2219, 2220, 2221, 2222, 2223, 2224, 2225, 2226, 2227, 2228, 2229, 2230, 2231, 2232, 2233, 2234, 2235, 2236, 2237, 2238, 2239, 2240, 2241, 2242, 2243, 2244, 2245, 2246, 2247, 2248, 2249, 2250, 2251, 2252, 2253, 2254, 2255, 2256, 2257, 2258, 2259, 2260, 2261, 2262, 2263, 2264, 2265, 2266, 2267, 2268, 2269, 2270, 2271, 2272, 2273, 2274, 2275, 2276, 2277, 2278, 2279, 2280, 2281, 2282, 2283, 2284, 2285, 2286, 2287, 2288, 2289, 2290, 2291, 2292, 2293, 2294, 2295, 2296, 2297, 2298, 2299, 2300, 2301, 2302, 2303, 2304, 2305, 2306, 2307, 2308, 2309, 2310, 2311, 2312, 2313, 2314, 2315, 2316, 2317, 2318, 2319, 2320, 2321, 2322, 2323, 2324, 2325, 2326, 2327, 2328, 2329, 2330, 2331, 2332, 2333, 2334, 2335, 2336, 2337, 2338, 2339, 2340, 2341, 2342, 2343, 2344, 2345, 2346, 2347, 2348, 2349, 2350, 2351, 2352, 2353, 2354, 2355, 2356, 2357, 2358, 2359, 2360, 2361, 2362, 2363, 2364, 2365, 2366, 2367, 2368, 2369, 2370, 2371, 2372, 2373, 2374, 2375, 2376, 2377, 2378, 2379, 2380, 2381, 2382, 2383, 2384, 2385, 2386, 2387, 2388, 2389, 2390, 2391, 2392, 2393, 2394, 2395, 2396, 2397, 2398, 2399, 2400, 2401, 2402, 2403, 2404, 2405, 2406, 2407, 2408, 2409, 2410, 2411, 2412, 2413, 2414, 2415, 2416, 2417, 2418, 2419, 2420, 2421, 2422, 2423, 2424, 2425, 2426, 2427, 2428, 2429, 2430, 2431, 2432, 2433, 2434, 2435, 2436, 2437, 2438, 2439, 2440, 2441, 2442, 2443, 2444, 2445, 2446, 2447, 2448, 2449, 2450, 2451, 2452, 2453, 2454, 2455, 2456, 2457, 2458, 2459, 2460, 2461, 2462, 2463, 2464, 2465, 2466, 2467, 2468, 2469, 2470, 2471, 2472, 2473, 2474, 2475, 2476, 2477, 2478, 2479, 2480, 2481, 2482, 2483, 2484, 2485, 2486, 2487, 2488, 2489, 2490, 2491, 2492, 2493, 2494, 2495, 2496, 2497, 2498, 2499, 2500, 2501, 2502, 2503, 2504, 2505, 2506, 2507, 2508, 2509, 2510, 2511, 2512, 2513, 2514, 2515, 2516, 2517, 2518, 2519, 2520, 2521, 2522, 2523, 2524, 2525, 2526, 2527, 2528, 2529, 2530, 2531, 2532, 2533, 2534, 2535, 2536, 2537, 2538, 2539, 2540, 2541, 2542, 2543, 2544, 2545, 2546, 2547, 2548, 2549, 2550, 2551, 2552, 2553, 2554, 2555, 2556, 2557, 2558, 2559, 2560, 2561, 2562, 2563, 2564, 2565, 2566, 2567, 2568, 2569, 2570, 2571, 2572, 2573, 2574, 2575, 2576, 2577, 2578, 2579, 2580, 2581, 2582, 2583, 2584, 2585, 2586, 2587, 2588, 2589, 2590, 2591, 2592, 2593, 2594, 2595, 2596, 2597, 2598, 2599, 2600, 2601, 2602, 2603, 2604, 2605, 2606, 2607, 2608, 2609, 2610, 2611, 2612, 2613, 2614, 2615, 2616, 2617, 2618, 2619, 2620, 2621, 2622, 2623, 2624, 2625, 2626, 2627, 2628, 2629, 2630, 2631, 2632, 2633, 2634, 2635, 2636, 2637, 2638, 2639, 2640, 2641, 2642, 2643, 2644, 2645, 2646, 2647, 2648, 2649, 2650, 2651, 2652, 2653, 2654, 2655, 2656, 2657, 2658, 2659, 2660, 2661, 2662, 2663, 2664, 2665, 2666, 2667, 2668, 2669, 2670, 2671, 2672, 2673, 2674, 2675, 2676, 2677, 2678, 26

100

第七章 食事及び饗應

第一節 食事の心得

- 一、食事中は儀容を亂さざるやうに注意する。
- 二、食物は之を喉急に食することなく、口を開けて咀嚼する。
- 三、食器は手荒く取扱つてはならぬ。
- 四、食事は食後器中の見苦しくないやうにせねばならぬ。
- 五、食事中は成るべく座を離れないやうに注意する。

第二節 日本食及び其の饗應

- 一、箸の蓋を取るには、片手を握に握へ、他の片手で之を取り、膳の左方のものは左側に、右方のものは右側に置く。又食事が了つたときは蓋をしておく。
- 二、食事の順序は、先づ飯を食し、次に汁を吸ふ。其の他は適宜でよい。
- 三、汁あるものは勿論、本膳以外の食物は總て食器を取上げて食べる。
- 四、配膳給仕は、上座の客を先にする。膳を撤するときは亦同じ。
- 五、配膳が了つたときは、主人は客に對して挨拶を爲す。客は場合に依り之に對して謝辭を述

べることがある。

六客は挨拶を了つた後に箸を取る。又同席者のある場合は、隊長の箸を取りたる後に之を取る。

七、盃に斟点たる盃を受けるには、先づ一禮して兩手で之を取り、酌を受け其の飲み了つたときは、盃を臺に置くを例とする。

【注 意】

隊長に對して飲盃するは禮でない。

第三節 西洋食及び其の饗應

一、食堂に入つたときは直に著椅する。椅子と食卓との距離は、廣く之を接近せしめるがよい。

二、著椅の後は、兩手を軽く卓上に置く。

三、著椅したときは、卓上の「ナフキン」を取つて膝上に展べ、食事の準備をする。

【注 意】

1、ナフキンは順下に挟み、若くは胸部に懸ける等のことなく、目立たないやうに之を用ふるがよい。



洋食の食方

置くを通例とする。

七、皿の食品を食べ了つたときは、ナイフ・フォークを皿の上に揃へて置く。但し、スプーン等在つては、スプーンを皿の上に仰向けに置く。

八、多衆に會食する際は、己のみ特に後れないやうに注意する。

九、卓上の菓子果物は給仕の進めるを俟つて之を取る。

一〇、スプーンはスプーンの向縁で握り、手前の縁で音のしないやうに吸ふ。

一一、パンはナイフを用ひず、指でちぎり、適宜バターを附けて食するを例とする。

一二、饗應の際、食堂の準備が整つたときは、主人は先づ正客を食堂に案内して自己の席に就き、賓客一同と共に著席するものとする。

一三、盃を舉げて主客の健康を祝する場合には、主客一同起立して之を舉げ、互に目禮の後乾盃して箸椅するものとする。

一四、食後フイリングボールを出されたときは、之で指頭を洗ひ、又便宜厠をも洗ふ。此の際水で嗽ぎ、若くは器中に吐出してはならぬ。

一五、食事が了つたときは、客は主人に従つて徐に客室若くは控席に移る。

第八章 言語應對

第一節 稱呼及び敬語

一、皇室に關する談話には、必ず敬稱敬語を用ひねばならぬ。

二、稱呼は自他の身分に相當し、正しくして且野卑に互らぬものを用ふべく、又人に談話を交へる場合には、相當の敬語を用ふべきである。

三、自稱は通常私と稱する。同輩に對しては、僕と稱するも差支がない。

四、對稱は通常貴方と稱す。同輩に對しては、君と稱するも差支がない。

五、對話者以外の人に就いて語る場合は相當の敬稱敬語を用ふべきである。但し、自己の家族親戚等に就いては之を用ひざるを通例とする。

六、官公職爵位等は他稱若くは對稱の場合に於ては、其の人の姓に是等の名を附稱しても差

支がないが、自稱には之を用ひないものである。

七、親任官其の他高貴の人に對する對稱には、通常其の官職名爵名等に、閣下を附稱するものとする。但し陸軍部内に於ては、將官以上に閣下佐官以下には殿を附稱するを例とする。

八、喪去、辛去、死亡等の語は、一定の用例に従ひ、注意して之を誤用せざるやうにすべきである。

第二節 應對の心得

一、人々應對するときは、正しく相對し、溫容と誠意とを目ざして、成るべく圓快に談話を交ふべきである。

二、應對中は倦怠、懈怠等の態度のないやうに注意する。

三、對話中、先方の談話に對しては敬意を表し、其の要領を聴取することなく、又已の談話しないやうに注意する。

四、言語は順序及び語調を整へて簡明に發表し、單言、冗辭に涉らざるやうに注意し、又餘談等も場合の緩急に應じて斟酌することが大切である。

五、普通の談話に使用する語辭は、平易にして且野卑に及らぬものを用ふべく、並に新語古語漢語外國語學術語等を用ふるは宜しくない。

六、應對中傍見、旁見、中座等のことがあつてはならぬ。已むを得ざる用齋が起つたときは、其の

旨を述べ、若くは會釋して中座するも妨ない。

七、應對中、屢時計を暇くが加きこきがあつてはならぬ。

八、應對中、嘆息等の出るさまは、下座に向つて靜に之を爲す。

九、多人數相談話せる際、安に容れ、他人の談話を妨けてはならぬ。

一〇、對話中は、徒に論議、詭辯を弄せざるやうに注意する。

一一、觀察の間でも、疎略若くは無禮の語辭を用ふるは宜しくない。

一二、自己の才學、技藝は勿論、家の權勢等を誇辭に語らざるやうに注意する。

一三、諷刺、嘲笑等の慎むべきは勿論、苟も人の身上に關する談話は、輕卒に之を爲さざるやうに注意する。

一四、他人の面前に於て、人の過失、短所等を指摘するは宜しくない。

一五、一時の感情に驅られ、爲めに談話の體を亂さざるやうに注意する。

第九章 訪問の心得

一人の訪問するには、成るべく名刺を持参するがよい。

【注意】

一、名刺の紙質、其の大きさ等は、身分に相當したるものを用ふる。

二、名刺の文字は、読み易き書體を用ふるがよい。

二、同時に數人を訪問する場合は、先方の人毎に名刺を呈すべく、數人で同時に訪問する場合も、亦各自の名刺を呈するがよい。

三、知人の紹介なくして、面識のない人を訪問するは、禮でない。

四、年若き男女間の訪問は、蓋に之を爲さざるが禮である。

五、蓋に人を同件として訪問する等、先方に迷惑を及ぼさざるやうに注意する。

六、訪問は急用の場合の外、或るべく早朝、夜分及び食事の時刻を避けるがよい。

七、特に面會を要する訪問は、或るべく先方の都合を問合せたる後にすべきである。

八、人を訪問したときは、取次の者に對して、氏名を告げ、又は名刺を出して、簡明に來意を述べることがよい。

九、先方が他出せんとする場合、又は取込事ある場合には、急用の外は、面會を求めないがよい。

一〇、人を訪問したときは、帽、外套等を携へて客室に入らざるが禮である。

一一、客室等に案内せられた際、主人が未だ其の室に居ないときは、相當の位置に著席して待つべく、主人が出で來つたときは、椅子若くは座布団を離れて敬禮し、更に主人の趣めるを得つて復座する。

【注意】

1. 室に入つたとき、座に先客のあるときは、其の人に敬禮を爲す。其の多人數なる場合は一同に對して敬禮を爲す。

2. 同席者が尊長であるときは、己は下座に著く。

一 二客室に入つたとき、主人が既に其の室に在るときは、先づ主人次に同席者に對して挨拶を爲し、然る後、主人の指圖に従て著席する。

主人と應對中、主婦其の他家族の人が其の席に出て來たときは、敬禮を爲す。

一 三、人を訪問したる場合には、成るべく長座せざるやうに注意する。

一 四、用事の爲めに訪問したる場合は、速に其の用向を述べ、又先方が繁忙の場合には、成るべく速に談話を了へて辭し去るがよい。

一 五、退出のときは挨拶を爲して靜に退出づく、主人の見送は一應辭退するがよい。他に來客のある場合には特にさうせねばならぬ。

第十章 祝賀・告送・別慰問・弔問等の心得

一、祝賀・告送・別慰問・弔問及び弔問等には、成るべく自ら訪問を爲すがよい。是等の訪問を受けたるときは、客禮の訪問を爲すを禮とする。

訪問に代へるに書狀を以てする場合には、鄭重に之を認むがよい。

二 新年祝賀の訪問は、成るべく七日以内に之を爲すがよい。

【備考】

新年の祝賀は、家人親しく受けるを禮とする。

三 親戚知人の家に出産、結婚、嫁入り等の慶事があつて其の披露を受けたるときは、必ず祝賀訪問を爲し又は贈賀の書狀を送るを禮とする。

四 長期の旅行又は轉住等の場合には、親戚知人及び近隣に對し、告別、歸宅及び來住等の挨拶を爲す。是等の挨拶を受けたるときは、速に答禮を爲す。

五 尊長又は近親の者、長期の旅行又は轉住の爲め出産する際には、停車場、或止場等に見送り、又其の來著の際には出迎ふるを禮とする。是等の送迎を受けたるときは、速に答禮を爲すべきである。

六 病氣見舞の際には、特に談話、應酬等を慎むべく、病狀によつては、強ひて病床に臨むに及ばない。

七 病氣見舞に對する答禮は、全快の後、之を爲すを禮とする。

八 災害見舞の際には、必要に應じて援助を爲すがよい。

九 災害の見舞を受けたるときは、成るべく速に答禮を爲すがよい。

一〇 家族に不幸があつたときは、親戚知人等に對して速に通知を爲すべきである。

通知用の葉書等は其の周圍に黒框を施したるものを用ふるを例とする。

一、親戚知人等の家に不幸があつたときは速に弔問を爲すがよい。但し格別親厚ならざる間柄に在つては喪主及び其の家族に面會を求めは宜しくない。

二、遠隔の地に在つては訃告に接したるときは電報若くは郵便に依つて弔意を表すべきである。

三、弔問に對する答禮は忌明けの後之を爲すがよい。

四、會葬するときは成るべく出棺前に其の宅に到り氏名を通じて葬送を爲す。但し場合によつては直ちに其の式場に到つて葬列に列するも妨ない。

五、會葬の際は靜肅を旨とし哀悼の態を失はざる注意が大切である。



會 葬 香

一六、會葬者玉串を捧げ又は焼香を爲す場合には順次柩前に至つて敬禮し、少しく進んで之を行ひ再び敬禮して退くがよい。

一七、會葬の際は成るべく他人を訪問しないがよい。

一八、會葬に對する答禮は成るべく速に之

を爲すがよい。

第十一章 接遇の心得

一 客室應接室等は、常に其の清潔整頓に注意し、且相應の裝飾をしておくがよい。

二 來客があつたときは、取次の者は直ちに出席で、敬禮し、先方の名刺を受け、若くは氏名を聞き誤なきやうに之を取次ぐ。

三 取次の者が客を客室應接室等に案内するときは、先に立つて其の室の入口まで到り、客をして先づ入らしめ、椅子又は座右圈を導いて其の著席するをまち、一體して退くべきである。

【注意】

客の著用品、携帶品等は之を整へておく。

四 館長の客があつたときは、主人自ら迎へて之を案内し、室に入つて上座を進め、己は下座に著いて挨拶を爲す。

五 椅子に凭れる場合に於て客の入來つたときは、起立して迎へ、客を著椅せしめたる後己も亦著椅する。

六 客には速に面接するがよい。故障の爲め面會を爲し得ざる場合、直に面接し難き場合及び長時間の談話を爲し得ざる場合等には、取次のものをして其の旨を鄭重に告げしむがよい。

七、平素客の取次を爲さしめる者には、俾て接遇上の心得を知らしめおき、客に對して不作法に涉るが如きことのないやうにする。

八、客を客室に案内すれば、多季には火鉢、夏季には團扇を進める等、相當の注意を爲すことが肝要である。

九、來客中、賓客があつたときは、主人は之に挨拶を爲し、且便宜客相互の引合を爲すがよい。

一〇、客を接遇する際には、先方に窮屈の感のないやうに注意する。

一一、客を接遇する際は、家人等に對して怒氣を發せざるやう慎まねばならぬ。

一二、客のあるときは、家人は、温に其の室に入り、若くは高聲に談話、叱咤等をしてはならぬ。

一三、客の辭し去るときは、主人は自ら立圖まで送り出るを禮とする。

但し、座に修長のある場合は、便宜家人をして代つて送りしめるも差支がない。

一四、喪引籠中は遠慮して自ら送らざるを例とする。

一五、客を送つて立圖に到つたときは、客の仕度整ふを待つて挨拶し、少時見送りたる後、靜に戸障子等を閉づるがよい。

一六、客の外套等を纏はんときは、こを手傳ひ、夜分には提燈、雨天には雨具等を貸與し、又老幼、婦女には人を附添へ見送りしめる等、相等に配慮すべきものである。

第十二章 紹介の心得

一 経歴・性行等を熟知せざる人は、輕卒に之を他人に紹介してはならぬ。

二 尊長又は婦人に對して人を紹介せんときは、紹介者は豫め先方の承諾を得べきものである。

三 紹介狀は鄭重に之を認め、被紹介者の経歴・性行・自己との關係・用向等を明白に記載すべきものである。

四 紹介狀は開封の儀授け、若くは一應讀み聞かせて授けけるを通例とする。尙ほ鄭重を要する場合は別に紹介の趣旨を受紹介者に通知して置くがよい。紹介狀に代へるに名刺を以てするは略式である。

【注 意】

紹介狀は之を被紹介者に一見せしめた後、本人に交付せずして直接に受紹介者に送付するも差支はない。

五 開封の紹介狀を得たときは、一應之を授けし、厚く謝意を述べ、封じて先方に持参すべきである。

六 人より紹介狀を得たときは、處るべく速に先方を訪問して之を出し、都合を聞きたる後、更に



人を紹介する

訪問するを例とする。

七、受紹介者は成るべく速に被紹介者に面接するがよい。

八、其の場の紹介は、年少者を年長者に、卑者を尊者に引合すを通例とする。但し、紹介を免ばざる事情のあるを豫知したる場合等は、之を見合すがよい。

九、受紹介者が多数なる場合は、先づ被紹介者の氏名を通じ次に受紹介者中、地位の高き人を引合せ、其の他は列座の順に引合すがよい。

一〇、人に紹介せられたときは、場合に依り、名刺を出してもよい。先方の名刺を受けたるときは、答禮として自己も亦名刺を出すを例とする。

第十三章 贈答の心得

一、人に物を贈らんとするときは、誠意を表すことを旨とすべく、身分不相應の贈物を爲し若くは濫に之を爲すは禮でない。

二、贈物は場合に應じ、性質に従ひて其の種類・数量等を適當に選定するがよい。

【注意】

1. 贈物は成るべく、自作手製の物品、居住地の特産物等に就き、先方の實用若くは嗜好に應ずべきものを選ぶのがよい。

2. 災害慰問の場合に於ける贈物は、成るべく日用品がよい。

3. 寫眞の贈答は、親密の間の他は、蓋に之をしないがよい。

4. 花を贈る場合は、其の種類等に注意すべきである。

三、贈物の包紙は、奉書、懷紙、杉原、糊入等を二枚重ねて用ふるを正式とする。但し、小さき物は一枚を二ツ折にして之を包むも差支はない。

贈物を包むには、物を紙の相當の所に置き、先づ左方を折り、次に右方を折るがよい。金子及び小さき物等に在つては左右を折つた上、更に上下を裏に折返して長方形と爲すがよい。

四、贈物には物の大きさに相當したる水引を掛け、又鬚斗を添へるを例とする。

但し、魚鳥類及び國事の贈物には鬚斗を添へない。

五、水引は慶事又は平常の贈物には、紅白若くは紅金、のもの、國事の贈物には、黑白若くは白のものを、用ひ、之を掛けるには、白若くは金を左にして、兩輪に結ぶ。

但し、婚姻、縁組及び國事の場合には、結切にする。

【注意】

熨斗水引は、成るべく形の完全なるものを用ふがよい。

書熨斗、捻熨斗等は略式である。

六、贈物の表書は場合に應じ、包紙の中央上部に其の品目を記し、又は「粗品、御禮、薄謝、寸志、御祝、御年玉、御歳暮、御餞別、土産、御見舞、御香典、御靈前、御一料等」の文字を記するを例とする。

【注意】

品目を記したる場合は、右方上部に進上、贈呈等と記する
こゝがあり、又金子を贈る場合には、包紙の内部に其の額
を記入するがよい。

七、自己の氏名を記さうとするときは、包紙の左方下部若く
は中央下部に之を書き加へるがよい。

八、贈物は臺又は盆等に載せ、先方に向けて出すを例とする。
九、贈物を進めるには、先づ相當の挨拶を爲し、物を出した後、
一禮すべきものである。

一〇、贈物を受けるときは、先づ鄭重に之を受け、靜に上座に
置き、一禮して先方の好意を謝すべきものである。



贈物を進める

一、贈物の歌、風呂敷若くは浴衣等を返すときは婚禮及び凶事の場合の外、紙を入れるを例とする。紙移風呂敷は之を疊み、先方の器具に載せて返すがよい。

第十四章 集會の心得

一、總て集會に出席するときは、時刻を違ふてはならぬ。

二、準備を要する集會の通知があつたときは、成るべく速に參否を報ずるがよい。

若し出席の旨を通知した後、出席し難い故障を生じたときは、速に之を通知して違約を謝すべきである。

三、不參の爲め他人に全路上の迷惑を及ぼしてはならぬ。

四、出席したときは、話事係員の指揮に従ふべく、肉體の會場の設備、集會の次第等を心得置くがよい。

五、出入著席の際には先を爭ふことなく、坐作進退を靜にし、尊長を幼婦人、不具者を先にするがよい。

著席退席の際は隣席の人に會禮するがよい。

六、座次の定まなき集會に於ては、上座を避けるがよい。

七、屋内の集會に於ては、帽、外套、襪等を著してはならぬ。

八講話演説等の際は、特に静肅にし、已むを得ざる場合の外、中座退出してはならぬ。

九集會の席上に於ては、多數の人の解し難き言語を用ひ、若くは他人の惡感を惹くが如き舉動があつてはならぬ。

第十五章 通信及び交通

第一節 通信の心得

一通函の地に在る親戚、故舊、恩人等には、時々書狀を送りて安否を問ひ、又自己の動靜を報ずるがよい。

二郵便、電信等に關する規定は、常に心得置き、之に違反せざるは勿論、受信者に迷惑を及ぼさないやうに注意するがよい。

三小包郵便、速達郵便、通郵便等に依つて物を送る場合は、別に其の品目、数量、發送日時等を記載した通知を發すべく、其の物の到達したときは、亦速に接受の通知を爲すがよい。

四返信を求めに當り、場合に依つては返信用の切手、葉書等を送ることもある。

五書狀は總て簡明を目とし、相當の敬語を用ひ、又文字は成るべく読み易いやうに之を認むがよい。

六郵便物、其の他輸送品の包装は、總て之を尊重にすべく、其の表書は之を明瞭に記すがよい。

七 已むを得ざる場合の外は、着長を電話口に呼出してはならぬ。

八 電話には速に自ら出でて應對を爲すがよい。

九 電話は用談に止むべく、之を終つたときは、互に挨拶を爲すがよい。

第二節 交通の心得

一 船中に昇降の際、又は乗車券を求める等の際には、他人と先を争ふてはならぬ。

二 船中で旅行する場合は、其の船中の規則は勿論、係員の指示等は誠實に之を守らねばならぬ。

三 職務中の船車員に對し、延に談話を交へてはならぬ。

四 船車の待合室、客室等に等しいものあるときは、其の區別を察してはならぬ。

五 船中に船車に同乗するときは、便宜の座位を譲ることに注意するがよい。

六 船車中に在つては、讓讓を旨とし、自己の言動若しくは攜帶品等の爲め、同乗者に迷惑を及ぼさないやうに注意するがよい。

七 自転車、人力車、馬車、自動車等を乗用する場合、は、街路の人に危険及び迷惑を及ぼさないやうに注意を拂ふがよい。若し事故の生じたときは、直ちに進行を停止し、相當の處置を爲すべきである。

第十六章 祝祭日の心得

一、祝日に於ける學校の儀式は左の順序方式に依る。

1 職員・生徒入場 一同起立。

2 御影の置物を撤す。此の時職員・生徒一同立禮。

3 君が代の歌 合唱二回。

4 御影に對し奉りて最敬禮を行ふ。

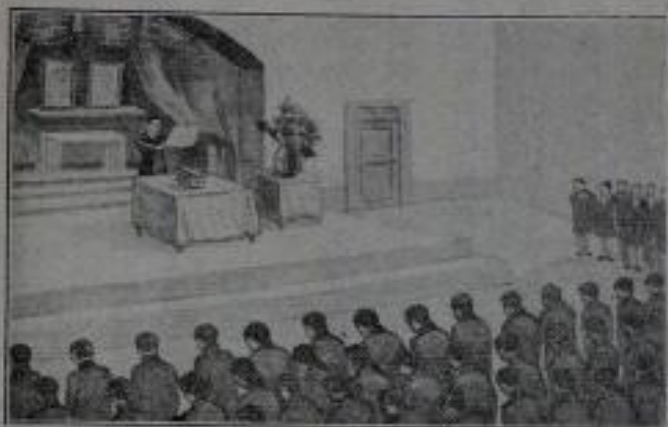
5 勅語奉讀 奉讀の始まるに同時に上體を少しく前方に傾け、謹んで拜聴し、奉讀終りたるに最敬禮を行ひ、了つて徐に原姿勢に復す。

6 當該祝日の唱歌 合唱。

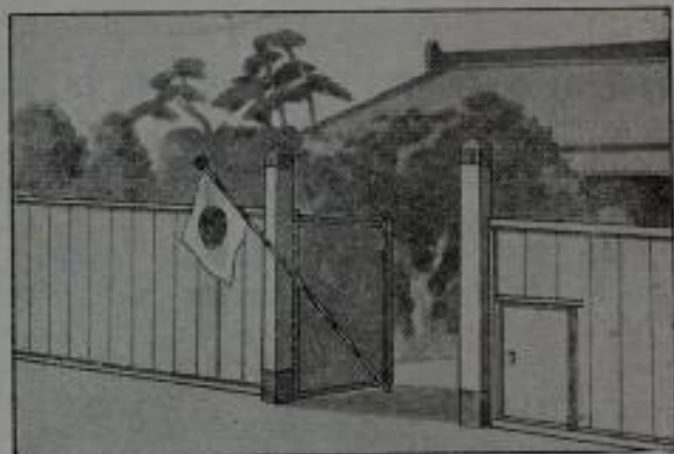
7 御影に置物を爲す。此の時職員・生徒一同立禮。

二、祝祭日には特に家の内外を掃除し、門戸に國旗を掲ぐべきものとする。

三、祝祭日には家庭の神棚に對して禮拜を爲し、又氏神・産土神等に參拜するがよい。



祝祭式に於て奉讀



方て立の旗國いし正

四 敬意を表せんが爲め、外國旗を我が國旗と交叉する場合は門外より見たる右方即ち旗竿の本は左方に我が國旗を掲ぐるがよい。

五 弔意を表する爲め、國旗を掲ぐる場合には、旗竿の上部に黒色の布片を附すがよい。

第十七章 家例及び祭忌

一 父祖の定めたる家例は之を尊重せねばならぬ。

二 神棚に對しては、家例に従ひて禮拜を爲さねばならぬ。

一月一日には夙に起き、服裝を整へ、神棚及び祖先の靈壇に對して禮拜を爲し、父母長上に新年の祝詞を述べ、

よい。

三 祖先の靈壇に對しては、家例に従ひて篤く祭祀又は法要を営み、又墓參を爲すべきである

【注意】

墓地は其の修理、掃除方等に注意する。

四 家に慶凶其の他記念すべき事のあつた場合には、祖先の靈壇に對して禮拜を爲す。

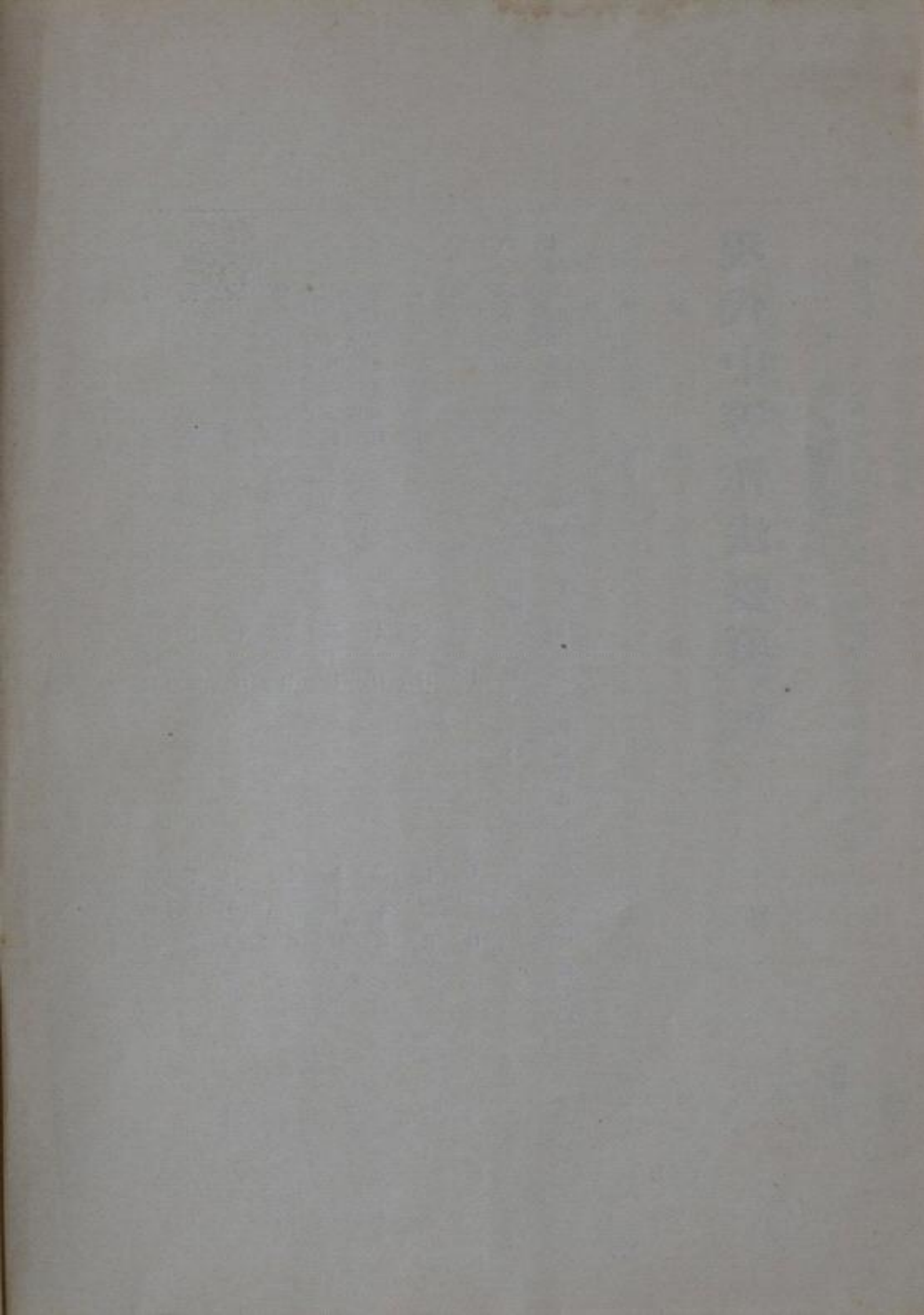
現代中等作法要項 (終)

第十七章 家例及び禁忌

養父	三十日	百五十日
養母	三十日	三十日
養子	十日	三十日
嫡孫	十日	三十日
曾孫	三日	七日
兄弟姉妹	二十日	九十日
異父母兄弟姉妹	十日	二十日
従兄弟姉妹	三日	七日
甥姪	三日	七日

六、忌服中の人に對しては相當の遠慮を爲すがよい。

七、家に慶凶其の他の大事のあつたときは、之を親戚故舊に通知せねばならぬ。



現代理業修身書

昭和七年一月十五日印刷
昭和七年一月二十日發行



著作者

清原貞雄

定價

發行者

中村時之助

東京市牛込區神田町百七拾四番地

印刷者

松岡虎王

東京市麹町區飯田町二丁目五十五番地

印刷所

京華社

東京市麹町區飯田町二丁目五十五番地

卷一金三十五錢
卷二金三十五錢
卷三金三十五錢
卷四金三十五錢
上用紙金五十錢

發行所

東京市牛込區
神田町百七拾四番地

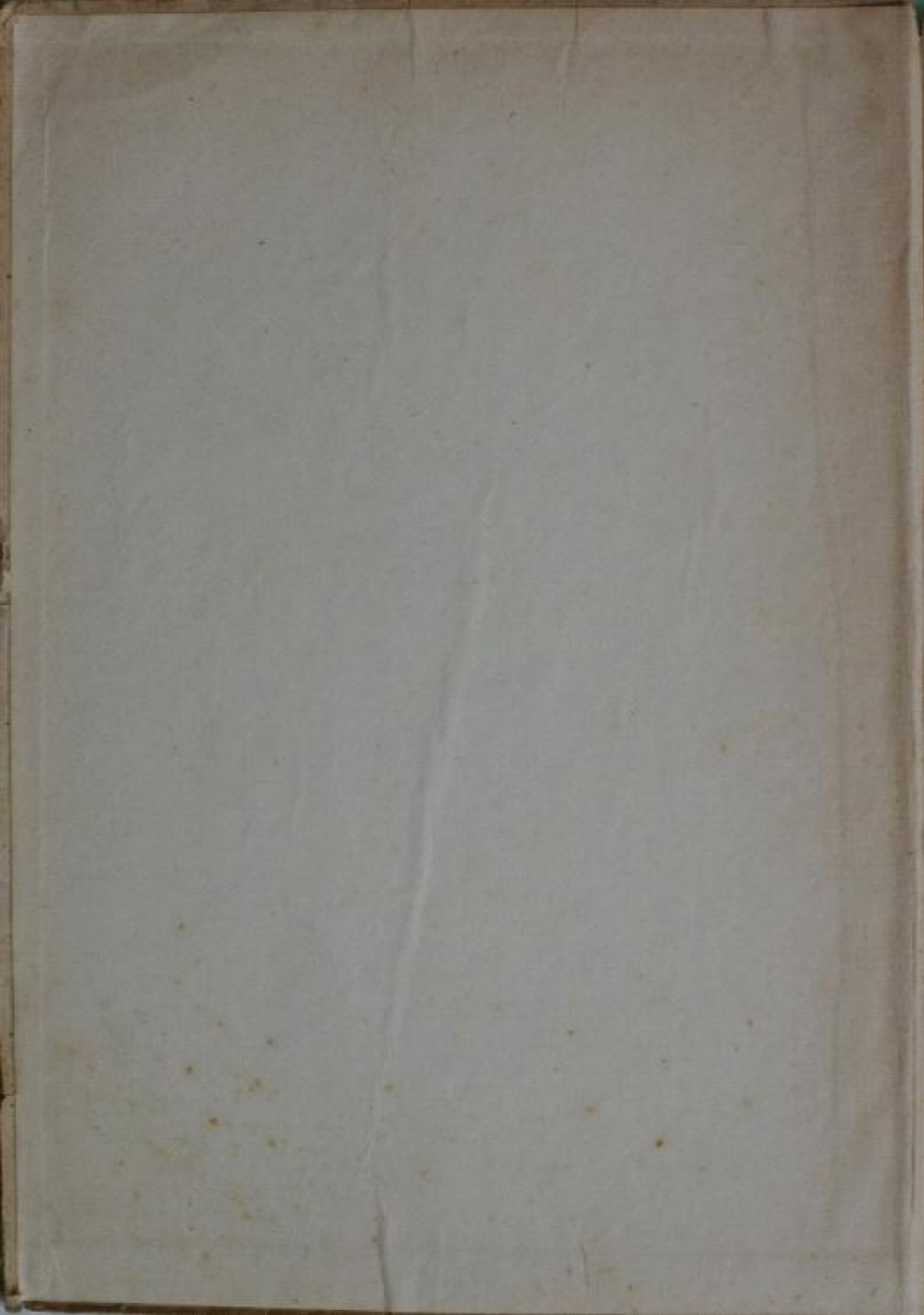
中文館書店

電話牛込三三一五番
振替東京三八四二七番

도천초등학교도서관

2014.03.03

No.





現代農業修身書 上級用 (WEB판)

2014년 6월 22일 편집

2014년 6월 23일 발행

· 편집 · 발행 : 박 건 춘

· 발 행 처 : 도 천 초 등 학 교

<http://www.dochun.es.kr/>

경상남도 창원시 진해구 충장로 10

☎ 055-544-8737
